仙台市文化財調査報告書第415集

仙台平野の遺跡群23

平成24年度個人住宅他
―国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書―

洞ノ口遺跡第19次・鴻ノ巣遺跡第14次・第17次・第18次・稲荷館跡第1次
小鶴城跡第8次・南小泉遺跡第69～71次・沖野城跡第12次・第14次
大野田官衙遺跡第10～12次・愛宕山横穴墓群第6次

２０１３年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市は「杜の都･仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれています。この風景は、私たち市民の誇りであり、将来へ守るべき大切な財産でもあります。

平成23年３月11日の東日本大震災により、東北地方の沿岸部では多くの被害が発生しました。

震災の後は復興に伴う住宅建築の増加により､平成24年度の発掘調査の件数は平成23年度と同様、震災の前に比べまして､はるかに上回る状況が続いております｡遺跡の保存もさることながら､復旧･復興は急務であります。市教育委員会としましても、皆様のご理解とご協力を賜りながら、復旧・復興への対応、文化財の保存と継承に日々努めているところです。

本報告書には、住宅等建築に先立ち本発掘調査を実施した、洞ノ口遺跡、鴻ノ巣遺跡、小鶴城跡、南小泉遺跡、沖野城跡、稲荷館跡、愛宕山横穴墓群、大野田官衙遺跡の調査成果を収録しています。

先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの大切な仕事であります。地域がはぐくんだ文化を語る上で、歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成25年３月

仙台市教育委員会
教育長　青　沼　一　民

例　　言

1．本書は、平成24年度国庫補助事業による個人住宅他補助対象事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、仙台市教育委員会が実施した個人住宅等建築に伴う埋蔵文化財発掘のうち、洞ノ口遺跡第19次、鴻ノ巣遺跡第14次、第17次、第18次、小鶴城跡第８次、南小泉遺跡第69次、第70次、第71次、沖野城跡第12次、第14次、稲荷館跡第１次、大野田官衙遺跡第10次、第11次、第12次、愛宕山横穴墓第６次の、各調査を中心に掲載している。なお、青葉区及び泉区内に所在する遺跡については、報告対象期間中に確認調査にいたる案件はなかった。

3．本書の各項の執筆は第Ⅰ章を鈴木、水野、第Ⅱ章～第Ⅴ章を小泉、水野、第Ⅵ章を斎野が行い、編集は水野が行っている。

4．本書の地図・遺構図は、特に断りがない場合、上が真北を示す。

5．遺構図・遺物実測図等の縮尺は、各図に付記してある。

6．断面図の標高は、海抜高度を示している。

7．本書中に掲載した地図は、国土地理院発行の25，000分の１『仙台市東南部、西南部、東北部』の一部を加工して使用している。

8．遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　P：ピット　SX：性格不明遺構

9．遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

C：土師器(非ロクロ)　D：土師器(ロクロ)　E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器

K：石器・石製品　L：木製品　N：金属製品　P：土製品　Q：骨角製品・自然遺物

10. 遺物実測図に用いたトーンは、その都度凡例を付してある。

11. 遺物観察表の法量は、種別により測る名称が変化するが、長・幅・厚と表現を統一した。それぞの示す部位は下図を参照されたい。器高にカッコを付した数値は残存値を、口径・底径にカッコを付した数値は復元値を示す。

12. 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田ａ火山灰（To-a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。

庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」

『多賀城－昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

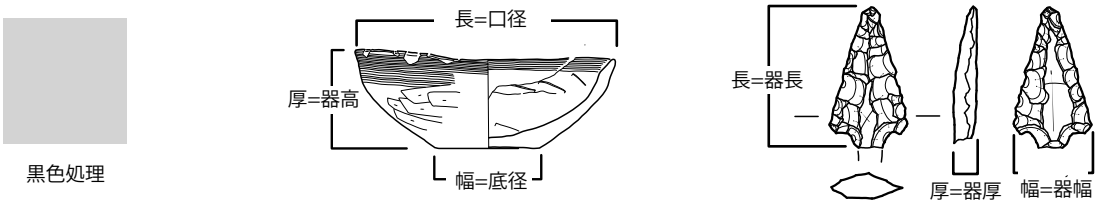
仙台市教育委員会2000『沼向遺跡第１～３次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田ａと白頭山（長白頭）を中心に－」

『日本律令制の展開』吉川弘文館

13. 引用・参考文献については、各遺跡報告の末尾に付してある。

14. 本書に関わる遺物・写真・実測図等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。



遺物観察表の計測部位と呼称

目　　次

序文
例言
目次
第Ⅰ章　調査計画と実績 …… 1
1　調査体制
2　調査計画
3　調査実績
4　調査方法
第Ⅱ章　宮城野区内の調査 …… 4
第1節　概要
第2節　洞ノ口遺跡
1　遺跡の概要
2　第19次調査
第3節　鴻ノ巣遺跡
1　遺跡の概要
2　第14次調査
3　第17次調査
4　第18次調査
第4節　稲荷館跡
1　遺跡の概要
2　第1次調査
第5節　小鶴城跡
1　遺跡の概要
2　第8次調査

第Ⅲ章　若林区内の調査 …… 33
第1節　概要
第2節　南小泉遺跡
1　遺跡の概要
2　第69次調査
3　第70次調査
4　第71次調査
第3節　沖野城跡
1　遺跡の概要
2　第12次調査
3　第14次調査

第Ⅳ章　太白区内の調査 …… 71
第１節　概要
第２節　大野田官衙遺跡
　1　遺跡の概要
　2　第10次調査
　3　第11次調査
　4　第12次調査
第３節　愛宕山横穴墓群
　1　遺跡の概要
　2　第６次調査

第Ⅴ章　郡山遺跡の調査 …… 91

第Ⅵ章　総括 …… 92

引用・参考文献

図版目次

第Ⅰ－１図　平成24年度調査実績一覧…… 3
第Ⅱ－１図　宮城野区と遺跡位置図の位置…… 4
第Ⅱ－２図　洞ノ口遺跡・鴻ノ巣遺跡・稲荷館跡の位置と周辺の遺跡…… 5
第Ⅱ－３図　洞ノ口遺跡20次調査地点と周辺既調査地点…… 6
第Ⅱ－４図　洞ノ口遺跡第19次調査…… 9
第Ⅱ－５図　出土遺物…… 10
第Ⅱ－６図　鴻ノ巣遺跡第14次調査地点と周辺既調査地点…… 13
第Ⅱ－７図　鴻ノ巣遺跡第14次調査…… 16
第Ⅱ－８図　鴻ノ巣遺跡第17次調査…… 20
第Ⅱ－９図　鴻ノ巣遺跡第18次調査…… 23
第Ⅱ－10図　稲荷館跡と第１次調査区位置図…… 25
第Ⅱ－11図　稲荷館跡第１次調査…… 27
第Ⅱ－12図　小鶴城跡の位置と周辺遺跡…… 30
第Ⅱ－13図　調査地点と既調査地点…… 30
第Ⅱ－14図　小鶴城跡第８次調査…… 32
第Ⅲ－１図　若林区と遺跡位置図の位置…… 33
第Ⅲ－２図　南小泉遺跡・沖野城遺跡の位置と周辺の遺跡…… 34
第Ⅲ－３図　南小泉遺跡の調査地点と主要調査地点…… 35
第Ⅲ－４図　南小泉遺跡第69次調査…… 40
第Ⅲ－５図　ＳＩ１平面図・断面図…… 41
第Ⅲ－６図　出土遺物１…… 42
第Ⅲ－７図　出土遺物２…… 43
第Ⅲ－８図　南小泉遺跡第70次調査…… 51
第Ⅲ－９図　出土遺物…… 52
第Ⅲ－10図　南小泉遺跡第71次調査…… 58
第Ⅲ－11図　出土遺物　…… 58
第Ⅲ－12図　沖野城跡調査位置図…… 61
第Ⅲ－13図　沖野城跡第12次調査…… 64
第Ⅲ－14図　出土遺物…… 65
第Ⅲ－15図　沖野城跡第14次調査…… 69
第Ⅳ－１図　太白区東部と遺跡位置図の位置…… 71
第Ⅳ－２図　大野田官衙遺跡・郡山遺跡（Ⅴ章）と周辺の遺跡…… 71
第Ⅳ－３図　大野田官衙遺跡第10次～12次調査と近隣調査区の位置…… 73
第Ⅳ－４図　大野田官衙遺跡第10次調査…… 75
第Ⅳ－５図　大野田官衙遺跡第11次調査…… 79
第Ⅳ－６図　大野田官衙遺跡第12次調査…… 83
第Ⅳ－７図　愛宕山横穴墓群と周辺の遺跡…… 84
第Ⅳ－８図　愛宕山横穴墓第６次調査区と周辺横穴墓…… 85
第Ⅳ－９図　愛宕山横穴墓第６次調査…… 88
第Ⅴ－１図　郡山遺跡と調査位置図…… 91

写真図版目次

写真図版Ⅱ－1 …… 11
写真図版Ⅱ－2 …… 12
写真図版Ⅱ－3 …… 17
写真図版Ⅱ－4 …… 18
写真図版Ⅱ－5 …… 21
写真図版Ⅱ－6 …… 24
写真図版Ⅱ－7 …… 28
写真図版Ⅱ－8 …… 32
写真図版Ⅲ－1 …… 43
写真図版Ⅲ－2 …… 44
写真図版Ⅲ－3 …… 45
写真図版Ⅲ－4 …… 46
写真図版Ⅲ－5 …… 47
写真図版Ⅲ－6 …… 52
写真図版Ⅲ－7 …… 53
写真図版Ⅲ－8 …… 54
写真図版Ⅲ－9 …… 58
写真図版Ⅲ－10 …… 59
写真図版Ⅲ－11 …… 60
写真図版Ⅲ－12 …… 65
写真図版Ⅲ－13 …… 66
写真図版Ⅲ－14 …… 67
写真図版Ⅲ－15 …… 70
写真図版Ⅳ－1 …… 76
写真図版Ⅳ－2 …… 80
写真図版Ⅳ－3 …… 81
写真図版Ⅳ－4 …… 83
写真図版Ⅳ－5 …… 87
写真図版Ⅳ－6 …… 89
写真図版Ⅳ－7 …… 90

第Ⅰ章　調査計画と実績

1　調査体制

調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　文化財課

平成23年度
課長　吉岡　恭平
主幹兼調査調整係長　佐藤甲二　主査　荒井　格　平間亮輔　主事　小泉博明　廣瀬真理子　及川謙作
文化財教諭　吉野　信　石山智之　鈴木健弘　佐藤洋平　橋本勇人　専門員　結城慎一　臨時職員　五十嵐愛
整備活用係長　長島栄一　主事　大久保弥生　文化財教諭　佐藤正弥　調査指導係主事　鈴木　隆

平成24年度
課長　吉岡　恭平
主幹　佐藤甲二　調査調整係長　斎野裕彦　主査　佐藤　洋　平間亮輔　主任　村上とよ子
主事　鈴木　隆　小泉博明　及川謙作　関根章義　水野一夫
文化財教諭　伊藤翔太　千葉　悟　佐藤高陽　橋本勇人　専門員　結城慎一
整備活用係　係長　長島栄一　主任　斎藤克己　主事　大久保弥生
文化財教諭　石山智之　鈴木健弘
仙台城史跡調査室　主査　佐藤　淳　文化財教諭　佐藤洋平

2　調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、個人専用住宅補助事業費として総事業費7,686千円（補助金額3,796千円）の予算で計画した。

3　調査実績

平成24年度に実施された本事業に関わる調査は、表Ⅰ－３－１の通りである。なお、本報告書で扱う調査は、平成23年12月１日から平成24年10月16日までの間に実施された調査で、それらの国庫補助事業に係る個人住宅建設全調査を図Ⅰ－３－２に区ごとにわけて示した。うち郡山遺跡の調査については別に報告書を刊行する。それぞれ申請者より届け出がなされ（表中:届出等№）、確認調査に至る場合、それを原因に調査を実施している。表中実施番号は、実施決定後に番号付与し、『年度－通番』を示している。確認調査中に本調査が必要な遺構が発見されるなどの事由が発生した場合、ほとんどが調査区が狭小であるため、そのまま本調査へ移行し、完掘、調査終了して現場引き渡しとしている。

4　調査方法

各調査は建物建築などの開発する範囲を、申請者側が位置出し、その範囲内に調査区を設定する。その範囲に対し、重機を用いて表土･盛土など、調査対象にならない土壌を除去し、遺構面まで掘削する。重機掘削後、人力で精査し、遺構検出、遺構調査、断面観察、各実測図採図、適時写真撮影を行い、調査の工程のすべてが完了したのち埋め戻して現状復帰、現場引き渡しを行う。図面は１／20を基本としている。写真はデジタルカメラでのJPEG撮影を基本とし、適時、フィルムカメラによるモノクロ、リバーサル撮影を行っている。

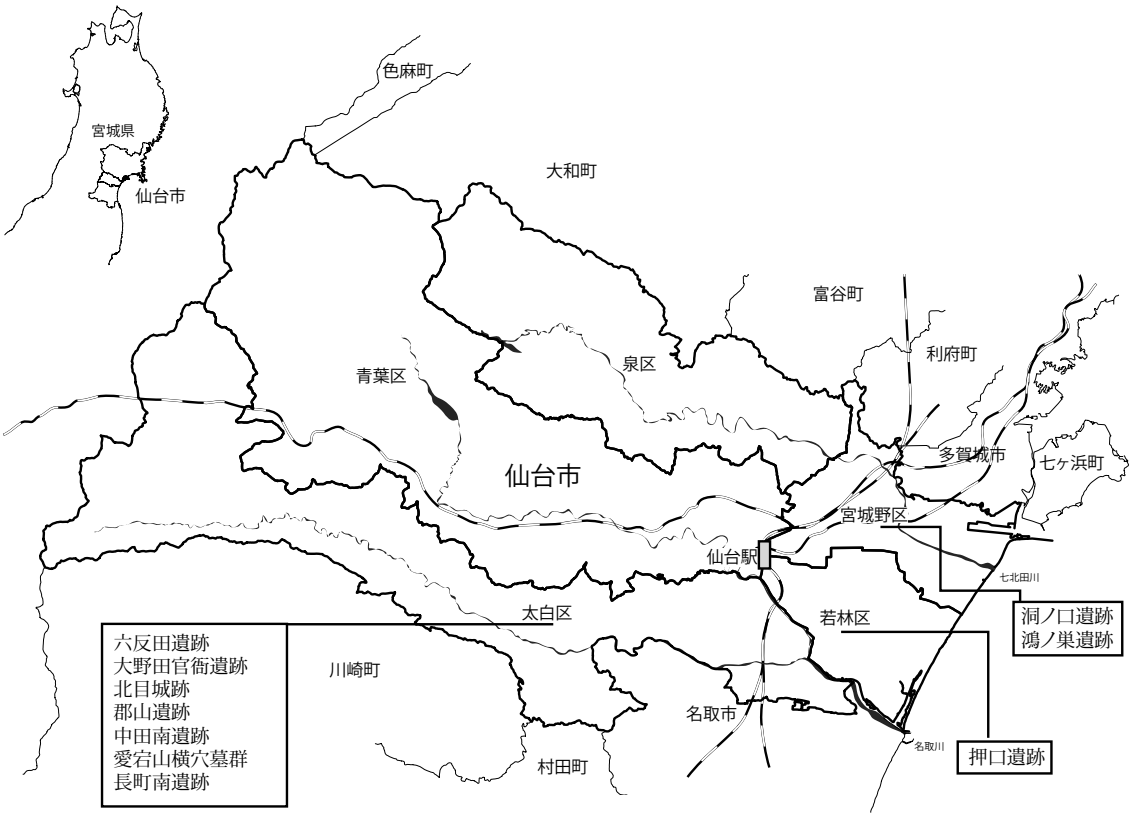
表Ⅰ－1

平成23年度個人専用住宅に伴う発掘調査一覧（平成25年２月～３月「仙台平野の遺跡群22」未掲載分：調査面積163.8㎡）

No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構･遺物	備考	届出等No.
1	薬師堂東遺跡 隣接地	若林区木ノ下三丁目	88.5㎡	24.0㎡	2月24日	溝跡3条、土坑1基、土師器、瓦		H23　106－277
2	沖野城跡	若林区沖野七丁目	105.2㎡	31.6㎡	2月28日	土坑1基、ピット2基、土師質土器	12次	H23　106－360
3	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	68.0㎡	28.5㎡	3月5日～13日	竪穴住居跡3軒、土坑1基、溝跡1条、ピット21基、土師器	219次	H23　106－366
4	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	71.0㎡	37.1㎡	3月5日～19日	竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1軒、ピット24基、土師器	220次	H23　106－380
5	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	103.7㎡	27.6㎡	3月5日～13日	竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1軒、ピット13基、土師器	221次	H23　106－381
6	沖野城跡	若林区沖野七丁目	76.3㎡	15.0㎡	3月8日	遺構、遺物なし		H23　106－313

平成24年度個人専用住宅に伴う発掘調査一覧（平成24年４月～25年２月：調査面積1043.1㎡）

No.	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構･遺物	備考	届出等No.
1	六反田遺跡	太白区大野田	96.8㎡	24.8㎡	4月17日～19日	溝跡3条、性格不明遺構1基、ピット1基、土師器		H23　106－358
2	大野田官衙遺跡	太白区大野田	96.1㎡	20.4㎡	4月11日～12日	溝跡1条、土師器	10次	H24　122－8
3	北目城跡	太白区郡山	149.9㎡	21.0㎡	4月19日	磁器、金属製品		H24　122－20
4	押口遺跡	若林区荒井	75.7㎡	14.1㎡	5月14日	遺構、遺物なし		H24　122－26
5	六反田遺跡	太白区大野田	81.2㎡	39.0㎡	5月7日	溝跡1条、遺物なし		H24　122－32
6	洞ノ口遺跡	宮城野区岩切	106.0㎡	30.6㎡	5月14日～19日	井戸跡1基、溝跡1条、性格不明遺構1基、土師器、須恵器他	19次	H24　122－31
7	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	65.8㎡	28.8㎡	5月16日～24日	材木塀1条、溝跡2条、柱穴1基、ピット3基、土師器	222次	H24　122－16
8	六反田遺跡	太白区大野田	86.7㎡	24.2㎡	5月21日	ピット2基、河川跡1条		H24　122－36
9	大野田官衙遺跡	太白区大野田	76.1㎡	22.1㎡	5月22日～23日	小溝状遺構群、ピット3基、土師器	11次	H24　122－14
10	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	82.8㎡	24.0㎡	6月18日～26日	土坑1基、ピット5基、土師器、須恵器	223次	H24　122－33
11	中田南遺跡	太白区中田七丁目	90.5㎡	27.7㎡	6月25日	遺構、遺物なし		H24　122－75
12	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	52.2㎡	6.0㎡	7月2日～4日	竪穴住居跡2軒、土師器	225次	H24　122－99
13	六反田遺跡	太白区大野田	123.9㎡	47.7㎡	7月5日～6日	竪穴遺構1基、小溝状遺構7条		H24　122－107
14	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	64.7㎡	21.0㎡	7月17日～26日	柱列1列、竪穴住居跡2軒、柱穴1基、ピット9基	226次	H24　122－72
15	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	78.0㎡	30.0㎡	7月26日～8月1日	ピット27基、土師器	227次	H24　122－79
16	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	59.7㎡	27.0㎡	8月20日～8月27日	溝跡1条、ピット9基	228次	H24　122－97
17	愛宕山横穴墓群	太白区向山四丁目	60.2㎡	39.8㎡	8月24日～29日	土坑1基、縄文土器、剥片	6次	H24　122－112
18	六反田遺跡	太白区大野田	92.1㎡	29.0㎡	8月27日～31日	溝跡1条		H24　122－17
19	長町南遺跡	太白区長町南二丁目	52.2㎡	14.5㎡	9月3日	遺構、遺物なし		H24　122－156
20	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	67.0㎡	30.0㎡	9月3日～10日	材木列1条、河川跡1条、土師器	229次	H24　122－130
21	鴻ノ巣遺跡	宮城野区岩切	46.8㎡	11.3㎡	9月13日	溝跡1条、土坑2基、ピット3基	14次	H24　122－184
22	郡山遺跡	太白区郡山五丁目	93.2㎡	39.1㎡	9月19日～10月3日	竪穴住居跡1軒、土坑6基、ピット17基	231次	H24　122－71
23	郡山遺跡	太白区郡山五丁目	92.7㎡	60.7㎡	10月10日～15日	竪穴住居跡1軒、土坑1基	223次	H24　122－231
24	大野田官衙遺跡	太白区大野田	85.6㎡	27.0㎡	10月16日	遺物、遺構なし	12次	H24　122－224
25	中柵西遺跡	若林区沖野三丁目	63.8㎡	25.6㎡	10月22日	遺物、遺構なし		H24　122－225
26	大野田古墳群	太白区大野田	70.7㎡	22.9㎡	10月22日～26日	性格不明遺構7基、溝跡2条、ピット2基		H24　122－204
27	南小泉遺跡	若林区遠見塚二丁目	79.5㎡	24.5㎡	11月5日	溝跡1条、性格不明遺構1基、ピット2基		H24　122－226
28	六反田遺跡	太白区大野田	96.6㎡	28.0㎡	11月5日～7日	土師器		H24　122－251
29	郡山遺跡	太白区郡山四丁目	69.0㎡	14.0㎡	11月12日～16日	溝跡1条、ピット2基		H24　122－268
30	西台畑遺跡	太白区郡山一丁目	343.3㎡	36.0㎡	11月27～28日	溝跡2条、河川跡1条		H24　122－275
31	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	79.5㎡	18.5㎡	12月3日	土坑1基		H24　122－278
32	六反田遺跡	太白区大野田	99.4㎡	36.0㎡	12月3日～5日	土坑2基、ピット1基		H24　122－306
33	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	67.0㎡	37.5㎡	12月4日～21日	竪穴建物1軒、竪穴住居跡4軒、溝跡1条、土坑3基		H24　122－320
34	今泉遺跡	若林区今泉二丁目	54.1㎡	16.4㎡	12月10日	遺構、遺物なし		H24　122－318
35	小鶴城跡	宮城野区新田三丁目	58.8㎡	9.0㎡	12月11日	磁器		H24　122－298
36	大野田官衙遺跡	太白区大野田	85.3㎡	8.4㎡	12月10日～13日	溝跡2条		H24　122－289
37	南小泉遺跡	若林区一本杉町	85.7㎡	30.2㎡	1月25日	ピット6基		H24　122－282
38	洞ノ口遺跡	宮城野区岩切	66.9㎡	24.0㎡	2月1日	ピット30基、土師器片		H24　122－330
39	六反田遺跡	太白区大野田	79.8㎡	28.3㎡	2月19日～23日	溝跡7条、土抗3基、ピット7基、須恵器、土師器、赤焼土器		H24　122－355
40	大野田古墳群	太白区大野田	90.8㎡	24.0㎡	2月18日	溝跡6条、剥片1点		H24　122－377



第Ⅰ－1図　平成24年度調査実績一覧

宮城野区

No.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
23－76	小鶴城跡	78.66㎡	21㎡	12月20日		H23 106－283
23－81	鴻ノ巣遺跡	52.17㎡	17.0㎡	1月23日～1月24日	第17次	H23 106－307
23－82	鴻ノ巣遺跡	66.24㎡	19.8㎡	1月30日	第18次	H23 106－295
23－86	稲荷館跡	261.63㎡	36.3㎡	2月13日	第1次	H23 106－278
23－87	小鶴城跡	57.96㎡	19.5㎡	2月6日～2月8日	第8次	H23 106－316
24－11	洞ノ口遺跡	105.99㎡	30.6㎡	5月14日～5月19日	第19次	H24 122－31
24－49	鴻ノ巣遺跡	46.78㎡	11.28㎡	9月13日	第14次	H24 122－184

若林区

No.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
23－65	南小泉遺跡	94.19㎡	34.3㎡	1月10日～1月13日	第69次	H23 106－231
23－84	中在家南遺跡	97.63㎡	19.5㎡	1月30日		H23 106－312
23－85	南小泉遺跡	59.62㎡	24.6㎡	1月24日～1月25日	第70次	H23 106－308
23－88	薬師堂東遺跡隣接地	88.45㎡	24.0㎡	2月24日		H23 106－277
23－92	南小泉遺跡	107.44㎡	12.1㎡	2月6日～2月9日	第71次	H23 106－346
23－93	沖野城跡	76.32㎡	15㎡	3月8日		H23 106－313
23－94	沖野城跡	155.86㎡	40.12㎡	2月20日	第14次	H23 106－356
23－95	沖野城跡	105.22㎡	31.62㎡	2月28日	第12次	H23 106－360
24－10	押口遺跡	75.7㎡	14.1㎡	5月14日		H24 122－26

太白区

No.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
23－69	的場遺跡	77.4㎡	17.1㎡	12月19日		H23 106－226
23－71	郡山遺跡	67.5㎡	4.0㎡	12月5日	第214次	H23 106－235
23－72	郡山遺跡	66.1㎡	30.0㎡	12月6日～12月20日	第215次	H23 106－270
23－75	郡山遺跡	67.2㎡	22.1㎡	1月10日～1月16日	第217次	H23 206－275
23－80	中田北遺跡	114.5㎡	18.0㎡	1月16日		H23 106－310
23－83	郡山遺跡	72.9㎡	56.0㎡	1月10日～1月19日	第216次	H23 106－67
23－91	郡山遺跡	57.7㎡	32.0㎡	1月30日～2月6日	第218次	H23 106－333
23－98	郡山遺跡	68.0㎡	28.5㎡	3月5日～3月13日	第219次	H23 106－366
23－99	郡山遺跡	71.0㎡	37.1㎡	3月5日～3月19日	第220次	H23 106－380
23－100	郡山遺跡	103.7㎡	27.6㎡	3月5日～3月13日	第221次	H23 106－381
24－2	六反田遺跡	96.8㎡	24.8㎡	4月17日～4月19日		H23 106－358
24－5	六反田遺跡	81.2㎡	39.0㎡	5月7日		H24 122－32
24－7	大野田官衙遺跡	96.1㎡	20.4㎡	4月11日～4月12日	第10次	H24 122－8
24－9	北目城跡	149.9㎡	21.0㎡	4月19日		H24 122－20
24－12	郡山遺跡	65.8㎡	28.8㎡	5月16日～5月24日	第222次	H24 122－16
24－19	六反田遺跡	86.7㎡	24.2㎡	5月21日		H24 122－36
24－20	大野田官衙遺跡	76.1㎡	22.1㎡	5月22日～5月23日	第11次	H24 122－14
24－27	郡山遺跡	82.8㎡	24.0㎡	6月18日～6月26日	第223次	H24 122－33
24－30	中田南遺跡	90.5㎡	27.7㎡	6月25日		H24 122－75
24－31	六反田遺跡	123.9㎡	47.7㎡	7月5日～7月6日		H24 122－107
24－35	郡山遺跡	64.7㎡	21.0㎡	7月17日～7月26日	第226次	H24 122－72
24－38	郡山遺跡	78.0㎡	30.0㎡	7月26日～8月1日	第227次	H24 122－79
24－39	六反田遺跡	92.1㎡	29.0㎡	8月27日		H24 122－17
24－40	愛宕山横穴墓群	60.2㎡	39.8㎡	8月24日～8月29日	第6次	H24 122－112
24－44	郡山遺跡	59.7㎡	27.0㎡	8月20日～8月27日	第228次	H24 122－97
24－45	長町南遺跡	52.2㎡	14.5㎡	9月3日		H24 122－156
24－51	郡山遺跡	67.0㎡	30.0㎡	9月3日～9月10日	第229次	H24 122－130
24－56	郡山遺跡	92.7㎡	60.7㎡	10月10日～10月15日	第233次	H24 122－231
24－59	大野田官衙遺跡	85.6㎡	27.0㎡	10月16日	第12次	H24 122－224

仙台市では報告書に詳細を掲載した調査に次数をつけています

第Ⅱ章　宮城野区内の調査

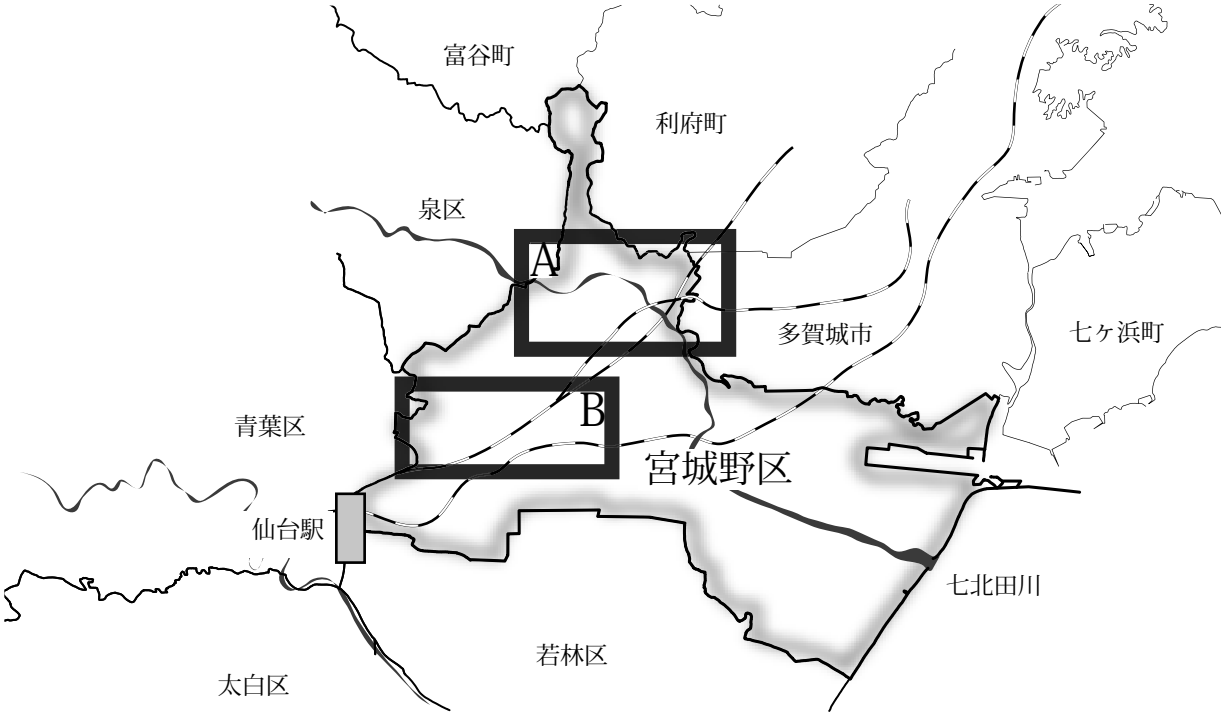
第１節　概要

本件に係る宮城野区内で行われた調査は、表Ⅱ－１に示すとおりである。宮城野区内では第Ⅱ－１図のＡ・Ｂの二か所の区域、４遺跡の調査を行っている。これらは第Ⅱ－１図中では洞ノ口遺跡中のａ区域、鴻ノ巣遺跡中のｂ区域、稲荷館跡のｃ区域を調査している。第Ⅱ－８図のａ区域内の小鶴城跡である。

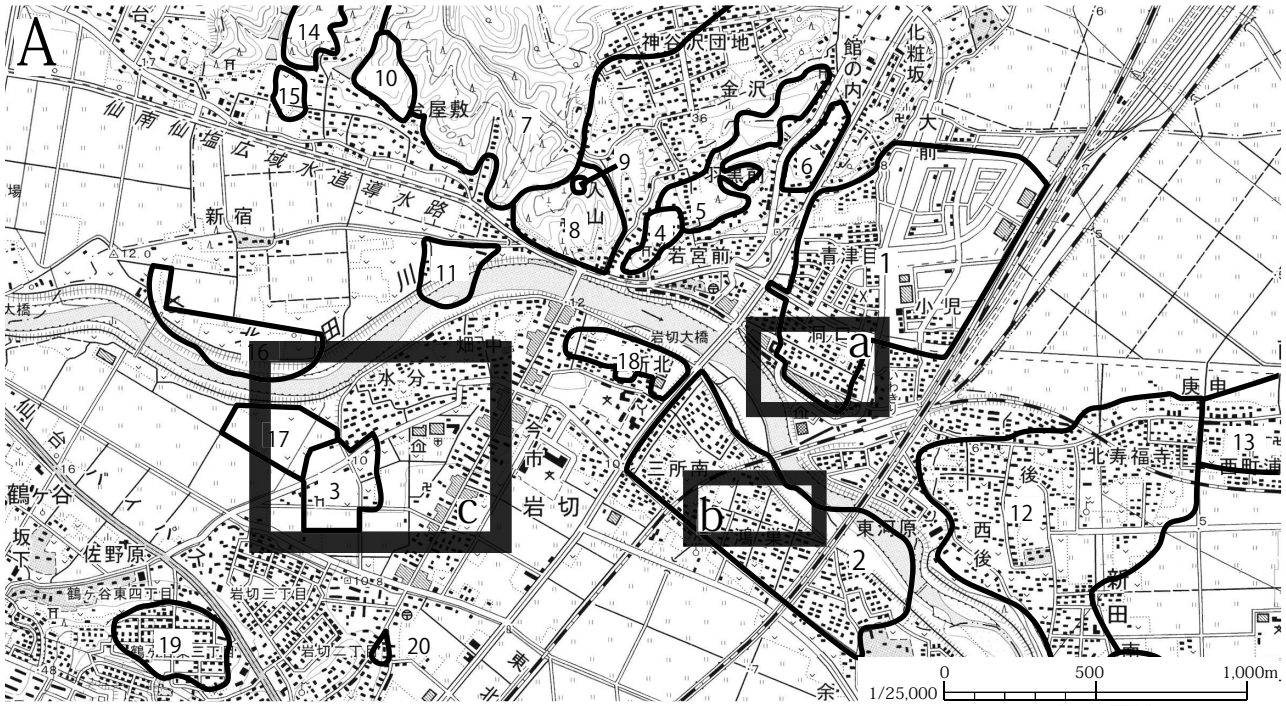
ここでは、小鶴城跡第８次調査（H23－76）、洞ノ口遺跡第19次調査（H24－11）、鴻巣遺跡第14次調査（H24－49）、稲荷館遺跡第１次調査（H23－86）の成果を報告する。

表Ⅱ－１　宮城野区内の調査一覧

No.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
23－76	小鶴城跡	78.66㎡	21㎡	12月20日		H23 106－283
23－81	鴻ノ巣遺跡	52.17㎡	17.0㎡	１月23日～１月24日	第17次	H23 106－307
23－82	鴻ノ巣遺跡	66.24㎡	19.8㎡	１月30日	第18次	H23 106－295
23－86	稲荷館跡	261.63㎡	36.3㎡	２月13日	第１次	H23 106－278
23－87	小鶴城跡	57.96㎡	19.5㎡	２月６日～２月８日	第８次	H23 106－316
24－11	洞ノ口遺跡	105.99㎡	30.6㎡	５月14日～５月19日	第19次	H24 122－31
24－49	鴻ノ巣遺跡	46.78㎡	11.28㎡	９月13日	第14次	H24 122－184



第Ⅱ－１図　宮城野区と遺跡位置図の位置



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡･城館跡･屋敷跡･水田跡	自然堤防	古墳～近世	11	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	古代
2	鴻ノ巣遺跡	集落跡･屋敷跡･水田跡	自然堤防	弥生～中世	12	新田遺跡		自然堤防	縄文･古墳～中世
3	稲荷館跡	城館跡	自然堤防	中世	13	山王遺跡	都市･屋敷跡	自然堤防	弥生～近世
4	若宮前遺跡	城館跡･信仰遺跡	丘陵斜面	縄文･古墳～近世	14	入生沢横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
5	羽黒前遺跡	城館跡･宗教遺跡	丘陵	中世～近世	15	入生沢遺跡	散布地	自然堤防	古代
6	化粧坂城跡	城館跡	丘陵	中世	16	大正囲遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	岩切城跡	城館跡	丘陵	中世	17	岩切畑中遺跡	集落跡･包含地･畑跡･水田跡	自然堤防	縄文～近世
8	東光寺遺跡	城館跡･石窟仏群･寺院跡･集落跡･板碑群	丘陵斜面	中世	18	今市遺跡	集落跡･包含地	自然堤防	古代～中世
9	東光寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	19	菖蒲沢遺跡	散布地	丘陵	縄文･古墳
10	台屋敷横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	20	山崎囲遺跡	散布地	丘陵麓	縄文

第Ⅱ－２図　洞ノ口遺跡・鴻ノ巣遺跡・稲荷館跡の位置と周辺の遺跡

第２節　洞ノ口遺跡

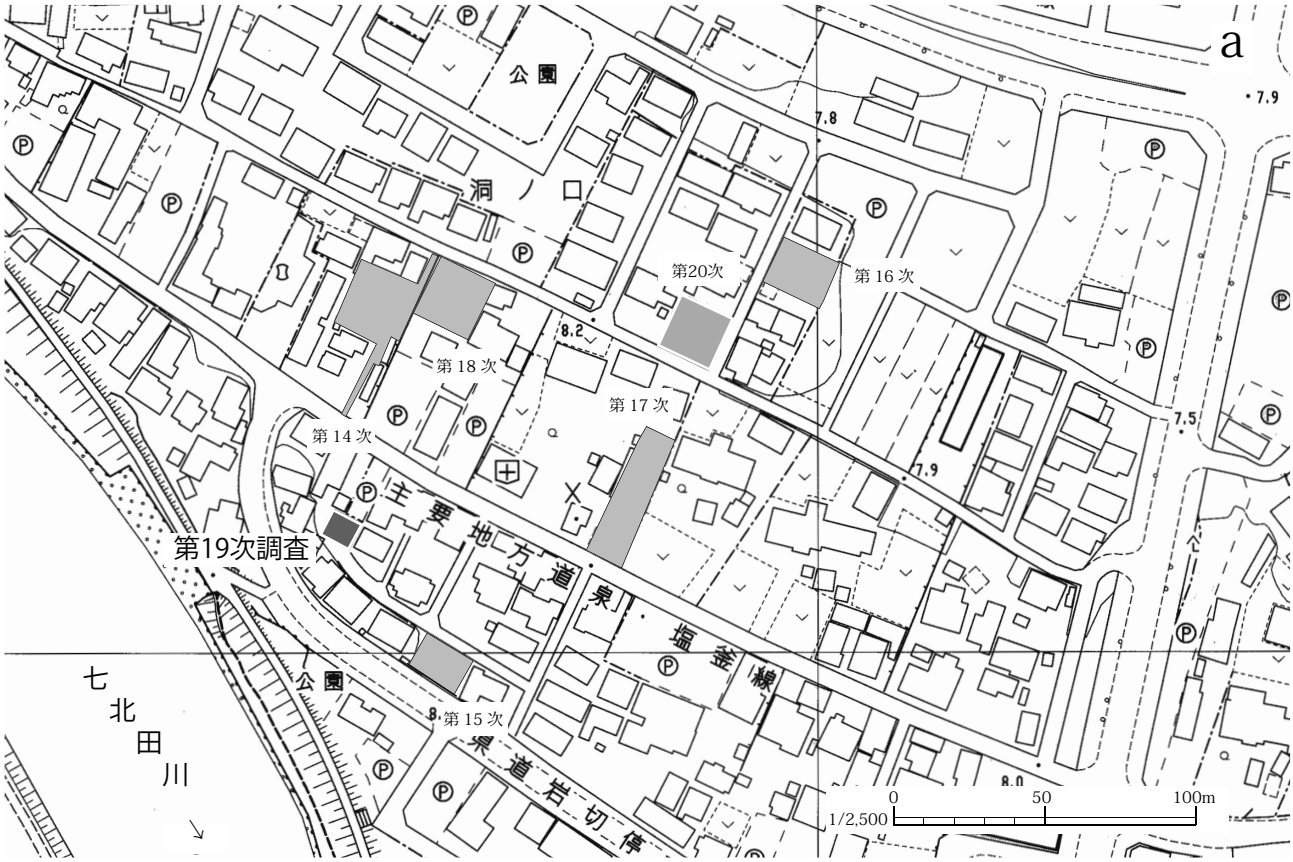
１　遺跡の概要

洞ノ口遺跡は、仙台市宮城野区岩切字洞ノ口、青津目に所在する。ＪＲ仙台駅の北東約8.0kmに位置し、七北田川左岸の自然堤防から後背湿地にかけて立地する。遺跡の範囲は、東西約0.8km、南北1.0kmで、標高は約5.0～8.0mである。洞ノ口遺跡の周辺には、国指定史跡岩切城跡をはじめ、東光寺遺跡、多賀城市新田遺跡など、多くの中世に属する遺跡が分布している。

洞ノ口遺跡は、古墳時代から近世にかけての複合遺跡であり、その中でも中世の遺構・遺物が主体を占める。

洞ノ口遺跡とその周辺は、近年、急速に宅地化が進み、現在の地形は原形を失っている。しかし、区画整理事業以前の遺跡は、水田や畑地であり、標高の高い部分は畑地、それよりも一段低い部分が水田として利用されていた。地籍図などで詳細に見てみると、遺跡の北側は水田が広く分布しているのに対し、県道泉塩釜線に近い遺跡の南側は、方形に区画された畑地とそれを取り囲むように配置された細長い水田が認められる。これは以前から城館の区画を反映したものと推定されていた。平成４年（1992年）から開始された区画整理事業に伴う発掘調査の結果、自然堤防上に中世の屋敷跡と城館跡が確認された。13世紀に遡る屋敷地と15世紀後半から16世紀にかけての城館に大別される。屋敷地は13世紀末には溝跡で区画され、建物の規模や出土遺物から、武士層の居住域と考えられている。城館は、２時期の変遷がある。大規模な溝で取り囲まれ、一部には土塁が認められる。その内部は溝でさらに区画されている。この城館跡については、岩切城跡やかつての街道に近い地理的な条件やその規模などから、留守氏に関わるものとの見方もある。

また、城館跡の南側には、現在も主要地方道泉・塩釜線に沿って、細長い地割がみられる。これまでの発掘調査による成果などから、城館跡に隣接する町場の可能性が指摘されている地域である。



第Ⅱ－３図　洞ノ口遺跡20次調査地点と周辺既調査地点

2　第19次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　洞ノ口遺跡（宮城県遺跡登録番号　01372）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字洞ノ口82番52
調 査 期 間　　平成24年５月14日（月）～16日（水）
調査対象面積　　建築面積105.99㎡
調 査 面 積　　30.6㎡
担 当 職 員　　主事　水野一夫　文化財教諭　佐藤高陽　文化財教諭　千葉悟

（2）調査地点と調査経過

第19次調査は洞ノ口遺跡の南部、七北田川の右岸60m程度に位置する。確認調査は平成24年５月14日に着手し、周辺の調査では、比較的浅く遺構面に達することがあるため、重機掘削は20cm程度ずつ下げながら確認していくこととした。１m程度下げたところ腐食質の均質土壌になったが、遺構が確認できないため、そのままさらに掘削した。150cm程で、黄褐色土の基盤面に達したため、ここで掘削を停止し精査作業を行った。遺構はSD１溝跡１条と直交するSX１性格不明遺構１基、SD１を切るSE１井戸跡１基を検出した。16日調査の一切を終了して埋め戻し、撤収した。

（3）基本層序

基本層は、大別4層、細別8層を確認した。Ⅰc層は整地層であるが、1cm以下の層が互層状に堆積しており、重機による宅地造成土ではない。

層	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰa	10YR3/3	暗褐色	シルト	ごく最近の盛土
Ⅰb	10YR2/2	黒褐色	シルト	炭化物少量混入
Ⅰc	10YR4/4	褐色	細砂	10YR2/2､2/1との互層｡旧宅地化整地土
Ⅰd	10YR3/2	黒褐色	シルト	宅地化直前までの畑か水田耕作土
Ⅱ	10YR2/2	黒褐色	腐食質	遺物の上下限から近世以前の耕作土と考えられる｡SE1
Ⅲa	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	SD1･SX1を埋める土壌､河川由来か
Ⅲb	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	SD1構築面
Ⅳ	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	

（4）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅢ層上面とⅣ層上面である。検出した遺構は、総数で溝跡1条、井戸跡1基、性格不明遺構1基である。

第1号溝跡　SD1

SD1はⅣ層上面で検出した。調査区の東側を、長軸南北方向に縦走し、重複関係はSE1より古く、SX1より新しい。規模は上端幅1.56m下端幅0.48mで延長は3.08m以上。壁面から上位土Ⅲa層の流れ込みが観察できるので、構築面が生きているものと推定でき、深さは0.68mの溝状遺構である。断面形は逆台形を呈するが、南壁付近では二段になっている様子がある。北側では掘削痕程度で明確にならなかったため、一体のものとしたが、溝を掘りなおす等、二時期ある可能性もあるが断面とも判別できなかった。

遺物は、堆積土下層より壷形の須恵器第Ⅱ－5図1（底部を欠く胴部1／4程度）が出土している。

第1号井戸跡　SE1

SE1は壁面観察のによりⅡ層上面を遺構面とする可能性がある。重複関係はSD1より新しい。規模は上端幅1.54m下端幅0.83m程度の楕円形で、深さは0.74m以上。断面形は、上部は逆台形であるが、下底から下は直に落ちている。掘削深度と湧水のため完掘はしていない。遺構の壁面には鉄分の凝着が厚く、埋土との境は明瞭であった。

なお、北側に最近まで存続していたコンクリート製浸透枡が埋設されており、その掘方に上面を切られていることから、別な遺構として認識した経緯がある。くぼ地として認識できる状態で浸透枡が施工された可能性は否定できないものの、井戸跡の中心は若干南にずれている。遺物は、Ⅱ層の様相と同様で、渥美焼・常滑焼を含む土師器・須恵器片のみである。近代以降の遺物は含まれていない。

第1号性格不明遺構　SX1

重複関係はSD1より古い。規模は上端東西（4.20）南北0.73m程度。ほとんどが調査区外で、全体は明らかではないため性格不明遺構とした。壁面から上位土Ⅲa層の流れ込みが観察できるので、構築面が生きているものと推定でき、深さは0.38mの遺構である。壁の立ち上がりは緩やかで、溝状遺構としても、SD1とは作りが異なる。 北側に張り出し部分があるが、カマドの煙道を想定できるものではない。東西に横走する溝の可能性を考え、延長上にトレンチを入れたが、確認されなかった。遺物は出土していない。

（5）遺構外出土遺物

遺物は、天箱で1箱程度出土した。Ⅰ層の各層からは遺物の出土がほとんど無い。Ⅱ層からは、12世紀の渥美焼の破片、中世の常滑焼の破片13世紀までの在地系陶器を含む古代～中世期の土器片が出土している。Ⅲ層からは土師器・須恵器に類する土器片のみの出土でありⅡ層とⅢ層の時期差を想定できる。

6　まとめ

今回の調査地点は、洞ノ口遺跡の南端に位置している。南西を流れる現七北田川からは40m程度の位置にあたる。洞ノ口遺跡においては、中世の町家が並ぶと想定されている区域である。本調査区では、Ⅱ層が中世頃の畑耕作土と想定した。また、上面に現代の浸透枡がかかるものの、堆積土からはSE1井戸跡も同時期程度を想定できる。Ⅱ層・

SE１ともに古代～13世紀程度までの遺物を破片で含む一方、それよりも新しいと思われるものは無かった。後年の耕作痕としても、近世にまで下ると考えられる要素は今のところ見つかっていない。

Ⅲ層は、中世陶器片を含まず、土師器・須恵器が出土することから、Ⅱ層とⅢ層の間には相応の時間差を設定することが可能である。Ⅲ層はわずかな色調で上下に細分できる。また、Ⅳ層上面からSD１溝跡が掘り込まれている。その堆積土下層から、第Ⅱ－５図１が一括出土した。壷形を呈し、外面は平行タタキの調整で、内面調整もよく、一部に自然釉も見られる。胎土に石英粒を少量含む。器全体が赤褐色を呈し、須恵器としたが類例の増加を待って検討したい。

土層注記

SD1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	Ⅲaのレンズ状堆積であるため､SD1の構築面はⅢb上面
2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	Ⅲbに近似するが､壁の立ち上がりが明瞭

SE1

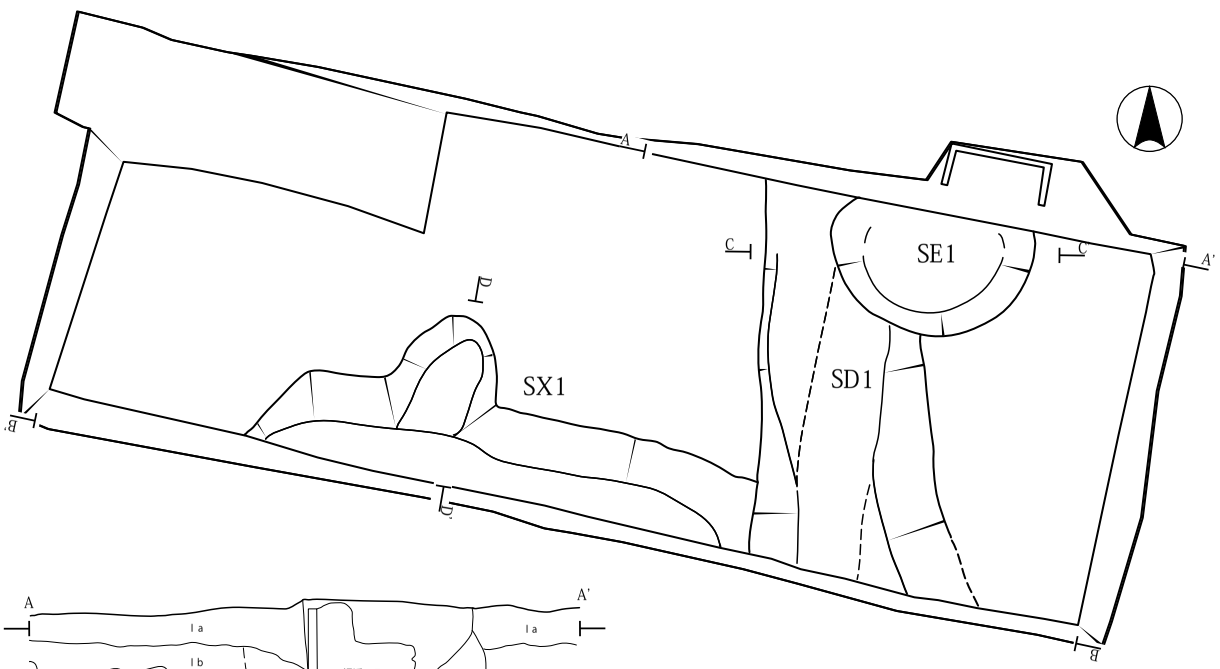
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/2	黒褐色		Ⅳをブロック状多量混入。中世･古代の遺物含む。

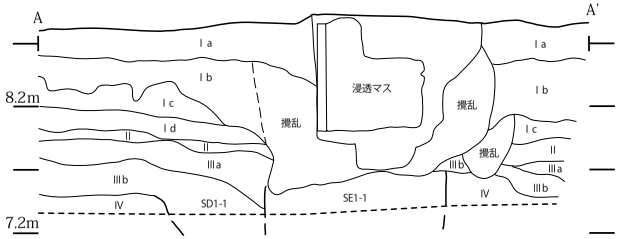
SX1

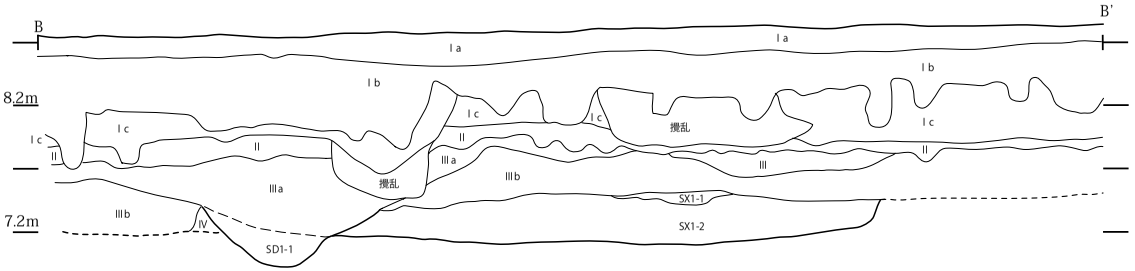
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	Ⅲaのレンズ状堆積であるため､SX1の構築面はⅢb上面
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	Ⅲbに近似するが､壁の立ち上がりが明瞭

遺物観察表

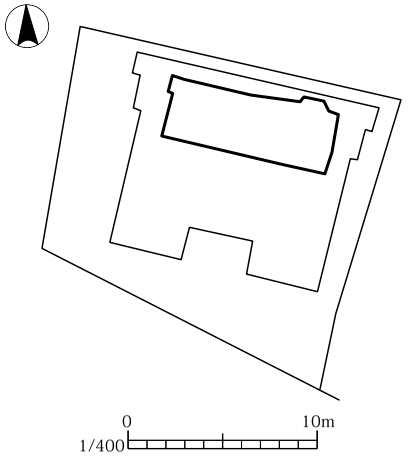
掲載番号	写真番号	登録番号	出土番号	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴･備考
								長	幅	厚	外	内	底	
Ⅱ－5－1	Ⅱ－1－1	E－7	SD1	1層	須恵器	壺	一部	(11.4)	－	(20.2)	平行ﾀﾀｷ ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ロクロナデ		
Ⅱ－5－2	Ⅱ－1－2	E－6	SE1	1層	須恵器	坏	一部	－	(6.4)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
Ⅱ－5－3	Ⅱ－1－3	I－5	SE1	1層	陶器	甕	一部	－	－	－				渥美産　押印　12C
Ⅱ－5－4	Ⅱ－1－4	I－6	SE1	1層	陶器	甕	一部	－	－	－				渥美産　12C
Ⅱ－5－5	Ⅱ－1－5	I－7	SE1	1層	陶器	甕	一部	－	－	－				渥美産　12C
Ⅱ－5－6	Ⅱ－1－6	C－1	SE1	1層	土師器	坏	一部	－	－	(2.3)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ 黒色処理	ﾍﾗﾐｶﾞｷ　黒色処理		
Ⅱ－5－7	Ⅱ－1－7	I－8	SE1	1層	陶器	甕	一部	－	－	－				常滑産　押印
Ⅱ－5－8	Ⅱ－1－8	C－2	SE1	1層	土師器	甕	一部	－	(6.2)	(1.9)	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	
Ⅱ－5－9	Ⅱ－1－9	E－3		Ⅰ層	須恵器	坏	一部	(12.0)	－	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		
Ⅱ－5－10	Ⅱ－1－10	E－2		Ⅰ層	須恵器	坏	一部	－	(7.0)	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
Ⅱ－5－11	Ⅱ－1－11	D－1		Ⅰ層	赤焼土器	坏	一部	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ		
Ⅱ－5－12	Ⅱ－1－12	E－5		Ⅰ層	須恵器	坏	一部	－	－	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
Ⅱ－5－13	Ⅱ－1－13	E－1		Ⅰ層	須恵器	高台坏	一部	－	8.8	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ		
Ⅱ－5－14	Ⅱ－1－14	I－1		Ⅰ層	土師質土器	Ⅲ	1/5	(8.8)	(5.6)	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
Ⅱ－5－15	Ⅱ－1－15	E－4		Ⅰ層	須恵器	坏	一部	－	(7.2)	(1.6)			回転糸切り	
Ⅱ－5－16	Ⅱ－1－16	I－3		Ⅰ層	陶器	鉢	一部	－	－	(4.5)				白石産　13C後半～14C前半
Ⅱ－5－17	Ⅱ－1－17	I－2		Ⅰ層	陶器	鉢	一部	－	－	(4.1)				在地産　13C後半～14C
Ⅱ－5－18	Ⅱ－1－18	I－4		Ⅰ層	陶器	甕	一部	－	－	－				常滑産



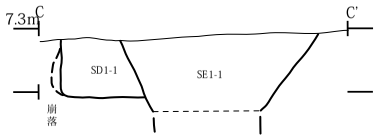


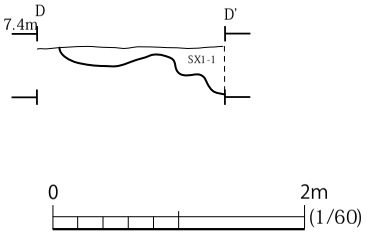


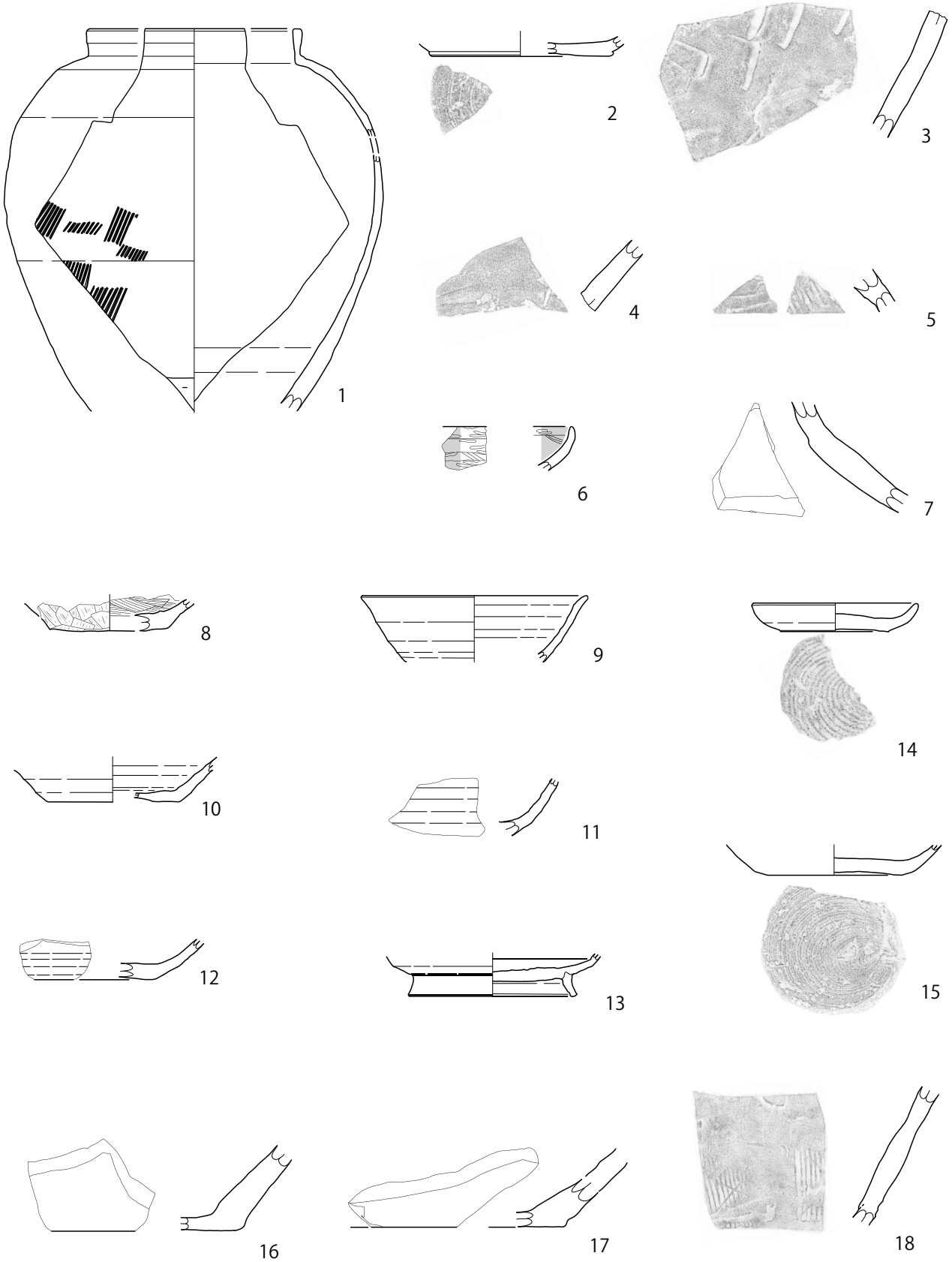
第Ⅱ－4図　洞ノ口遺跡第19次調査



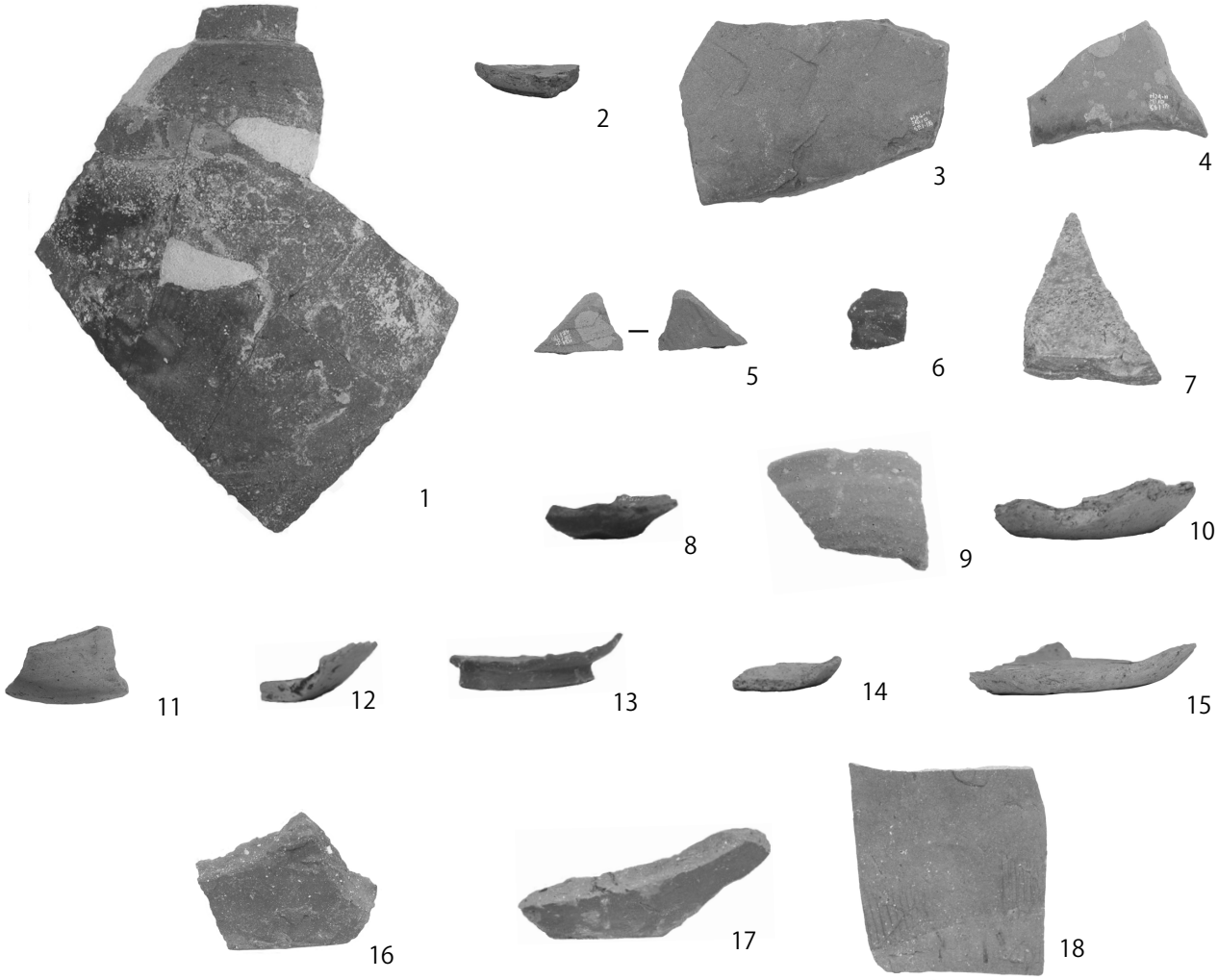
第 11 次調査区配置図







第Ⅱ－5図　出土遺物

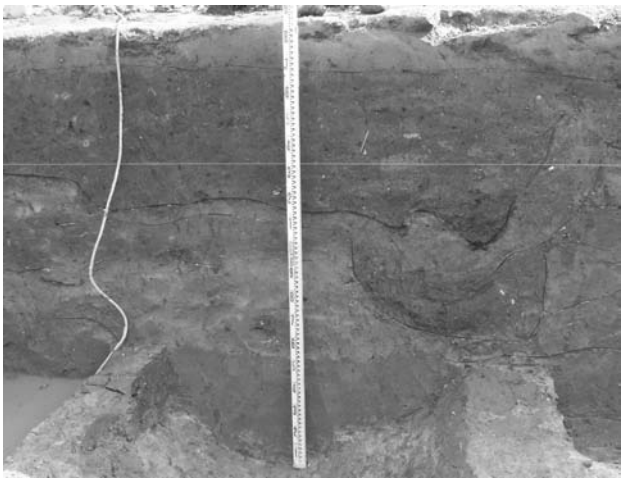


写真図版Ⅱ－1

調査区全景（東から）

SD1 完掘状況（南から）

西壁断面（東から）



SD1 断面（東から）

SX1 断面（北から）

SE1 断面（西から）

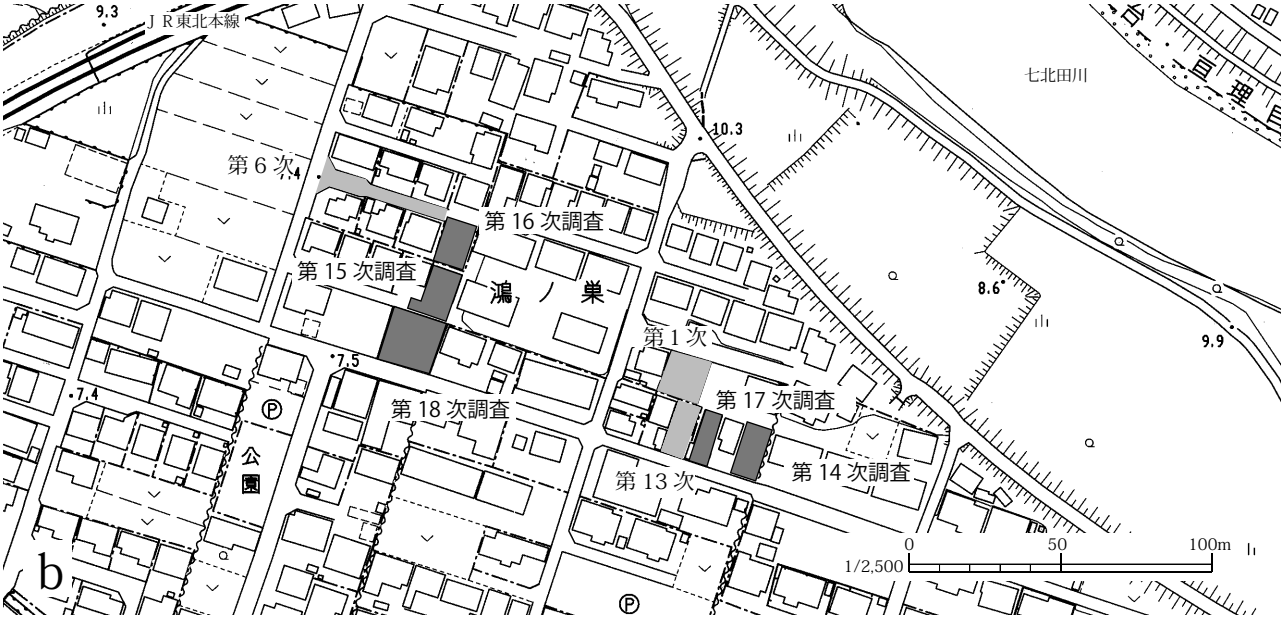
写真図版Ⅱ－2

第３節　鴻ノ巣遺跡

１　遺跡の概要

鴻ノ巣遺跡は、宮城県仙台市宮城野区岩切字鴻ノ巣に所在する。ＪＲ仙台駅の北東約7.0㎞に位置し、七北田川右岸の自然堤防上に立地する。今市遺跡に隣接し、遺跡の範囲は、七北田川に沿って、東西約1.0㎞ におよぶ。標高は約8.0ｍほどである。

鴻ノ巣遺跡は、古墳時代から中世にわたる複合遺跡である。これまで宅地造成や河川改修工事、個人住宅建築などに伴い、断続的に発掘調査が行われている。古墳時代には、中期に大規模な集落が営まれていたことが明らかとなっており、古代でも、竪穴住居跡が検出されている。中世になると、陸奥国留守職の伊沢氏が留守氏を名乗り、その居城を岩切城跡とした。この周辺には、中世の遺跡が濃密に分布している。松森城跡、東光寺城跡、化粧坂城跡、小鶴城跡などの城館のほか、洞ノ口遺跡、新田遺跡などでは、大規模な屋敷跡が発見されている。鴻ノ巣遺跡では、12世紀代から14世紀代の屋敷地が確認され、検出される遺構の主体を占める。このうち、13世紀に属する遺構群は、『留守家文書　弘安８年留守家廣譲状』に記載がある冠屋市場もしくは河原宿五日市場の「北町･南町」に対応するとの指摘もある。



第Ⅱ－６図　鴻ノ巣遺跡第14次調査地点と周辺既調査地点

２　第14次調査

（１）調査要項

遺　跡　名　　鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡登録番号01034）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字鴻巣79－９
調 査 期 間　　平成24年９月13日
調査対象面積　　46.8㎡
調 査 面 積　　11.3㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
担 当 職 員　　主事　小泉博明　　文化財教諭　伊藤翔太　佐藤高陽

（２）調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の中央部に位置する。確認調査は平成24年９月13日に行った。住宅建築範囲内に、東西2.40ｍ、南北4.70ｍの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層およびⅡ層を除去した。Ⅲ層上面で遺構検出作業を行

い、溝跡１条、土坑２基、ピット３基を検出した。調査終了後、重機により埋め戻しを行い、同日中に撤収した。

（３）基本層序

基本層は、大別６層、細別10層を確認した。Ⅰ層は宅地に伴う盛土以前の畑地耕作土で、５層に細別される。Ⅱ層は黒褐色を呈する粘土で、層底面に凹凸が認められ、基本層Ⅲ層起源のブロックを多く含む。層相から、水田土壌の可能性がある。壁面の基本層の観察から遺構は、Ⅱ層上面で確認される。Ⅲ層は黄褐色を呈するしまりのある粘土である。今回の調査における遺構検出面である。Ⅳ層からⅥ層は黒褐色および黄褐色を呈する粘土で、いずれもしまりが強い。なお、今回の調査区には層厚約0.80～0.90mの盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰa	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	均質。水田耕作土。
Ⅰb	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	細砂を均質に含む。
Ⅰc	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
Ⅰd	5Y3/2	オリーブ黒色	シルト	炭化物を粒状に含み砂をごく少量含む。
Ⅰe	10YR3/4	暗褐色	シルト	均質。
Ⅱ	10YR2/2	黒褐色	粘土	褐灰色(10YR5/3)粘土をブロック状にやや多く含む。
Ⅲ	2.5Y5/3	黄褐色	粘土	畑地耕作土。白色の小礫をやや多く含む。
Ⅳ	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	
Ⅴ	2.5Y5/3	黄褐色	粘土	
Ⅵ	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	

（４）発見遺構と出土遺物

遺構面は、Ⅱ層上面である。検出した遺構には、溝跡１条、土坑２基、ピット３基がある。

第１号溝跡　ＳＤ１

調査区西半部で検出した北西～南東方向の溝跡である。ＳＫ２土坑と重複し、これよりも新しい。検出長は3.80m以上で、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅1.40m以上、下端は確認できなかった。深さ0.60m以上である。断面形は不明であるが、確認した溝跡東壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は３層に細別され、炭化物など含む暗灰黄色、黄灰色などの砂質シルト、粘土質シルトおよび粘土である。

遺物は出土していない。

第１号土坑　ＳＫ１

調査区南東部で検出した土坑である。ＳＫ２土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は不明であるが、楕円形を基調としたものとみられる。規模は、東西0.35m以上、南北0.75m以上で、深さ約0.40mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は３層に細別され、基本層Ⅱ層起源の粘土を含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

第２号土坑　ＳＫ２

調査区南東部で検出した土坑である。ＳＤ１溝跡、ＳＫ１土坑と重複し、いずれよりも古い。平面形は不明であるが、円形もしくは楕円形を基調としたものとみられる。規模は、東西0.40m以上、南北0.45m以上で、深さ約0.40mである。断面形は逆台形を呈するものとみられる。堆積土は２層に細別され、基本層Ⅱ層起源の粘土を含む暗褐色と暗オリーブ褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ピット

調査区北半部で３基を検出した。平面形は楕円形を呈する。柱痕跡が認められたものはなく、建物跡が想定される配置にはなっていない。堆積土はいずれも単層で、基本層Ⅱ層起源の粘土を含む暗褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

（5）遺構外出土遺物

遺物が出土していない。

（6）まとめ

今回の調査では、溝跡１条、土坑２基、ピット３基を検出した。いずれも部分的な検出および精査に留まり、出土遺物もないことから、検出した遺構の性格や時期は不明である。また、周辺の調査で検出された遺構群との関連も明らかにはできない。なお、これらの遺構に切られている基本層Ⅱ層は、層相から水田土壌である可能性がある。

土層注記

SD1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	炭化物を粒状をごく少量含む。
2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	炭化物を粒状をごく少量含む。
3	2.5Y3/3	暗褐色	粘土	細砂を均質に含む。

SK1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に少量含む。
3	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を小ブロック状に少量含む。

SK2

層	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土と炭化物を粒状に少量含む。
2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に含む。

P1

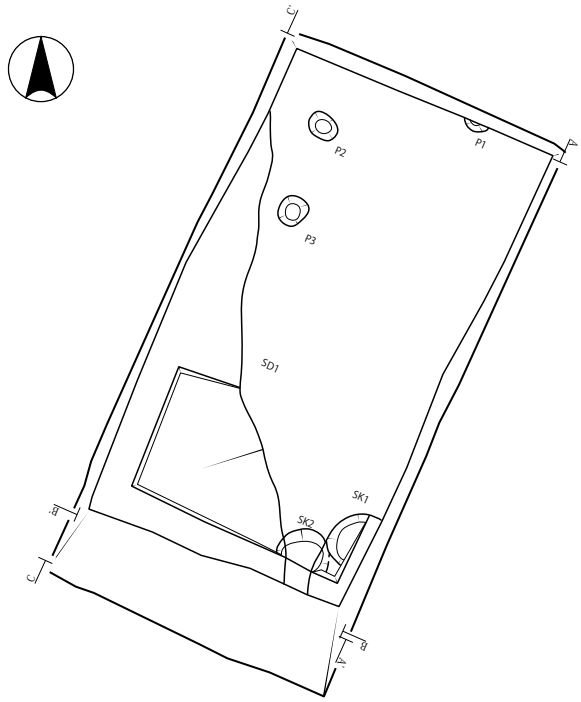
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状に少量含む。

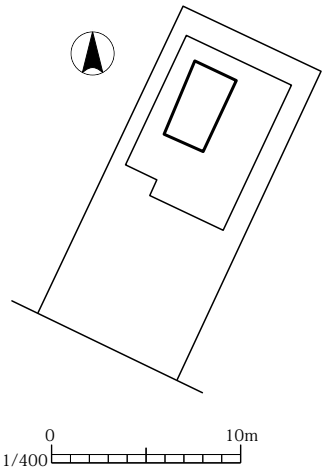
P2

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を小ブロック状に少量含む。

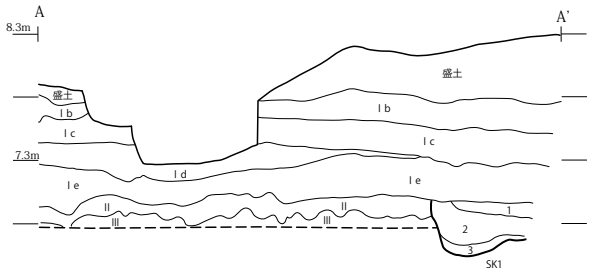
P3

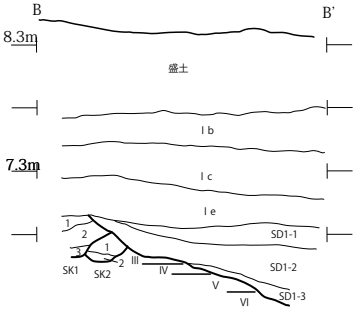
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土を粒状と小ブロック状に若干含む。

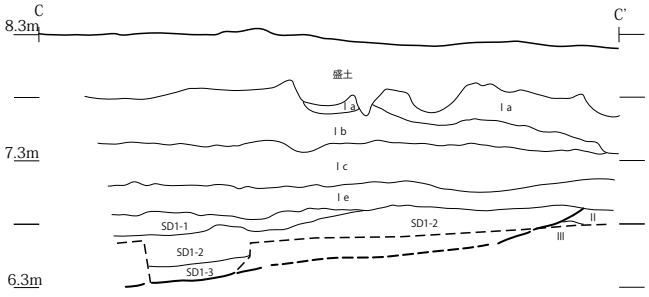


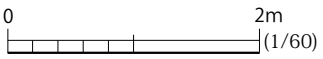


第 14 次調査区配置図

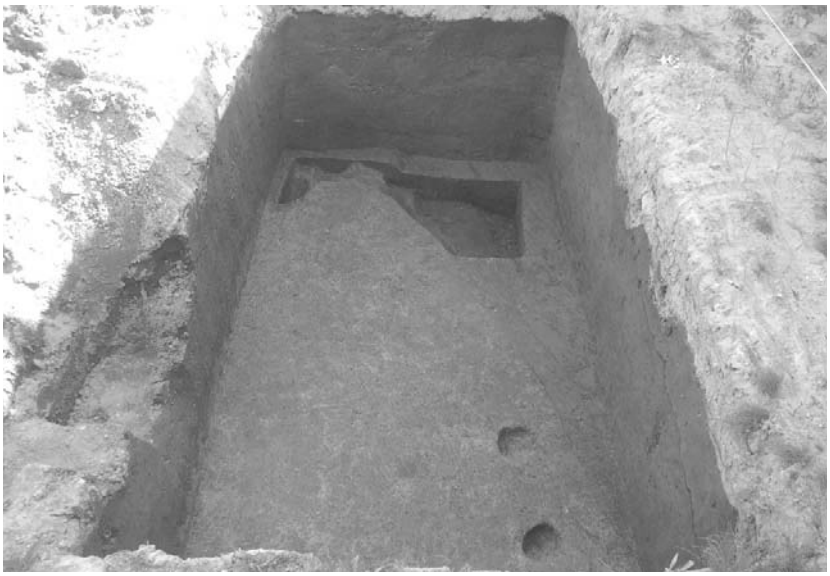








第Ⅱ－７図　鴻ノ巣遺跡第14次調査



調査区全景（北から）

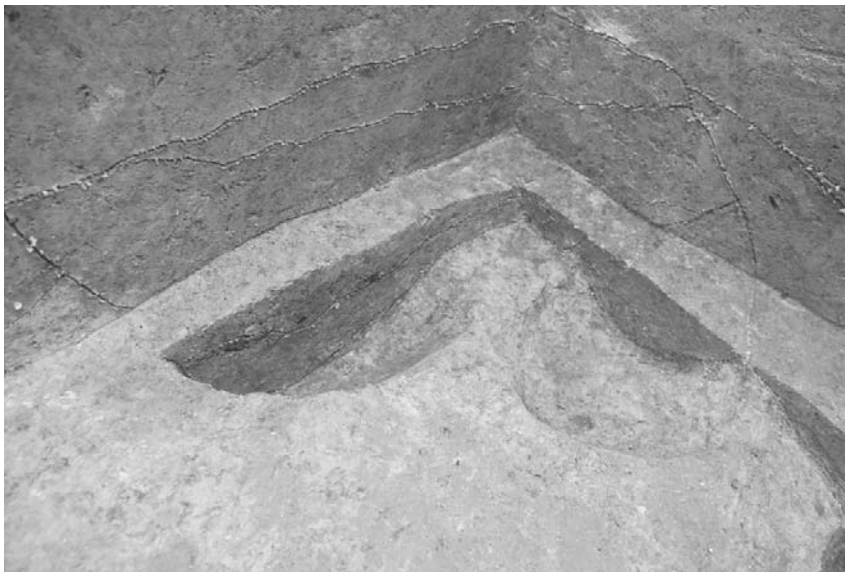
調査区全景（北東から）

調査区南壁断面（北から）

写真図版Ⅱ－3

SD1 溝跡（北から）

SD1 南壁断面（北から）



SK1・2（北西から）

写真図版Ⅱ－4

第17次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡登録番号01034）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字鴻巣79番１
調 査 期 間　　平成24年１月23日～24日
調査対象面積　　建築面積52.17㎡
調 査 面 積　　17.0㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　及川謙作　　文化財教諭　川本剛史　佐藤洋平

（2）調査地点と調査経過

対象地は、鴻ノ巣遺跡の中心部に位置し、北西隣地を第１次調査、西側隣地を第13次調査、東側は１軒挟んだ先を第14次調査として報告している。確認調査は、平成24年１月23日に着手した。調査区は、建築範囲内にそれぞれ南北5.0m×東西3.0m、さらに南側に南北2.5m×東西0.8mの調査区を設定し、重機により盛土及び基本層Ⅰ層を除去した。基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行い、性格不明遺構１基を検出した。調査終了後、重機により埋め戻しを行い撤収した。

（3）基本層序

調査区内の盛土は0.45m程度で、本調査区では、基本層を４層確認した。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	10YR3/4	暗褐色	シルト	耕作土。均質。
Ⅱ	10YR4/4	褐色	砂質シルト	暗褐色(10YR3/4)シルトをブロック状に少量含む。
Ⅲ	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む。
Ⅳ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	黒褐色(10YR2/2)粘土と黄褐色(10YR5/8)粘土をブロック状に少量含む。

（4）発見遺構と出土遺物

今回の調査では、性格不明遺構１基を検出した。

第１号性格不明遺構　ＳＸ１

本調査区北東部に位置する。部分的な検出であり遺構全体の規模や形状が不明のため、性格不明遺構とした。検出部分は円形を呈し、幅は2.9m以上である。Ⅱ層上面から掘り込まれており、深さは0.85m以上で、底面までの完掘は出来なかった。遺物は、石製品の一部、貝殻数枚が出土している。

（5）遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物はない。

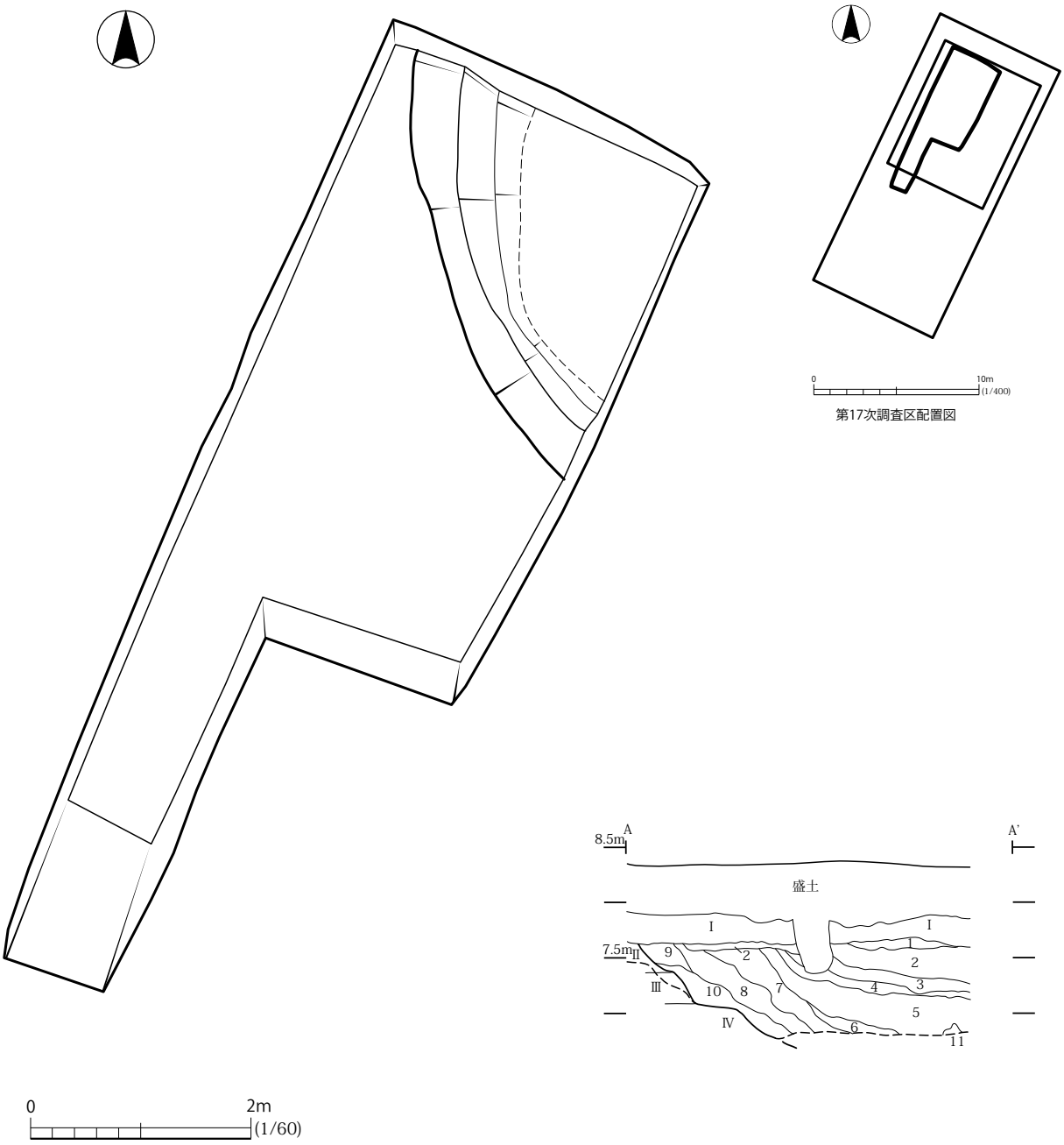
6まとめ

遺構面はⅡ層上面で、性格不明遺構１基を検出した。出土遺物が僅少なことと、底面まで調査できなかったため、遺構の性格、年代を推定することはできなかった。第１次・第13次・第14次調査成果から、本調査区は旧河道の延長に位置しており、河道の西岸の可能性もある。

土層注記

SX1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	褐色(10YR4/4)シルトをブロック状に少量含む。
2	10YR4/4	褐色	シルト	黒褐色(10YR3/2)粘土をブロック状に少量含む。
3	10YR3/3	暗褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む。
4	10YR5/4	黄褐色	粘土	暗褐色(10YR3/3)粘土との互層。炭化物を粒状に少量含む。
5	10YR3/3	暗褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土をブロック状に少量含み、炭化物を粒状に含む。
6	10YR2/3	黒褐色	粘土	全体に炭多量含む
7	10YR3/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土をブロック状に少量含み、炭化物を粒状に多く含む。
8	10YR2/3	黒褐色	粘土	炭化物を約2mm厚の層状に含む。
9	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む。
10	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土をブロック状をに少量含み、炭化物を粒状に少量含む。
11	10YR4/4	褐色	粘土	均質。



第Ⅱ－８図　鴻ノ巣遺跡第17次調査

遺構検出状況（北から）

SX1 完掘（可能な深さで）状況
（南西から）

北壁セクション（南から）

写真図版Ⅱ－5

4　第18次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡登録番号01034）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字鴻巣42－4
調 査 期 間　　平成24年1月30日
調査対象面積　　66.24㎡
調 査 面 積　　19.8㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　廣瀬真理子　　文化財教諭　石山智之

（2）調査地点と調査経過

対象地は、鴻ノ巣遺跡の中央部西寄りにあり、第6次調査、第16次調査、第15次調査の南側に位置する。確認調査は平成24年1月30日に行った。建築範囲内に、南北3.3m×東西6.0mの調査区を設定した。重機により盛土・Ⅰ層を除去後、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、ピット3基を検出した。遺物は発見されなかった。東側に部分的に深堀をし、断面観察を行った。調査終了後、重機により転圧をかけながら埋め戻しを行い、即日撤収した。

（3）基本層序

基本層は大別3層、細別5層を確認した。盛土は約110cmである。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰa	10YR3/3	暗褐色	シルト	耕作土。
Ⅰb	10YR2/2	黒褐色	シルト	耕作土。炭化物を粒状に少量含む。
Ⅰc	10YR2/3	黒褐色	シルト	耕作土。
Ⅱ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	
Ⅲ	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	

（4）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅡ層上面である。ピット3基を検出した。

ピット1

平面形は円形である。規模は約28×26cm、断面形はU字形である。堆積土は黒色（10ＹＲ２／１）の粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。しまりが無く、比較的新しいものと思われる。

ピット2

平面形は円形である。規模は径34cmである。断面形はU字形である。堆積土は黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土質シルトの単層である。西壁でⅠｃ層に覆われていることを確認した。遺物は出土していない。

ピット3

平面形は円形である。規模は径24cmである。断面形はU字形である。堆積土は黒褐色（10ＹＲ２／２）の粘土質シルトの単層である。西壁でⅠｃ層に覆われていることを確認した。遺物は出土していない。

（5）遺構外出土遺物

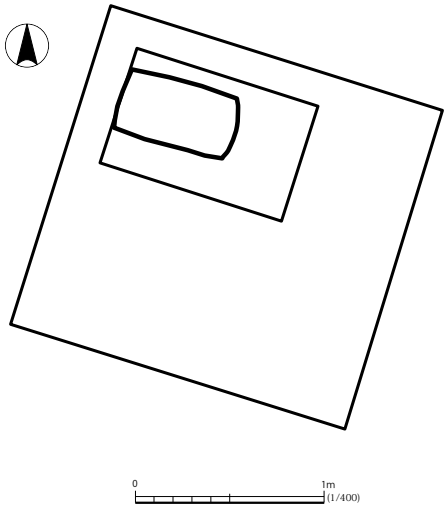
遺物は出土しなかった。

（6）まとめ

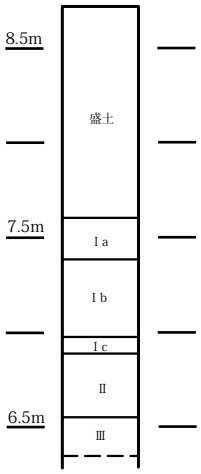
今回の調査では、ピット3基を検出したが他の遺構、遺物は発見されなかった。北側隣地を調査した第15次調査では、南側に延伸する遺構（ＳＸ１・ＳＤ１）があるが、本調査区はやや西側に位置しており、つながる遺構は検出で

きなかった。ピットの性格や時期等については不明である。

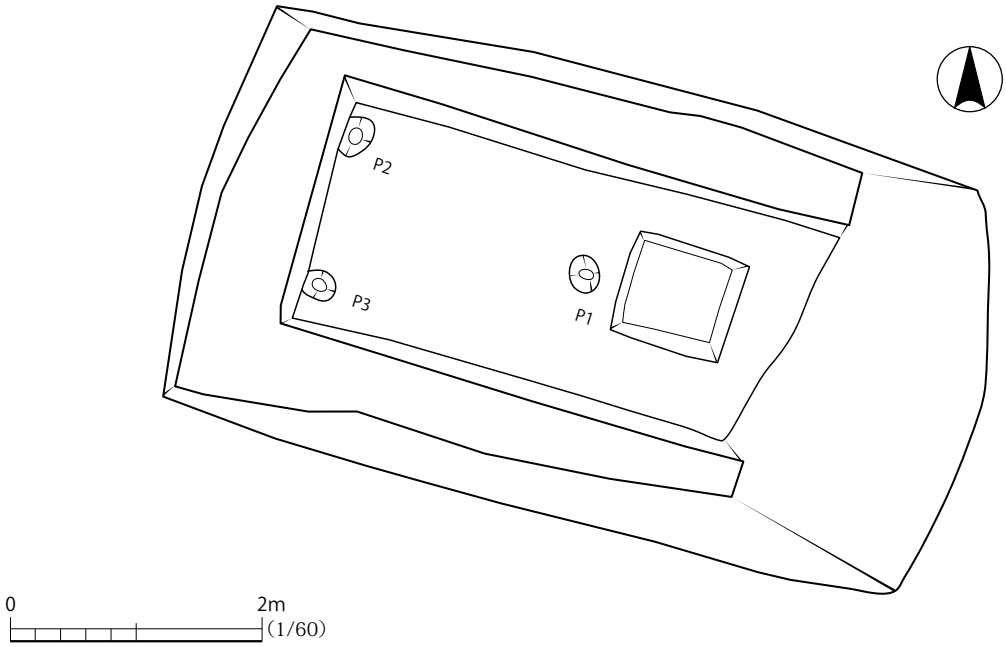
遺構はⅡ層上面で、ピット３基を検出した。北側隣地を調査した第15次調査では、南側に延伸する遺構（ＳＸ１・ＳＤ１）があるが、本調査区はやや西側に位置しており、関連する遺構は検出できなかった。



第 18 次調査区配置図



基本層柱状模式図



第Ⅱ－９図　鴻ノ巣遺跡第18次調査

遺構完掘状況（東から）

下層調査（南東から）

西壁断面（東から）

写真図版Ⅱ－6

第４節　稲荷館跡

１　遺跡の概要

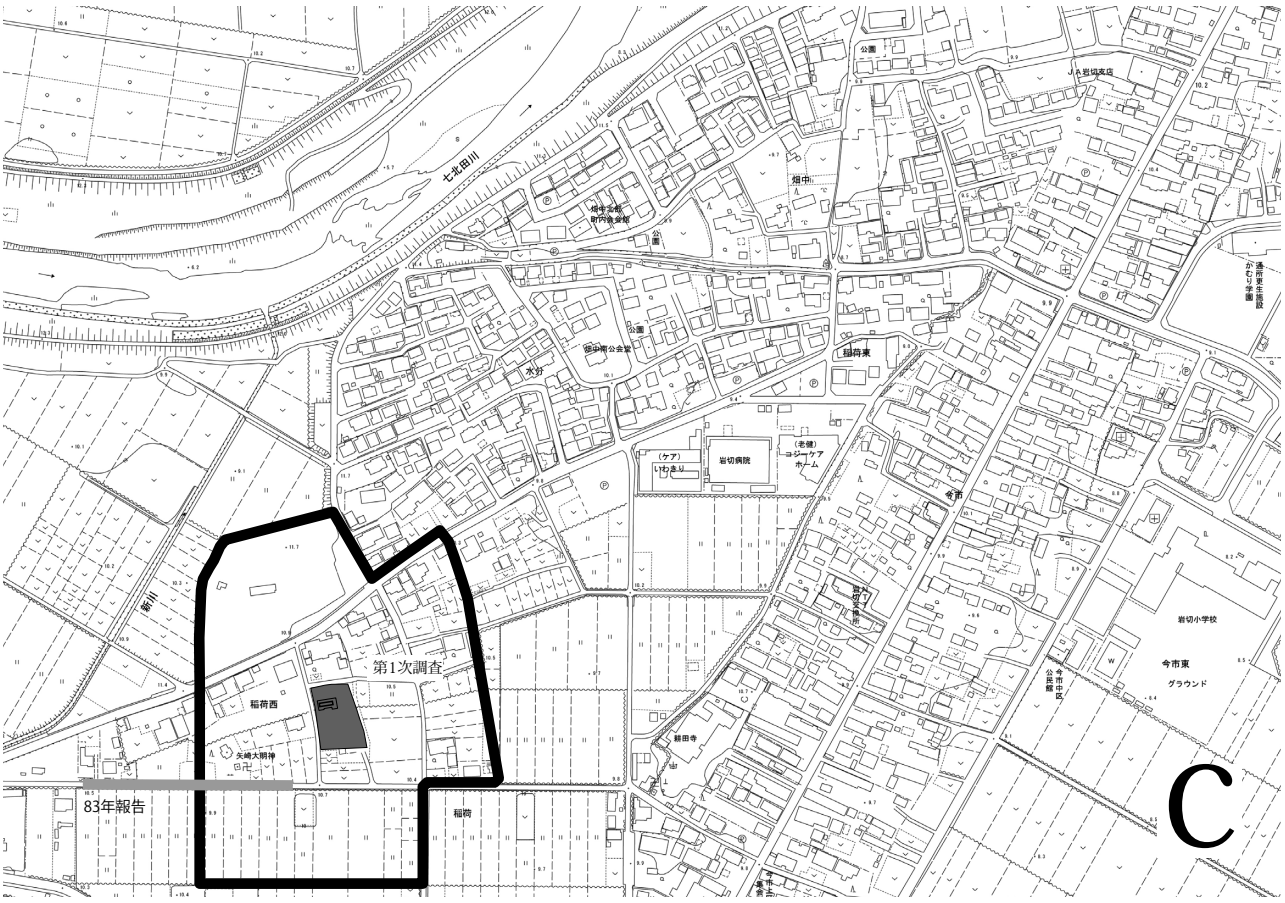
稲荷館跡は、仙台市宮城野区岩切字稲荷西に所在する。ＪＲ仙台駅の北東約7.0㎞に位置し、七北田川右岸の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西0.25㎞、南北0.30㎞ほどである。標高は約10.0～11.0ｍで、周辺の水田よりわずかに高い。

文献上の稲荷館跡については、享保13年（1728年）の『仙台領古城書立之覚』などに記載がある。『仙台領古城書立之覚』では、館の範囲を東西150m、南北70mとし、周囲を堀に囲まれていたとある。城主については不明としながらも、留守氏旧臣で近世初頭に新田開発や新道構築を行った兵藤信俊を参考に掲げている。

また、『仙台市文化財分布調査報告Ⅲ』では、館跡の北西辺に土塁が認められると記載がある。これらについては、土地の改変が進んだこともあり、現在、確認することはできない。

1981年（昭和56年）に遺跡の南部で行われた下水道工事に伴う調査では、館跡の南西部を区画するとみられる堀跡が検出されている。その東側では井戸跡、土坑、ピットが検出され、館跡に伴う施設の可能性がある。この調査では、17世紀前期頃の陶器が出土しており、館跡の年代や廃絶時期を反映しているものとみられる。また、わずかではあるが、中世に属する可能性がある遺物も出土しており、遺構群の年代が中世にまで遡る可能性を示唆している。

一方、この調査以降、周辺の調査事例が少ないことから、検出された遺構群の明確な時期や館跡と関連を明らかにするに至っていない。



第Ⅱ－10図　稲荷館跡と第１次調査区位置図

2　第１次調査

（１）調査要項

遺　跡　名　　稲荷館跡（宮城県遺跡登録番号01224）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字稲荷西37－１、２
調 査 期 間　　平成24年２月13日
調査対象面積　　261.6㎡
調 査 面 積　　36.3㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　小泉博明　　臨時職員　五十嵐愛

（２）調査地点と調査経過

対象地は稲荷館遺跡の南東部に位置する。過去に、岩切畑中遺跡『仙台市文化財調査報告第50集　宮城県仙台市岩切畑中遺跡－発掘調査報告書－：昭和58年３月』として調査報告されている地点の北東側に位置している。確認調査は平成24年２月13日に行った。住宅建築範囲内に東西3.0m×南北12.1mの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層（畑地耕作土）を除去後、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、溝跡１条を検出した。また、基本層Ⅲ層上面でも遺構検出作業を行なったが、遺構・遺物の発見には至らなかった。調査終了後、重機により輾圧をかけながら埋め戻しを行い、即日撤収した。

（３）基本層序

基本層は、盛土の下位に大別３層、細分別５層を確認した。調査区内の盛土は、平均して40cm前後である。

Ⅰ層は宅地化以前の畑耕作土で、３層に細分される。Ⅰａ層は調査区全域に分布し、層厚は30cmほどである。Ⅰｂ層は調査区西壁断面北側で確認し、層厚は最大で５cmほどである。Ⅰｃ層は調査区全域に分布する。炭化物や焼土を粒状に含み、層厚は20cm前後である。Ⅱ層は調査区全域に分布し、Ⅲ層起源の土壌を斑状に含み、焼土および炭化物を粒状に少量含む。層厚は最大30cmほどである。Ⅲ層は粘土質シルトである。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰa	10YR3/3	暗褐色	シルト	均質。
Ⅰb	10YR3/3	暗褐色	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをブロック状に含む。
Ⅰc	10YR3/4	暗褐色	シルト	焼土、炭化物を粒状に少量含む。
Ⅱ	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを斑状に含み、焼土、炭化物を粒状に少量含む。
Ⅲ	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	均質。

（４）発見遺構と出土遺物

遺構面Ⅱ層上面、溝跡１条を検出した。遺物は遺構確認面から、陶器などが出土している。

第１号溝跡　ＳＤ１

調査区南部で検出した。平面の半分程度は南の調査区外で、また緩やかな弧を描いて西から南東の調査区外へ切れていく。検出長は約12.0mで、さらに調査区外へ延びる。一部の検出と部分的な調査であることから、規模は不明であるが、上端幅1.00m以上で、深さは30cm以上である。断面形は明らかではないが、溝跡北壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は３層を確認した。Ⅲ層起源の砂質シルトを含む黒褐色などのシルトおよび粘土質シルトで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は、検出面から陶器などが出土しているが、遺構の時期決定に至るものではない。

（５）遺構外出土遺物

遺物はⅠ層から陶器などが出土した。

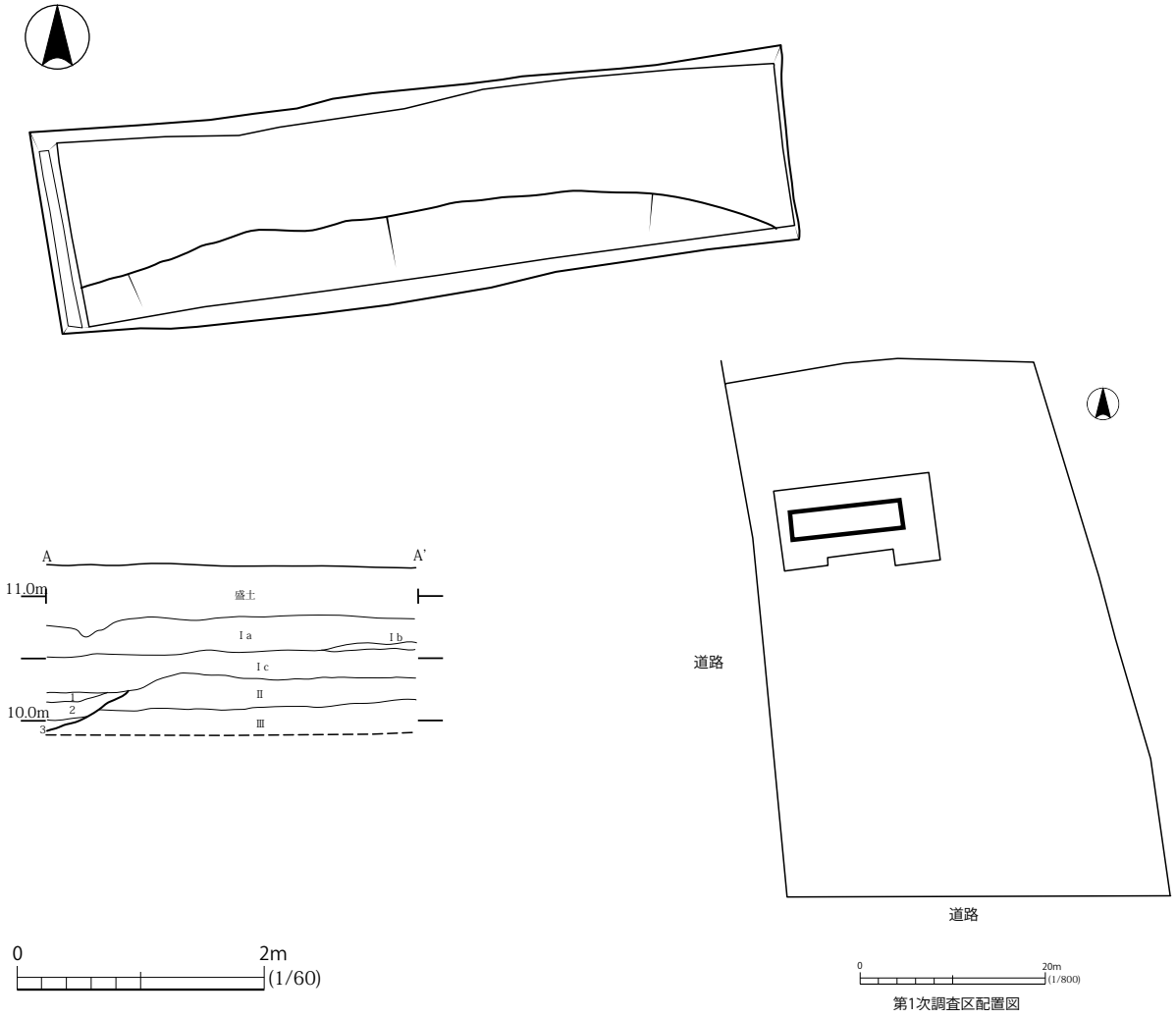
（6）まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面で溝跡１条を検出した。部分的な検出に留まることから、性格などを明らかにすることはできなかった。ＳＤ１溝跡の時期は、出土遺物には陶器が含まれていることから、中世以降と考えられる。

土層注記

SD1

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	均質。
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをブロック状に少量含む。
3	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをブロック状に少量含む。



第Ⅱ－11図　稲荷館跡第１次調査

遺構検出状況（北東から）

調査区西壁断面（東から）

ＳＤ１溝跡断面（東から）

写真図版Ⅱ－７

第５節　小鶴城跡

１　遺跡の概要

小鶴城跡は、ＪＲ仙台駅の北東約4.3㎞の宮城野区新田三丁目に所在する。七北田丘陵が平野部と接する地点にあたり、遺跡の東側に広がる後背湿地に突き出した舌状丘陵上に占地している。現況における標高は「伝上山」と呼ばれる丘陵頂部で約16ｍを測り、丘陵周辺の後背湿地との比高差は約11ｍである。

文献上の小鶴城跡については、『安永風土記御用書出』や享保13年（1728年）の『仙台領古城書立之覚』などに記載がある。『仙台領古城書立之覚』には、「小鶴城、東西六十間、南北三十六間、右之城主名一切不相知候」とある。また、『安永風土記御用書出』では、小鶴城を「古館」として記載し、「竪三十八間、横二十七間、先年、逸見丹波申御方住居之由申伝候処、年号相知不申候、寛永十八年御竿答之節、右館畑ニ罷成候ニ付、当時何館申義共ニ知不申候事」とあり、規模や城主、年代について記載されている。規模の記載については、本丸部分の規模を示すものとみられるが、現地形からその地点を推定することはできない。城主については、『仙台領古城書立之覚』では不明となっている。一方、『安永風土記御用書出』では城主を「逸見丹波」としている。逸見氏は留守景宗が伊達氏より入嗣した際に従ってきた家臣で、留守氏では宿老的な立場にあったという（天文17年（1548年）『留守分限帳』）。また、留守景宗が国分氏と争った際、佐藤三郎に小鶴城を守らせたと『留守氏家譜』（留守氏文書）に記されている。小鶴城の具体的な年代の記載については、『安永風土記御用書出』が唯一とみられ、これによると、寛永18年（1641年）の段階で城館は畑地となっており、城の名称も不明となっている。

小鶴城跡では、これまで個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査が断続的に行われている。城館主体部とみられる丘陵西部で行われた第４次調査Ａ区では、小鶴城跡に関わるとみられる整地層や掘立柱建物跡などが検出されている。また、丘陵斜面下で行われた発掘調査では、丘陵裾部を巡る大規模な溝跡を検出している。第１次調査では、丘陵西側に確認できる土塁状の高まりと溝状の地表顕在遺構のさらに西側で溝跡２条などを検出し、三重に溝が巡る可能性が指摘された。第２次調査以降の発掘調査でも、丘陵斜面直下と丘陵裾部に配置された溝跡が確認され、その位置や規模から、小鶴城跡に関連する遺構と考えられている。

２　第８次調査

（１）調査要項

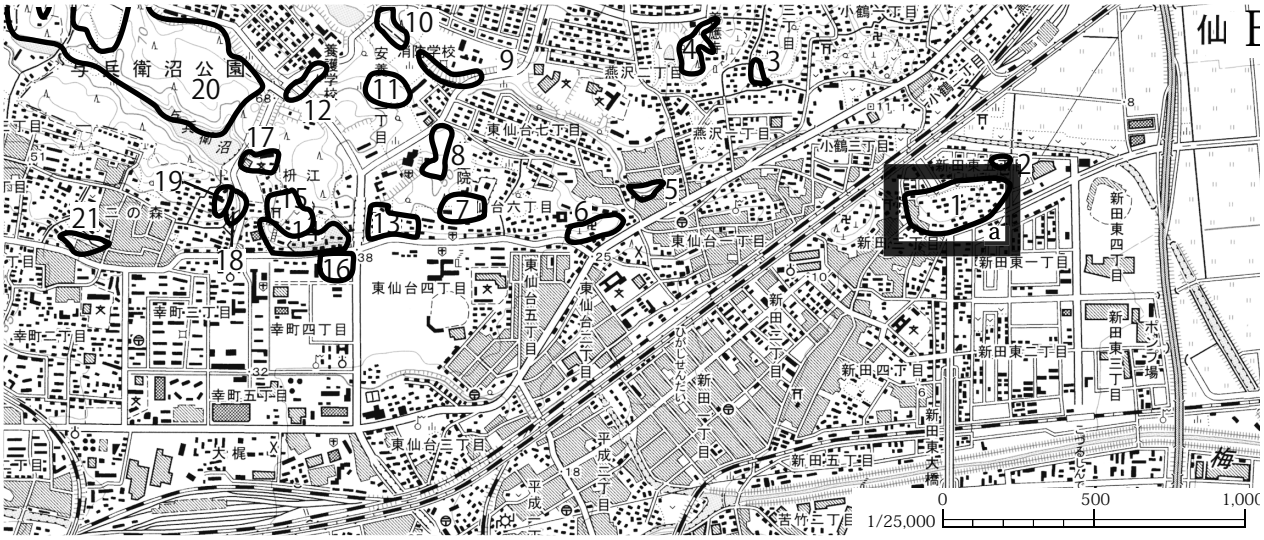
遺　跡　名　　小鶴城跡宮城県遺跡登録番号01194）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区新田三丁目37番11
調 査 期 間　　平成24年２月６日～２月８日
調査対象面積　　58.0㎡
調 査 面 積　　19.5㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　及川謙作　　文化財教諭　吉野信　　臨時職員　五十嵐愛

（２）調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の南部に位置し、小鶴城跡の主郭とみられる丘陵の裾部にあたる。確認調査は平成24年２月６日に着手した。住宅建築範囲内に南北6.5ｍ×東西3.0ｍ×南北6.5ｍの調査区を設定して、重機により盛土を除去した。基本層Ⅰ層上面およびⅡ層上面で遺構検出作業を行ったところ、溝跡が３条検出された。２月８日に調査区の埋め戻しを行い、今回の調査を終了した。

３　基本層序

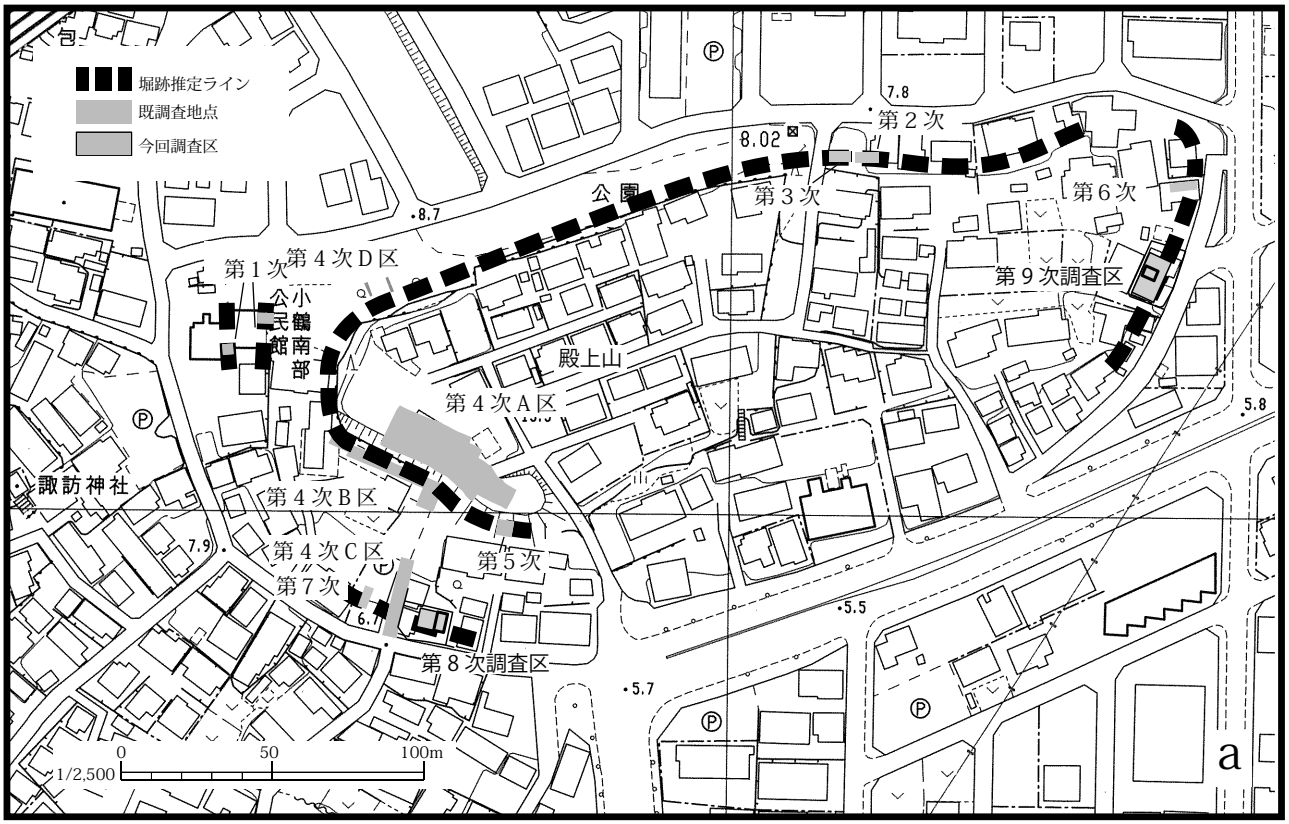
基本層は、盛土の下位に２層の基本層を確認した。Ⅰ層は黒褐色を呈する粘土質シルトで、酸化鉄を粒状に含み、砂を微量に含む。ＳＤ１溝跡は本層上面で確認された。Ⅱ層はにぶい黄褐色を呈する砂で、酸化鉄を斑状に含み、灰黄褐色の粘土をブロック状に含む。本層上面が、ＳＤ２溝跡およびＳＤ３溝跡の検出面である。なお、今回の調査地点では、宅地造成に伴う層厚約1.70～2.10ｍの盛土がある。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	小鶴城跡	城館跡	丘陵	中世
2	小鶴遺跡	散布地	自然堤防	平安
3	善応寺東横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
4	善能寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
5	燕沢公園窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良
6	大蓮寺窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良
7	土手前瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
8	安養寺下瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
9	安養寺下囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安
10	安養寺中囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
11	安養寺囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安

番号	遺跡名	種別	立地	時代
12	安養寺配水場前窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
13	小田原前田窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良
14	神明社窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
15	神明社裏遺跡	散布地	丘陵	古代
16	神明社東南麓南瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代
17	枡江遺跡	窯跡	丘陵斜面	古代
18	二の森窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安
19	二の森遺跡	散布地	丘陵斜面	平安
20	与兵衛沼窯跡	窯跡	丘陵斜面	古代・近世
21	庚申前窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良

第Ⅱ－12図　小鶴城跡の位置と周辺遺跡



第Ⅱ－13図　調査地点と既調査地点

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄)を斑状に含み､灰黄褐色(10YR8/1)砂を微量含む。
Ⅱ	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	灰黄褐色(10YR6/2)粘土をブロック状に少量含み､酸化鉄を斑状に含む。

（4）検出遺構と出土遺物

遺構面はⅠ層上面とⅡ層上面である。検出された遺構は、総数で溝跡３条である。

Ⅰ層上面は溝跡１条を検出した。

第１号溝跡　ＳＤ１

調査区南部に位置する東西方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。一部の検出であるが、検出長は約1.30mで、さらに調査区外東西へ延びる。上端幅0.85m以上、下端幅は不明である。深さ0.60m以上である。断面形は不明であるが、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は４層を確認した。堆積土最上部である１層は人為的埋土で、２層以下は自然堆積土とみられる。

時期は、遺物が出土していないことから不明であるが、溝跡の延長方向と規模から、平成22年度第４次調査で検出された溝跡と一連の遺構と考えられる。

Ⅱ層上面では溝跡２条を検出した。

第２号溝跡　ＳＤ２

調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。検出長は約1.20mで、さらに調査区外東西へ延びる。上端幅約0.20～0.30m、下端幅約0.10～0.20mで、深さ約0.12mである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面からやや急に立ち上がる。堆積土は１層である。

遺物は出土していない。

時期については、遺物が出土していないことから不明である。

第３号溝跡　ＳＤ３

調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。検出長は約0.30mで、さらに調査区外西へ延びる。上端幅約0.20m、下端幅約0.10mで、深さ約0.10mである。断面形はＵ字形を呈する。堆積土は１層で自然堆積土である。

時期については、遺物が出土していないことから不明である。

（5）遺構外出土遺物

遺物の出土は無い。

（6）まとめ

今回の調査区は、小鶴城跡の主郭部とみられる丘陵南側にあたり、東西方向の溝跡が３条検出された。このうち、ＳＤ１溝跡は、位置や方向から、平成22年度調査の第４次調査で検出された溝跡と同じ遺構と考えられ、小鶴城に伴う堀跡の可能性がある。時期については、いずれの溝跡からも出土遺物がないことから不明であるが、小鶴城跡の第一次調査の成果から、丘陵裾部を巡る三重の堀に囲まれる可能性が指摘されており、ＳＤ１との関連性については、今後の調査の進展に期待したい。

SD1

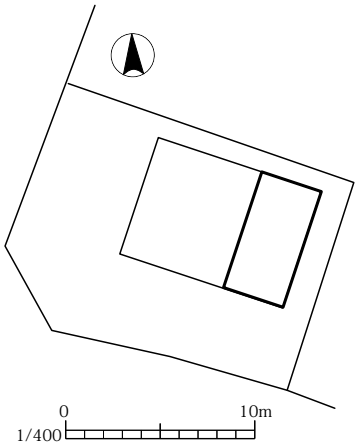
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含み、黒色(10YR2/1)粘土ブロックを少量含む　人為的埋土か
2	10YR3/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/4)の砂ををブロック状に少量含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/4)の砂をブロック状に含み、黒色(10YR2/1)の粘土を少量含む。
4	10YR2/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR5/4)の砂ををブロック状に少量含む。

SK1

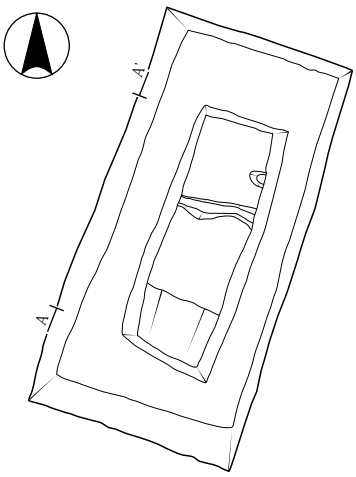
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色(10YR5/2)の砂質シルトをブロック状に少量含む。

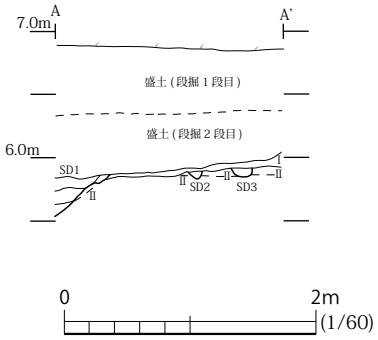
SK2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	灰白色(10YR7/1)の砂(φ2㎜)を微量含み、炭化物を粒状に微量含む。



第 8 次調査区配置図





第Ⅱ－14図　小鶴城跡第 8 次調査

遺構検出状況（北から）

SD1 完掘状況（東から）

SD2・3 検出状況（東から）

西壁断面（東から）

写真図版Ⅱ－ 8

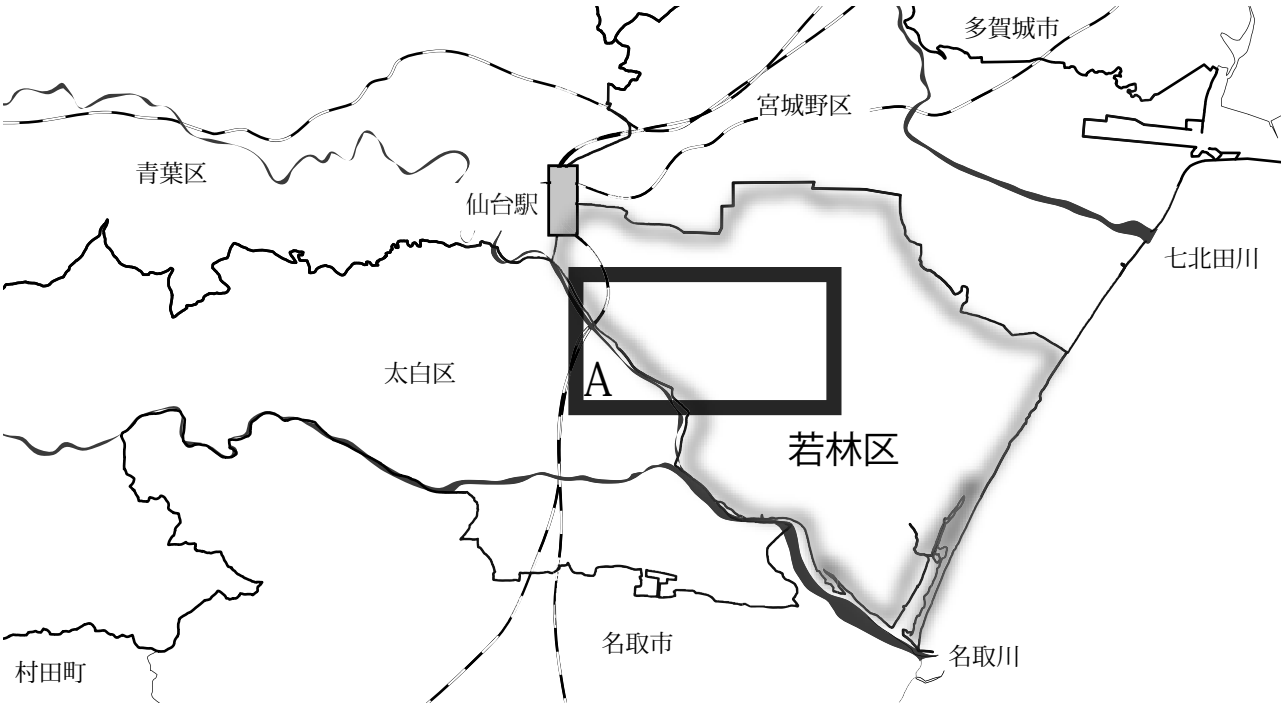
第Ⅲ章　若林区内の調査

第１節　概要

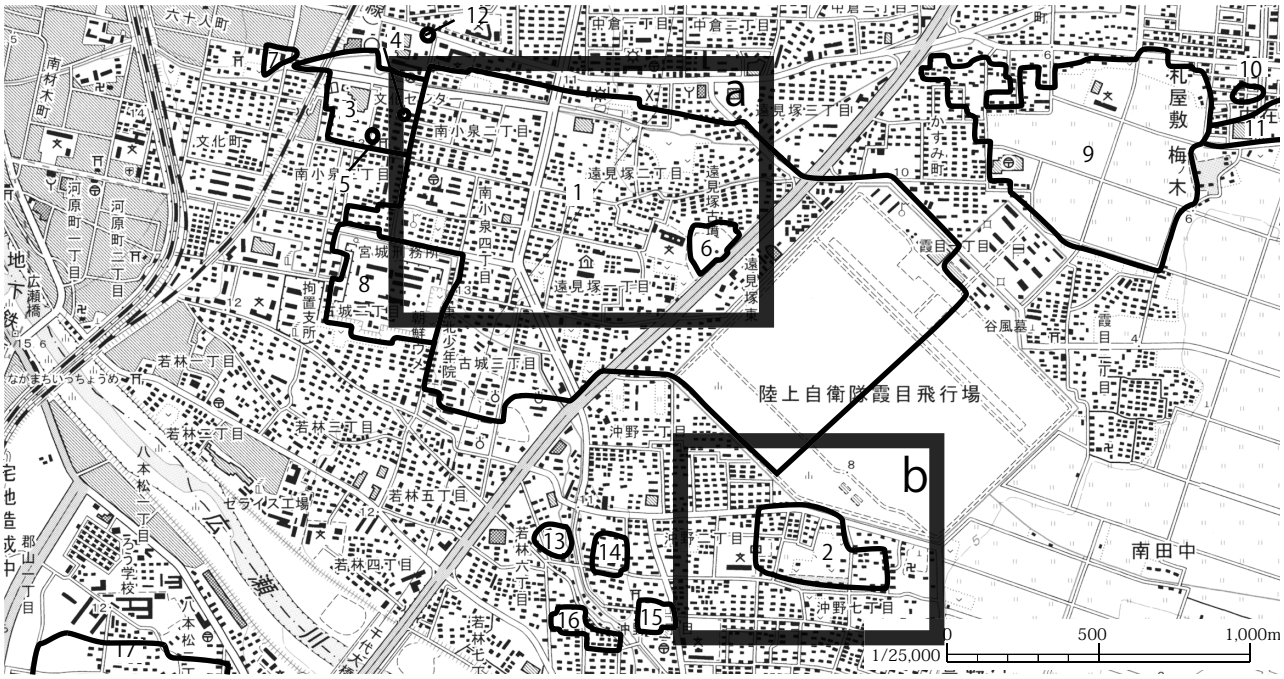
本件に係る若林区内で行われた調査は、表Ⅲ－１に示すとおりである。若林区内では第Ⅲ－１図のＡ・Ｂ二か所の区域内で、４遺跡、１隣接地において、９件の調査を行っている。これらは第Ⅲ－２図のａ区域内南小泉遺跡、ｂ区域内の沖野城跡などである。ここでは、南小泉遺跡第69次（Ｈ23－65）･70次（Ｈ23－85）･71次調査（Ｈ23－92）、沖野城跡第12次調査（Ｈ23－95）、第14次調査（Ｈ23－94）の成果を報告する。

表Ⅲ－１　若林区内の調査一覧

No.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等No.
23－65	南小泉遺跡	94.19㎡	34.3㎡	１月10日～１月13日	第69次	H23 106－231
23－84	中在家南遺跡	97.63㎡	19.5㎡	１月30日		H23 106－312
23－85	南小泉遺跡	59.62㎡	24.6㎡	１月24日～１月25日	第70次	H23 106－308
23－88	薬師堂東遺跡隣接地	88.45㎡	24.0㎡	２月24日		H23 106－277
23－92	南小泉遺跡	107.44㎡	12.1㎡	２月６日～２月９日	第71次	H23 106－346
23－93	沖野城跡	76.32㎡	15㎡	３月８日		H23 106－313
23－94	沖野城跡	155.86㎡	40.12㎡	２月20日	第14次	H23 106－356
23－95	沖野城跡	105.22㎡	31.62㎡	２月28日	第12次	H23 106－360
24－10	押口遺跡	75.7㎡	14.1㎡	５月14日		H24 122－26



第Ⅲ－１図　若林区と遺跡位置図の位置



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生～近世
2	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
3	養種園遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代・中世・近世
4	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)
5	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)
6	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳(前期)
7	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世
8	若林城跡	城館跡・円墳・集落跡	自然堤防	古墳・平安～近世
9	仙台東郊条里跡	条理遺構	自然堤防	古代
10	中在家遺跡	包含地	自然堤防	古代
11	中在家南遺跡	土器棺墓・土抗墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生～中世
12	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(終末期)
13	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
14	神柵遺跡	建物跡・河川跡・包蔵地	自然堤防	古代
15	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
16	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
17	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡・包含地	自然堤防・後背湿地	縄文～奈良(初)

第Ⅲ－２図　南小泉遺跡・沖野城遺跡の位置と周辺の遺跡

第２節　南小泉遺跡

１　遺跡の概要

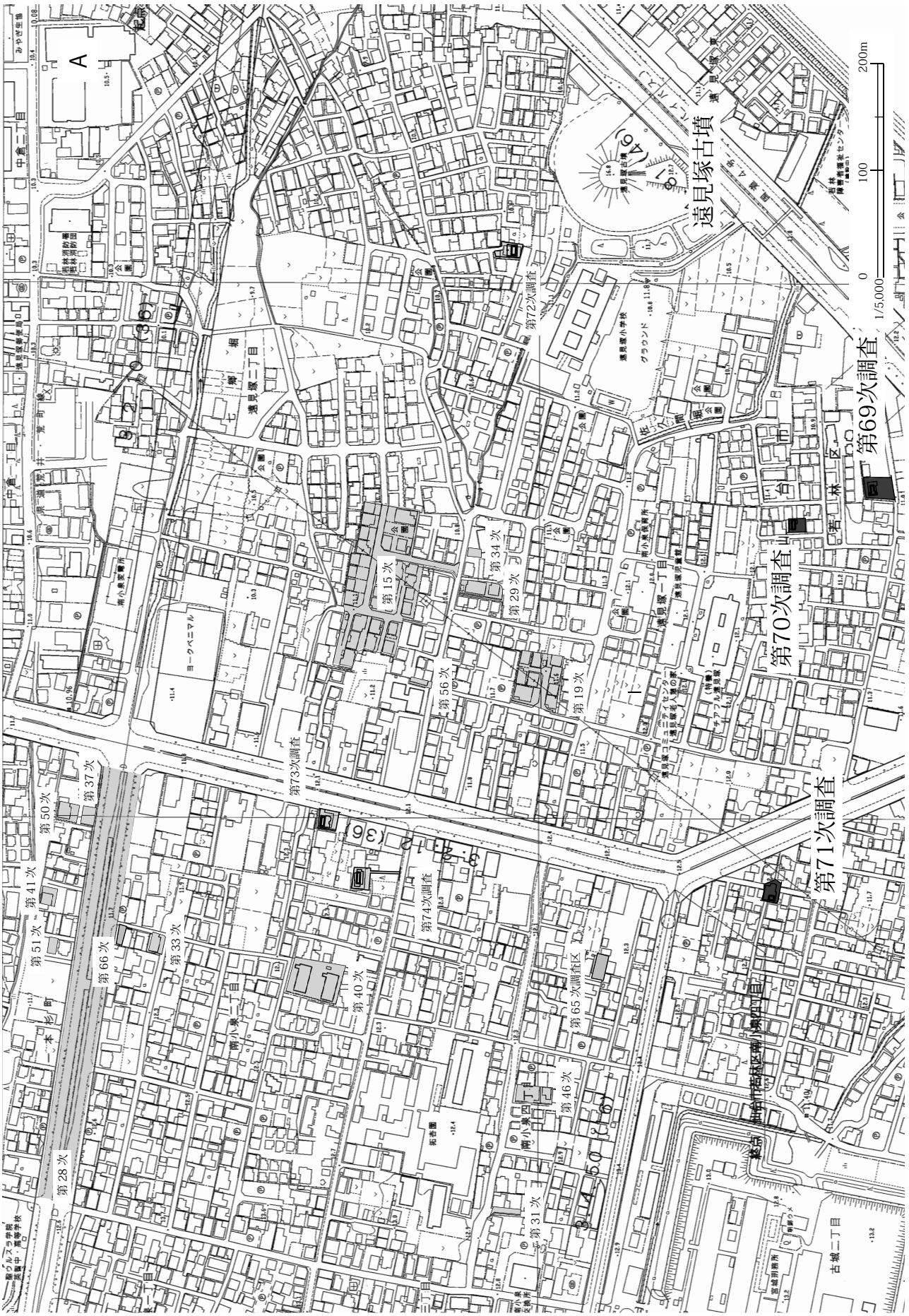
南小泉遺跡は、宮城県仙台市若林区南小泉、遠見塚、古城、霞ノ目に所在する。ＪＲ仙台駅の南東約＊kmに位置し、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約2.0km、南北約1.0kmにおよぶ。標高は7.0～14.0mほどである。南小泉遺跡は、縄文時代から近世までの複合遺跡である。これまでに68次におよぶ発掘調査の他、個人住宅建築などに伴う発掘調査が断続的に行われている。

縄文時代では、晩期の大洞Ａ式縄文土器、剥片石器、礫石器が出土した遺物包含層が検出されている。

弥生時代では、土器棺墓がある。集落の発見には至っていないが、多くの遺物が出土している。遺物には、弥生時代前期から後期の土器、石包丁、石斧、石鏃などの石器がある。

古墳時代には、古墳時代中期から後期にあたる集落跡が発見されている。また、南小泉遺跡の範囲内や周辺には、国指定である遠見塚古墳をはじめ、法領塚古墳、猫塚古墳などが分布している。

古代になると、奈良時代に遺跡の北側に陸奥国分寺や国分尼寺が造営される。遺跡内では、奈良時代末から平安時



第Ⅲ－３図　南小泉遺跡の調査地点と主要調査地点

遺跡となっている。また、南小泉遺跡の範囲内や周辺には、国指定である遠見塚古墳をはじめ、法領塚古墳、猫塚古墳などが分布している。

古代になると、奈良時代に遺跡の北側に陸奥国分寺や国分尼寺が造営される。遺跡内では、奈良時代末から平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が増加し、９世紀代を中心とする集落が認められる。

中世には、遺構の分布は遺跡の西部で顕著になる。12世紀から16世紀にかけて、土塁や区画溝を伴う屋敷や城跡が検出されている。このうち、第16次調査で検出された城館とその周辺に散在する屋敷跡は、『仙台領古城書立之覚』の中にある小泉村の「古城」である可能性がある。

近世では、若林城跡に関係する遺構群がある。寛永４年（1627年）の若林城の造営にあわせて区割りされた町並みと考えられ、家臣、町人の居住域となっている。溝で画された屋敷地の発掘調査では、掘立柱建物、井戸、土坑、土塀などが検出されている。

２　第69次調査

（１）調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号登録01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚一丁目36番
調 査 期 間　　平成24年１月10日～13日
調査対象面積　　94.2㎡
調 査 面 積　　34.3㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　廣瀬真理子　　文化財教諭　石山智之

２　調査地点と調査経過

対象地は、南小泉遺跡の中央部南寄りに位置する。調査は平成24年１月10日に着手した。住宅建築範囲内に、南北3.0m×東西8.6mのトレンチを設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層およびⅡ層を除去した。基本層Ⅲ層上面で人力により遺構検出作業を行い、竪穴住居跡、溝跡、土坑、ピット等を検出した。調査では、当初、設定した調査区の調査終了後、竪穴住居跡の北東隅の検出を目的に調査区西北端部を2.0ｎ×2.0mの範囲で調査区を拡張している。１月13日に拡張区を含む調査区の埋め戻しが完了し、今回の調査を終了した。

（３）基本層序

基本層は、大別３層、細別５層を確認した。Ⅰ層は宅地化以前の畑地耕作土で、３層に細別される。Ⅱ層は黒褐色を呈する粘土質シルトである。Ⅲ層は褐色の粘土質シルトである。Ⅱ層上面とⅢ層上面が遺構面である。なお、今回の調査区には、宅地化に伴う層厚約0．40mの盛土がある。

層位	土色	土質	備考
Ⅰa	10YR4/2灰黄褐色シルト	シルト	
Ⅰb	10YR3/3暗褐色シルト	シルト	
Ⅰc	10YR2/3黒褐色シルト	シルト	
Ⅱ	10YR3/3暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	
Ⅲ	10YR4/6褐色粘土質シルト	粘土質シルト	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトを粒状に少量含む。

（４）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅡ層上面とⅢ層上面である。検出された遺構は総数で＜竪穴住居跡１軒、溝跡９条、土坑５基、焼土遺構１基、ピット６基である。出土遺物には土師器、ロクロ土師器、須恵器がある。

Ⅱ層上面では、溝跡１条、ピット１基を検出した。

第７号溝跡　ＳＤ７

調査区東部に位置する南北方向の溝跡である。Ｐ１と重複し、これよりも古い。検出長は約2.80mである。規模は上Ⅱ層上面では、溝跡１条、ピット１基を検出した。

第７号溝跡　ＳＤ７

調査区東部に位置する南北方向の溝跡である。Ｐ１と重複し、これよりも古い。検出長は約2.80ｍである。規模は上端幅0.75ｍ以上、下端幅0.45ｍ以上で、深さ約0.65ｍである。断面形が逆台形を呈するものとみられる。堆積土は単層で、均質な褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

ピット１

調査区西部に位置するピットである。平面形は楕円形を呈し、規模は、径0.30ｍ、深さ0.15ｍほどである。柱痕跡は確認されなかった。堆積土は単層で、暗褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

Ⅲ層上面では、溝跡１条、ピット１基を検出した。

第１号竪穴住居跡　ＳＩ１

調査区西部に位置する竪穴住居跡である。ＳＤ４溝跡、ＳＫ15土坑と重複し、ＳＤ４溝跡よりも新しく、ＳＫ15土坑よりも古い。平面形は隅丸方形を基調とするものとみられる。規模は、東西1.20ｍ以上、南北4.60ｍ以上である。掘方埋土を床面とし、一部に貼床が認められる。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は床面から約0.20ｍである。住居内堆積土は６層に細別され、カマド周辺の床面には、炭化物主体層が認められる。カマドは住居東辺に付設され、燃焼部が住居東辺から張り出す形態となっている。燃焼部、煙道、煙出しピットが残存するが、側壁は確認されていない。燃焼部の規模は、長軸1.00ｍ、短軸0.75ｍである。住居東辺から張り出した燃焼部の壁面には、被熱による赤変硬化が顕著であるが、住居側の燃焼部の底面には、赤変硬化が認められない。燃焼部底面から約0.10ｍの段がついて、煙道に接続する。煙道の検出長は約1.05ｍで、上端幅は0.30～0.45ｍである。一部に天井部が残存する。煙出しピットは長軸約0.30ｍ、短軸約0.25ｍの楕円形を呈し、深さ約0.40ｍである。カマド、煙道および煙出しピットの堆積土は５層に細別される。主柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されていない。遺物は、堆積土１層から土師器坏２点・高坏１点・甕92点、ロクロ土師器甕62点・甕１点が、煙道堆積土から土師器甕５点、須恵器坏１点が、カマド崩落土からロクロ土師器坏１点、カマドおよび煙道堆積土から土師器甕17点、ロクロ土師器坏３点、甕102点（同一個体２点以上）、須恵器坏１点・甕２点が、カマド前の床面からロクロ土師器坏１点が、掘方埋土からロクロ土師器甕４点が出土している。このうち、堆積土１層出土のロクロ土師器坏１点（第Ⅲ－６図６）・甕２点（第Ⅲ－６図２・７）、カマド堆積土出土のロクロ土師器坏１点（第Ⅲ－６図５）、カマド・煙道堆積土出土のロクロ土師器甕３点（第Ⅲ－６図１・３・４）を図示した。

第２号土坑　ＳＫ２

調査区西部に位置する土坑である。ＳＫ14土坑と重複し、これよりも古い。平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長軸0.60ｍ以上、短軸約0.40ｍで、深さ４～８㎝である。断面形は浅い皿状を呈する。底面には被熱のため、赤変硬化が認められる。堆積土は単層で、焼土を含む暗褐色の粘土質シルトである。

第３号溝跡　ＳＤ３

調査区東部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＤ４溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約2.90ｍである。規模は、上端幅0.90ｍ、下端幅0.40ｍで、深さ約0.30ｍである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は２層に細分され、基本層Ⅲ層粒状に含む暗褐色の粘土質シルトである。

遺物は土師器甕が１点出土している。体部の小破片で、図示していない。

第４号溝跡　ＳＤ４

調査区中央部に位置する東西方向の溝跡である。ＳＩ１竪穴住居跡、ＳＤ３溝跡、ＳＤ７溝跡、ＳＫ16土坑、Ｐ１～６と重複し、Ｐ６よりも新しく、ＳＩ１竪穴住居跡、ＳＤ３溝跡、ＳＤ７溝跡、ＳＫ16土坑、Ｐ１～５よりも古い。検出長は約7.80ｍである。規模は、上端幅0.30～0.40ｍ、下端幅0.10～0.20ｍで、深さは約0.05～0.25ｍで、底面は

東から西に向かって傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は単層で、褐色の粘土質シルトである。

遺物は土師器高坏１点・甕１点が出土している。いずれも小破片で、図示していない。

第６号土坑　ＳＫ６

調査区西部に位置する土坑である。他の遺構との重複はない。平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長軸約0.65ｍ、短軸約0.50ｍで、深さ約0.30ｍである。堆積土は２層に細分され、黒褐色の粘土質シルトである。２層は多量の灰を含む。

遺物は１層から土師器甕３点、ロクロ土師器坏５点・高台坏１点・甕２点、２層からロクロ土師器坏１点が出土している。このうち、ロクロ土師器坏２点（第Ⅲ－６図８・９）を図示した。

第８～12、16号溝跡　ＳＤ８～12、16

調査区中央～西部に分布する東西方向の溝跡群である。規模は、上端幅約0.10～0.25ｍ、下端幅約0.05～0.15ｍで、深さ0.05ｍほどである。断面形はいずれも浅い皿状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、ＳＤ８溝跡から土師器甕１点、大戸産とみられる須恵器長頸瓶１点出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。

第13～15号土坑　ＳＫ13～15

調査区西部に位置する土坑群である。平面形は不整形を呈する。規模は、長軸約0.50～0.70ｍ、短軸約0.20～0.30ｍで、深さ約0.20ｍである。底面は凹凸が著しい。遺物は出土していない。

ピット２～６

５基検出した。平面形は円形、楕円形を呈する。平面形は円形、楕円形を基調とする。規模は、径0.30～0.40ｍ、深さ0.15ｍほどである。柱痕跡等を確認できたものはない。堆積土はいずれも単層で、暗褐色および黒褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

（５）遺構外出土遺物

基本層Ⅰ～Ⅲ層から土師器甕37点、ロクロ土師器坏５点・甕８点、須恵器坏２点・甕５点、平瓦１点が出土している。このうち、土師器甕２点（第Ⅲ－６図10、第Ⅲ－７図２）須恵器坏１点（第Ⅲ－７図１）を図示した。検出面から土師器甕35点、ロクロ土師器坏３点・甕６点、須恵器甕１点している。いずれも小破片で、図示したものはない。

（６）まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡１軒、溝跡９条、土坑５基、焼土遺構１基、ピット６基を検出した。

基本層Ⅱ層上面では、溝跡１条、ピット１基を検出した。ＳＤ１溝跡は一部の検出であること、出土遺物がないことから、規模や性格、時期は不明である。

基本層Ⅲ層上面では、竪穴住居跡１軒、溝跡８条、土坑５基、底面に焼土を検出した土坑１基、ピット５基を検出した。竪穴住居跡は、そのほとんどが調査区外に延びるため、詳細は不明であるが、煙道および煙出ピットを検出した。カマド構築土は確認できなかったが、基本層Ⅲ層の削りだしである可能性がある。遺物は、堆積土から土師器が出土している。確認できたものはすべてロクロ土師器であり、この住居跡の時期は平安時代と考えられる。なお、当竪穴住居跡の東側に位置するＳＫ６土坑は、位置や状況から、本竪穴住居跡に伴う煙道もしくは煙出しピットの一部である可能性がある。

今回の調査で検出した遺構の大半が、性格や出土遺物から時期を明らかにすることはできない。ＳＤ４溝跡およびＰ６は、平安時代に属するＳＩ１竪穴住居跡よりも古い。また、ＳＤ８～12、16溝跡、ＳＫ13～15土坑は、状況から、畑耕作に伴う小溝状遺構群：耕作痕の可能性がある。

土層注記

SI1

層位	土色	土質	備考
1	10YR3/4暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	住居内堆積土。焼土、炭化物、黄褐色シルトを粒状ごく少量含む。
2	10YR3/3暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	住居内堆積土。黄褐色シルトを粒～ブロック状に多く含む。
3	10YR3/4暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	住居内堆積土。焼土を小ブロック状にごく少量含む。
4	10YR3/4暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	住居内堆積土。焼土、炭化物、黄褐色シルトを粒状に少量含む。
5	10YR3/2黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	住居内堆積土。焼土をブロック状に、炭化物を粒状に多く含み、灰をごく少量含む。
6	10YR3/2黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	カマド・煙道堆積土。焼土を粒～ブロック状に、炭化物と黄褐色(2.5Y5/3)シルトを粒状に多く含む。
7	10YR2/3黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	カマド・煙道堆積土。焼土を粒状に多く含む。
8	10YR4/4褐色粘土質シルト	粘土質シルト	カマド・煙道堆積土。炭化物を粒～ブロック状に多く含む。
9	10YR2/3黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	煙出しピット堆積土。炭化物を多く含み、焼土と黄褐色(2.5Y5/3)シルトを粒状に少量含む。
10	10YR3/3暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	炭化物、焼土をごく少量含み、黄褐色(2.5Y5/3)シルトを粒～ブロック状にやや多く含む。
11	10YR2/2黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	住居機能時堆積土。炭化物主体層。
12	10YR4/3にぶい黄褐色粘土質	粘土質シルト	貼床。しまりが強く、硬化。
13	10YR4/6褐色粘土質シルト	粘土質シルト	掘方埋土。基本層Ⅲ層主体とする層。暗褐色の粘土質シルトをブロック状に多量含む。

SK2

層位	土色	土質	備考
1	10YR3/4暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	焼土をブロック状にやや多く含む。

SD3

層位	土色	土質	備考
1	10YR3/3暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	褐色(10YR4/6)粘土質シルトを粒状にごく少量含む。
2	10YR3/3暗褐色粘土質シルト	粘土質シルト	褐色(10YR4/6)粘土質シルトを粒状に多く含む。

SD4

層位	土色	土質	備考
1	10YR4/4褐色粘土質シルト	粘土質シルト	褐色(10YR4/6)粘土質シルトをブロック状に多く含む。

SK6

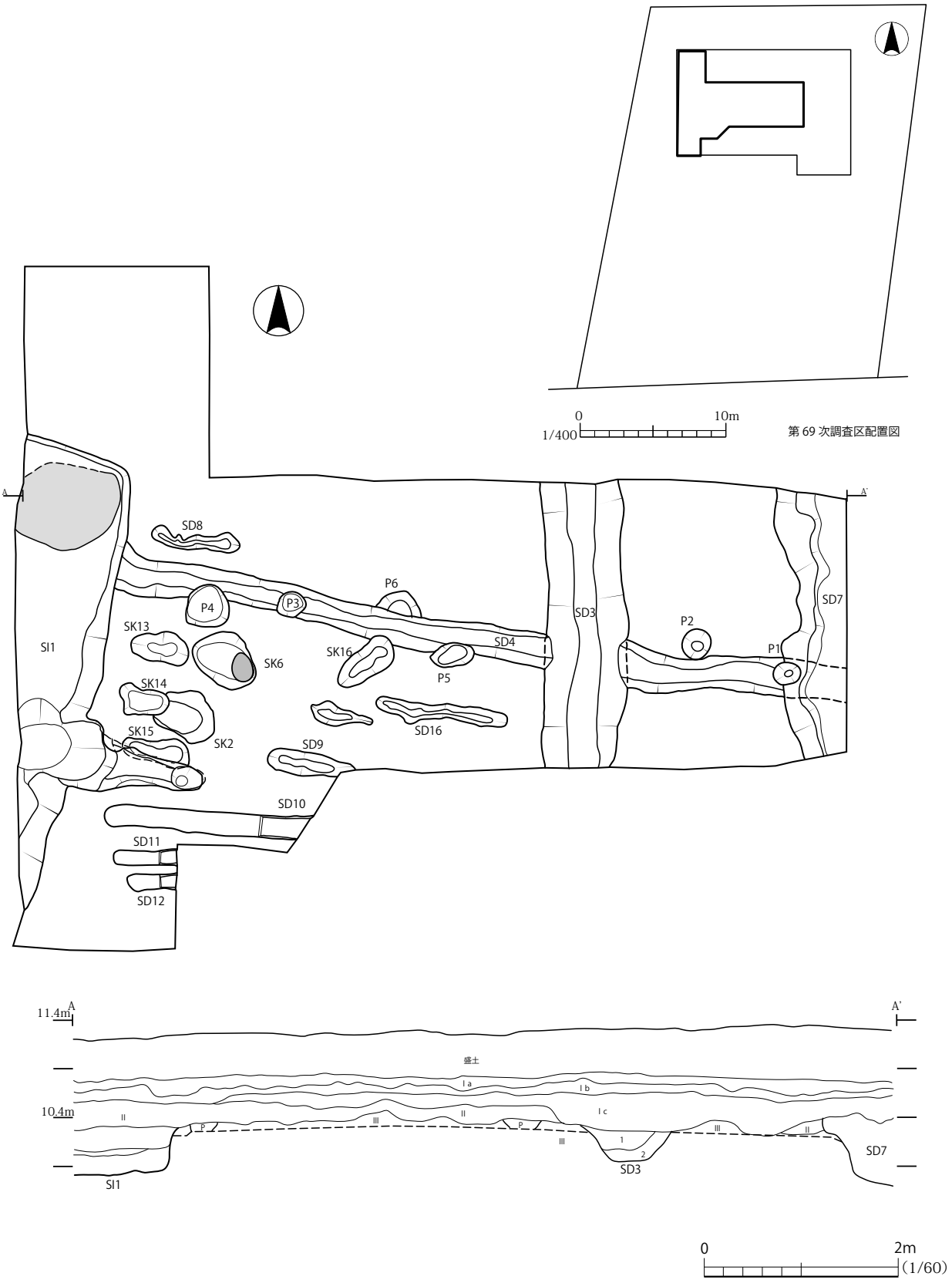
層位	土色	土質	備考
1	10YR3/2黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	
2	10YR3/2黒褐色粘土質シルト	粘土質シルト	灰を多く含む。

SD7

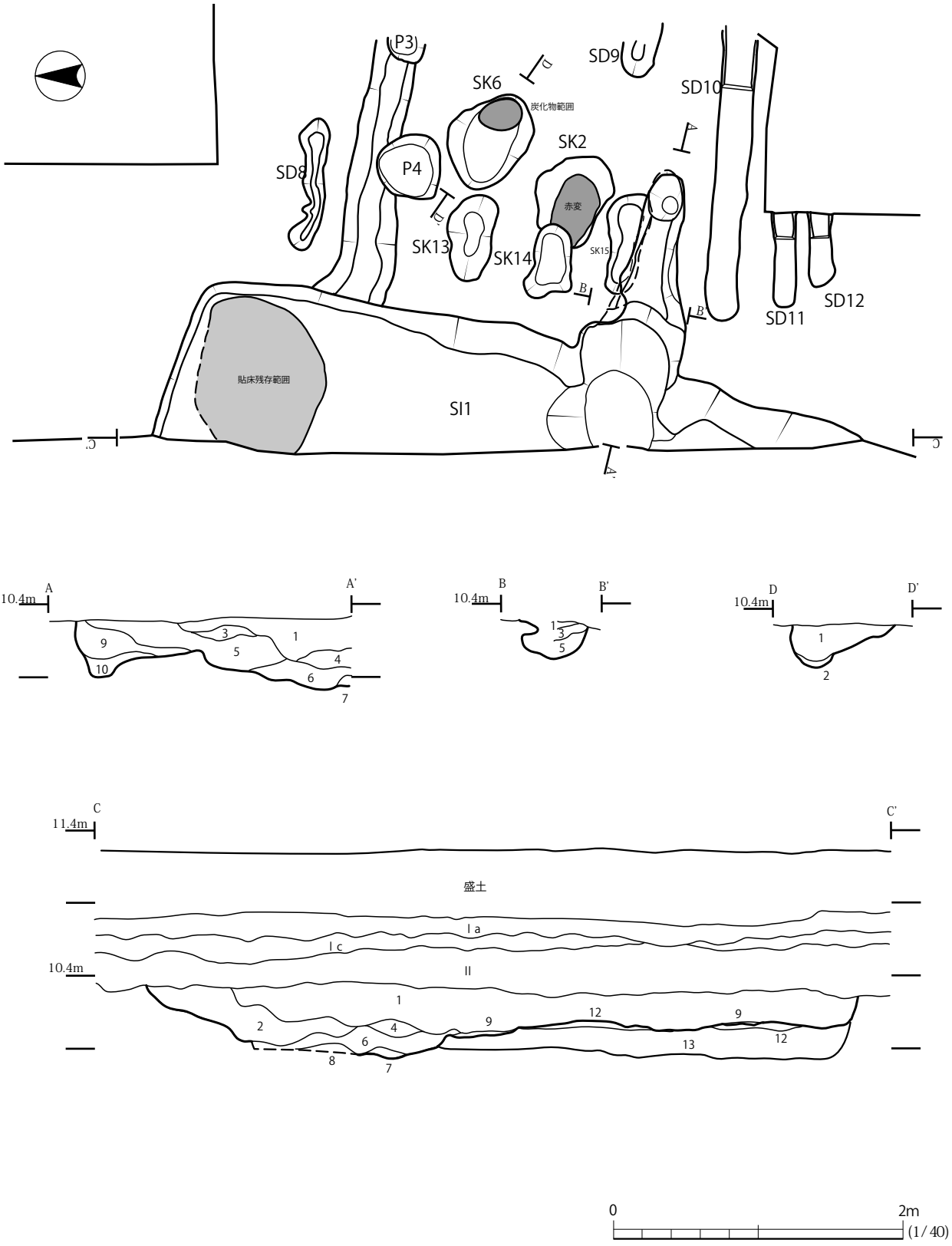
層位	土色	土質	備考
1	10YR4/6褐色粘土質シルト	粘土質シルト	均質。砂質強い。

遺物観察表

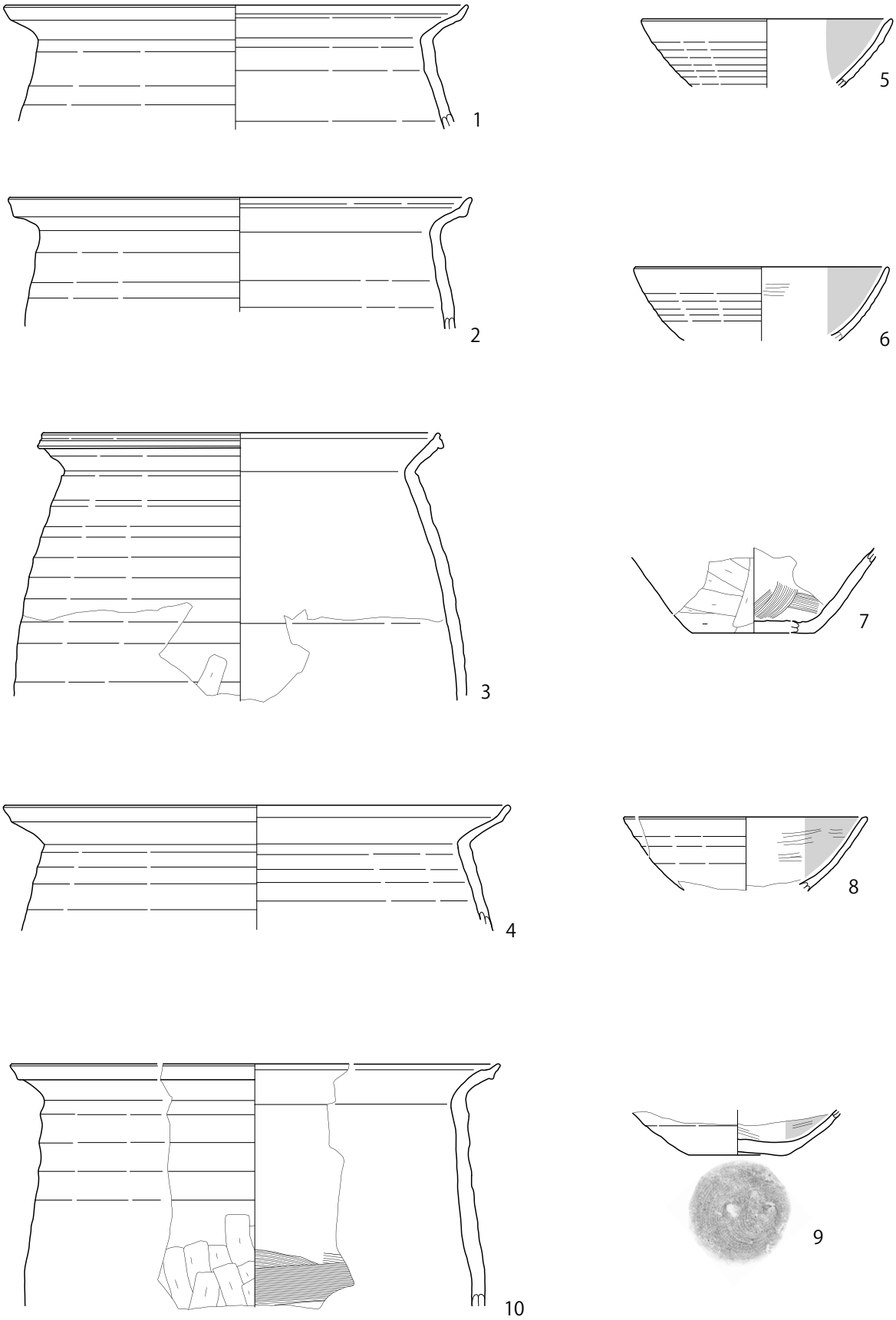
掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
Ⅲ－6－1	Ⅱ－1－1	D－8	SI1	カマド煙道堆積土	土師器	甕	一部	(26.2)	－	(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		
Ⅲ－6－2	Ⅱ－1－2	D－4	SI1	1層	土師器	甕	一部	(24.0)	－	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ		
Ⅲ－6－3	Ⅱ－1－4	D－7	SI1	カマド煙道堆積土	土師器	甕	一部	(20.5)	－	(13.8)	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ		
Ⅲ－6－4	Ⅱ－1－3	D－9	SI1	カマド煙道堆積土	土師器	甕	一部	(24.0)	－	(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		
Ⅲ－6－5	Ⅱ－1－5	D－6	SI1	カマド崩落土	土師器	坏	一部	(13.0)	－	(3.5)	ロクロナデ	ヘラミガキ　黒色処理		
Ⅲ－6－6	Ⅱ－1－6	D－3	SI1	1層	土師器	坏	一部	(13.2)	－	(3.8)	ロクロナデ	ヘラミガキ　黒色処理		
Ⅲ－6－7	Ⅱ－1－7	D－5	SI1	1層	土師器	甕	一部	－	(6.4)	(4.4)	ヘラケズリ	ロクロナデ　ヘラナデ		
Ⅲ－6－8	Ⅱ－1－8	D－11	SK6	2層	土師器	坏	一部	(12.6)	－	(3.8)	ロクロナデ	ヘラミガキ　黒色処理		
Ⅲ－6－9	Ⅱ－1－9	D－10	SK6	1層	土師器	坏	一部	－	(5.0)	(2.3)	ロクロナデ	ヘラミガキ　黒色処理	回転糸切り	
Ⅲ－6－10	Ⅱ－1－12	D－1		Ⅰ・Ⅱ層	土師器	甕	一部	(25.4)	－	(12.7)	ロクロナデ　ヘラケズリ	ロクロナデ　ヘラナデ		
Ⅲ－7－1	Ⅱ－1－10	E－1		Ⅰ・Ⅱ層	須恵器	坏	一部	－	(7.0)	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
Ⅲ－7－2	Ⅱ－1－11	D－2		Ⅰ・Ⅱ層	土師器	甕	一部	－	(7.2)	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
Ⅲ－7－3	Ⅱ－1－14	K－1		1層	石器	擦石		7.3	7.4	5.6				
	Ⅱ－1－13	H－1		Ⅰ・Ⅱ層	瓦	平瓦	一部	－	－	2.1				



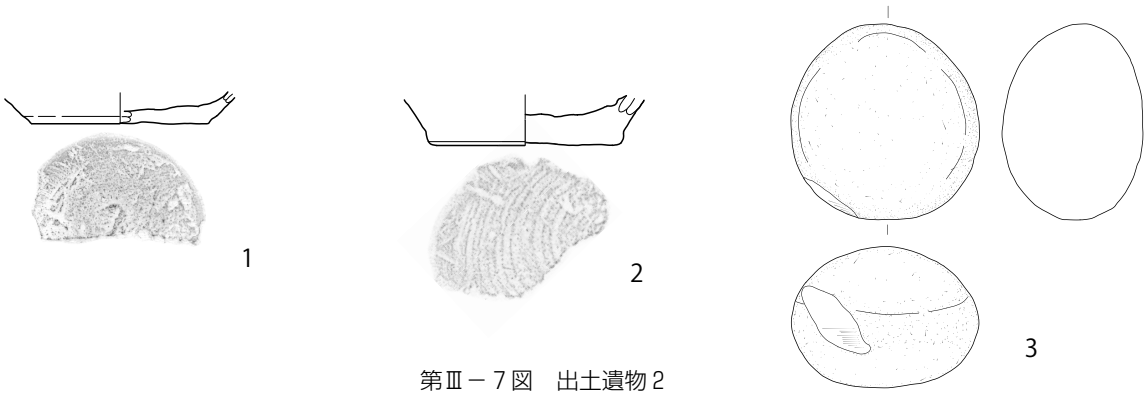
第Ⅲ－４図　南小泉遺跡第69次調査



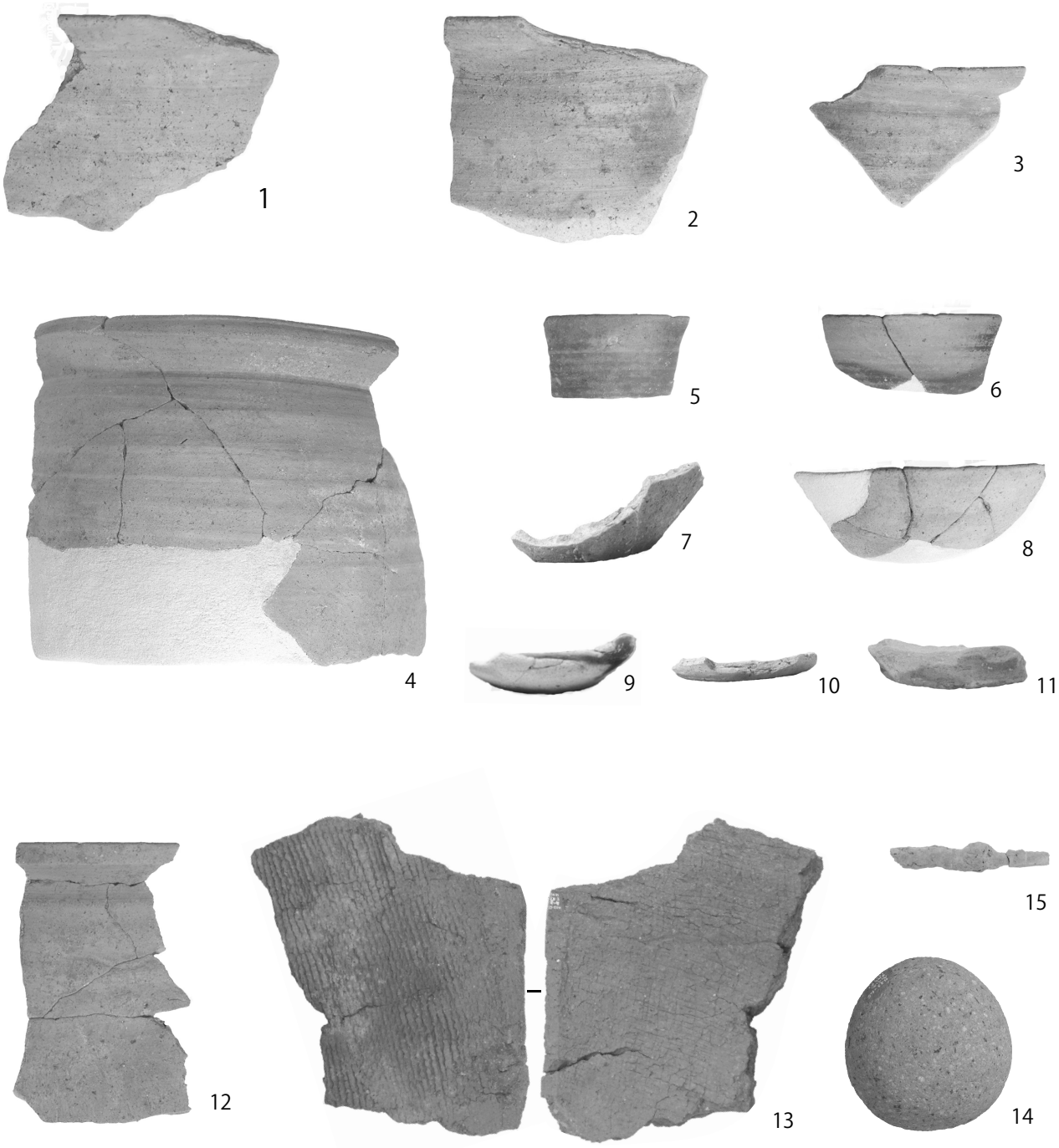
第Ⅲ－５図　ＳＩ１平面図・断面図



第Ⅲ－6図　出土遺物1



第Ⅲ－７図　出土遺物２



写真図版Ⅲ－１　出土遺物

遺構検出状況（西から）

遺構検出状況（東から）

西半部遺構完掘状況（東から）

写真図版Ⅲ－2

東半部全景（西から）

西壁断面（北東から）

SI1検出状況（北から）

写真図版Ⅲ－3

SI1床面検出状況（北から）

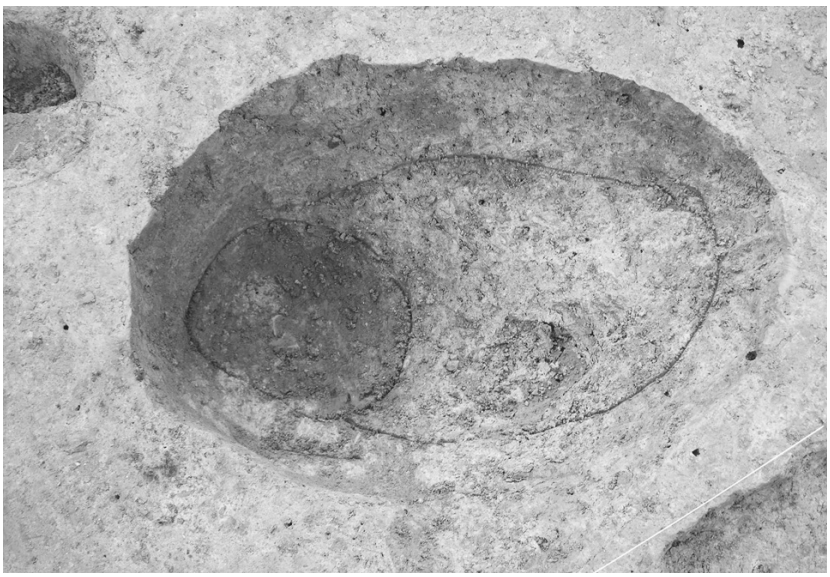
SI1カマド完掘状況（西から）

SI1ベルト南壁断面（北西から）

写真図版Ⅲ－4

SI1カマド内遺物検出状況埋土
（北西から）

SI1カマド埋土物検出状況（西から）



SK6（北東から）

写真図版Ⅲ－5

3　第70次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号登録01021）
調 査 地 点　仙台市若林区遠見塚１丁目42番７
調 査 期 間　平成24年１月24日～25日
調査対象面積　59.6㎡
調 査 面 積　24.6㎡
調 査 原 因　個人専用住宅建築工事
担 当 職 員　主事　廣瀬真理子　　文化財教諭　石山智之

（2）調査地点と調査経過

対象地は、南小泉遺跡の中央部南寄りに位置する。確認調査は平成24年１月24日に着手した。建築範囲内に、東西8.2m、南北3.0mのトレンチを設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層とⅡ層を除去した。遺構検出作業は人力により基本層Ⅲ層上面で行った。その結果、溝跡１条、土坑３基、性格不明遺構１基、ピット６基を検出した。１月24日に調査区の埋め戻しを行い、今回の調査を終了した。

（3）基本層序

基本層は、大別３層、細別４層の基本層を確認した。Ⅰ層は宅地化以前の畑耕作土である。Ⅱ層は２層に細別され、畑耕作土もしくは畑耕作に伴う天地返しなどと考えられる。Ⅲ層は黄褐色を呈する粘土質シルトで、暗褐色の粘土質シルトをブロック状に少量含む。なお、今回の調査地点には、宅地化に伴う約0.30～0.40mの盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	10YR3/4	暗褐色	シルト	耕作土。酸化鉄を多量に含む。
Ⅱa	10YR4/4	褐色	シルト	耕作土。均質。
Ⅱb	10YR4/4	褐色	シルト	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトを巻き込む。
Ⅲ	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトをブロック状に少量含む。

（4）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅢ層上面である。溝跡１条、土坑３基、性格不明遺構１基、ピット５基を検出した。遺物は、基本層および遺構堆積土から土師器、須恵器、石器が出土している。

第１号溝跡　ＳＤ１

調査区中央部に位置する南北方向の溝跡である。ＳＸ３性格不明遺構と重複し、それよりも新しい。検出長は約2.70mで、さらに調査区外南北へ延びる。規模は、上端幅約0.80m、下端幅約0.60m、深さ約0.50mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は４層に細別される。黄褐色の粘土質シルトをブロック状などに含む暗褐色、暗褐色などのシルト、粘土質シルトで、いずれも自然堆積層である。

遺物は、１層から土師器高坏５点・甕24点、須恵器甕１点、２層から土師器坏１点・甕16点、ロクロ土師器甕１点、３層から土師器高坏１点・甕４点、石器１点が出土している。このうち、土師器壷１点（第Ⅲ－９図４）と須恵器甕１点（第Ⅲ－９図２）を図示した。第Ⅲ－９図４は口縁部で、外反する。内面調整はヨコナデのちヘラミガキである。第Ⅲ－９図２は体部で、外面に平行タタキがみられる。第Ⅲ－９図５は下端に刃部加工のあるスクレイパーである。

時期については、出土遺物から明らかにすることはできない。

第２号土坑　ＳＫ２

調査区西部に位置する土坑である。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約0.40m、短軸約0.35mで、深さ約0.30mである。断面形は箱状を呈する。堆積土は２層に細別される。炭化物を含む暗褐色と褐色の粘土質シルトで、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は、１層から土師器坏１点（第Ⅲ－９図１）が出土している。底部は丸底で、口縁部は内面に屈曲する。外面調整は口縁部がヨコナデのちヘラミガキ、体部がヘラケズリのちヘラミガキである。内面調整はヘラミガキである。

器形などの特徴から、仙台平野の土器編年において、古墳時代中期の南小泉式～引田式に比定される（仙台市教育委員会2004）。

第４号土坑　ＳＫ４

調査区北部に位置する土坑である。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈する。規模は、径0.50mほどで、深さ約0.30mである。断面形はＵ字状を呈する。堆積土は単層で、黄褐色の粘土質シルトを粒状に多量に含む褐色の粘土質シルトである。

遺物は土師器坏１点・甕５点が出土している。いずれも体部の破片資料である。図示したものはない。

第５号土坑　ＳＫ５

調査区北部に位置する土坑である。他の遺構との重複はない。一部の検出であるが、平面形は不整形を呈するものとみられる。規模は、東西約0.85m、南北0.50m以上で、深さ約0.20mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、褐色の粘土質シルトをブロック状に多く含む暗褐色の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

第３号性格不明遺構　ＳＸ３

調査区中央部に位置する性格不明遺構である。ＳＤ１溝跡と重複し、それよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明であるが、方形を基調としたものとみられる。規模は、東西3.5m、南北1.0m以上である。深さ約0.10～0.20mである。壁は基本層Ⅱ層の削平を受けていることから不明瞭である。堆積土は２層に細別される。１層は暗褐色の粘土質シルトで、調査区南壁断面で確認した。層厚２～４㎝ほどで、非常にしまりが強い。２層は褐色の粘土質シルトをブロック状に多量含む黄褐色の粘土質シルトである。基本層Ⅲ層に非常によく似る人為的埋土である。また、東壁際にやや壁が立つＰ１を検出している。平面形は不整形を呈する。規模は、東西約0.50m、南北約0.30m以上で、深さはＳＸ３性格不明遺構の底面から約0.25mである。堆積土は２層に細別される。性格は不明であるが、堆積土がＳＸ３性格不明遺構２層と類似することから、一連の堆積土である可能性がある。

このＳＸ３性格不明遺構は、平面形が方形を基調とすること、堆積土が人為的埋土とみられ、状況が竪穴住居跡の掘方埋土に類似することから、床面が削平された竪穴住居跡の可能性がある。

遺物は、２層から土師器甕５点、Ｐ１から土師器甕３点が出土している。いずれも体部の破片で、図示できるものはない。

ピット

５基検出した。規模は径20～25㎝程度で、深さ約10～15㎝である。Ｐ３・５はＳＸ３性格不明遺構と重複し、いずれもこれよりも新しい。また、Ｐ２・３・４・５では、径15㎝ほどの円形を呈する柱痕跡を確認した。

遺物は、Ｐ１から土師器甕１点、須恵器甕１点が出土している。いずれも体部の小破片である。Ｐ４から土師器甕１点、須恵器甕１点（第Ⅲ－９図３）が出土している。いずれも破片資料である。第Ⅲ－９図３は体部の破片で、外面に平行タタキがみられる。

（５）遺構外出土遺物

基本層Ⅱ層から土師器坏１点・甕10点が、遺構検出面から土師器甕１点が出土している。いずれも破片資料で、全体の器形を把握できるものはなく、図示はしていない。

（６）まとめ

今回の調査では、溝跡１条、土坑３基、性格不明遺構１基、ピット５基を検出した。ＳＫ２土坑１層からは、古墳時代中期のほぼ完形の土師器坏が出土している。堆積土上層からの出土であるが、ＳＫ２土坑が５世紀代に遡る可能性がある。ＳＸ３性格不明遺構は、平面形や堆積土の状況などから、削平を受けた竪穴住居跡の可能性がある。年代については、出土遺物にロクロ土師器が伴わないことから、８世紀代以前の年代の可能性がある。

土層注記

SD1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/4	褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトをブロック状に含む。
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	褐色(10YR4/4)シルトをブロック状に多く含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトをブロック状に含む。
4	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/4)シルトをブロック状に含む。

SK2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	炭化物を少量含む。
2	10YR3/3	褐色	粘土質シルト	

SX3

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	褐色(10YR4/4)シルトをブロック状に多く含む。
P1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトをブロック状に少量含む。
P2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトをブロック状に少量含む。

SD1

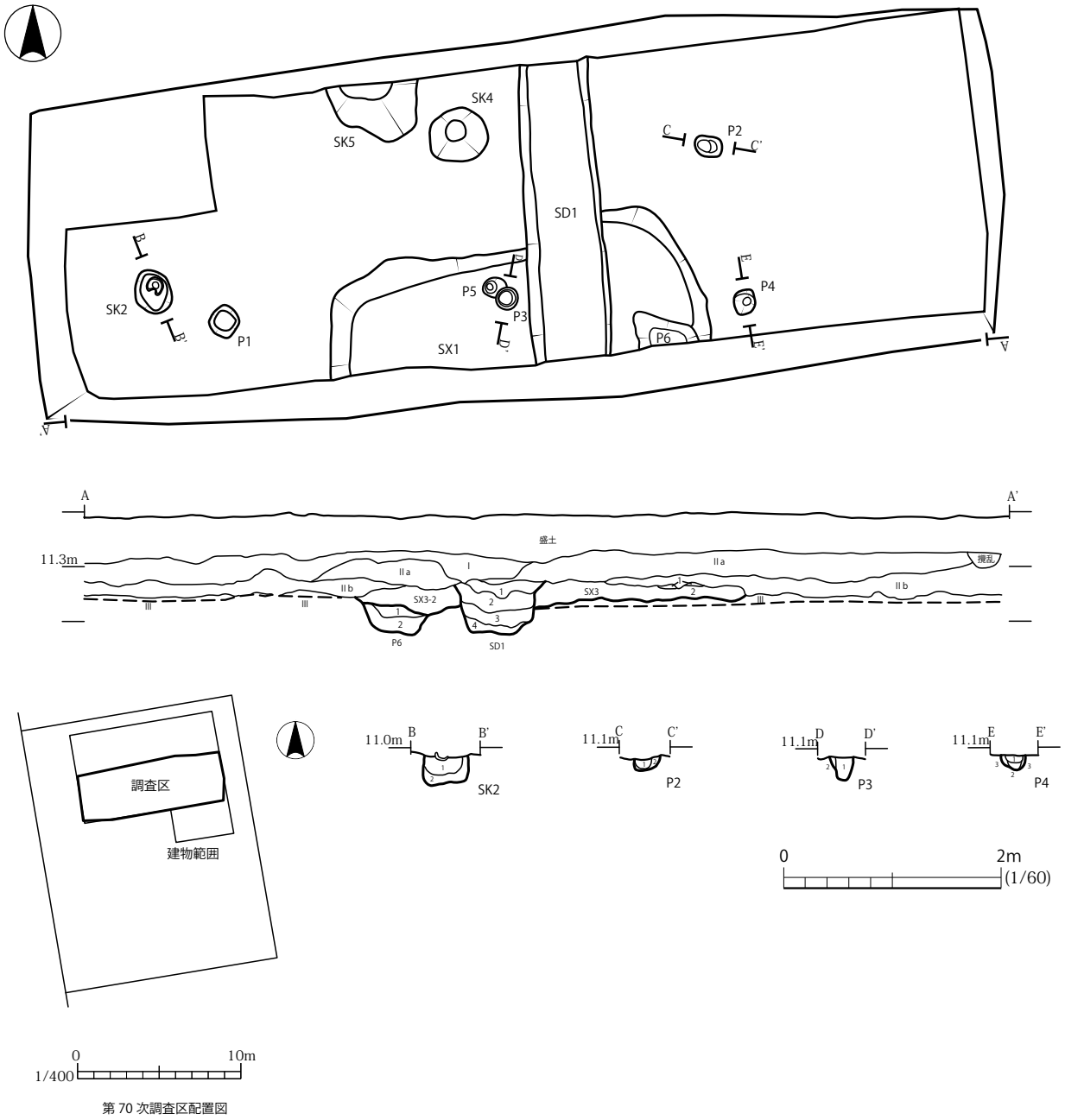
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/4	褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)の粘土質シルトをブロック状に含む。
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	褐色(10YR4/4)のシルトをブロック状に多く含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)の粘土質シルトをブロック状に含む。
4	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/4)のシルトをブロック状に含む。

P6

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/4	褐色	シルト	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトをブロック状に少量含む。
2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	黄褐色(10YR5/4)粘土質シルトをブロック状に少量含む。

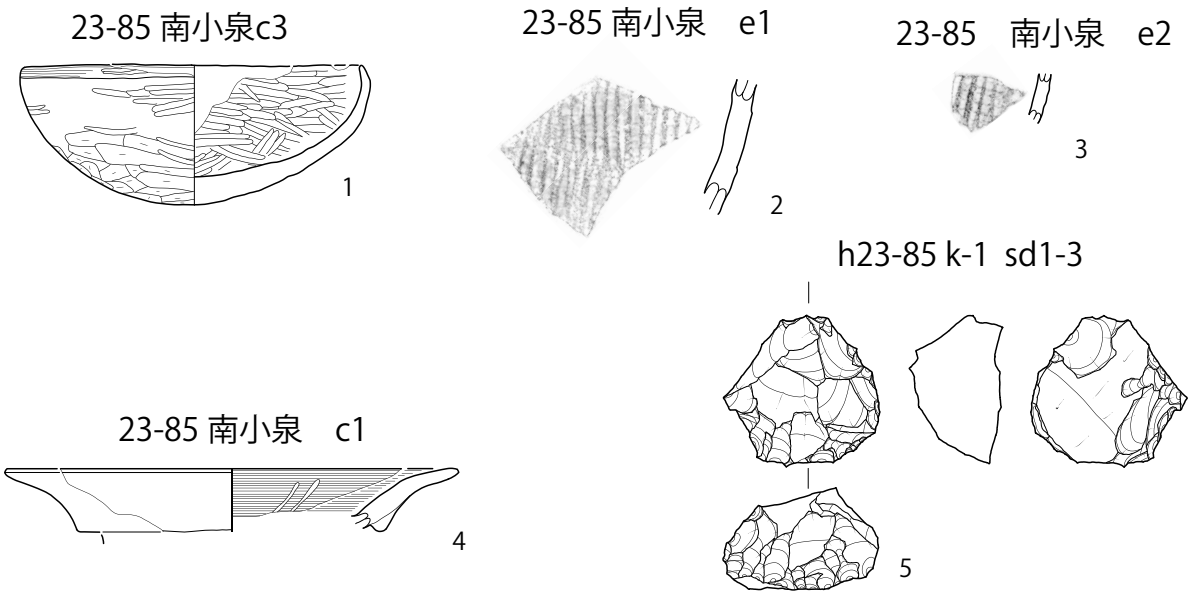
掲載遺物一覧

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
Ⅲ－9－1	Ⅲ－6－1	C－3	SK2	1層	土師器	坏	ほぼ完形	13.6	－	5.5	ヘラケズリ　ミガキ	ヘラミガキ		
Ⅲ－9－2	Ⅲ－6－4	E－1	SD1	1層	須恵器	甕	一部	－	－	－	平行タタキ			
Ⅲ－9－3	Ⅲ－6－5	E－2	Pit4	1層	須恵器	甕	一部	－	－	－	平行タタキ			
Ⅲ－9－4	Ⅲ－6－3	C－1	SD1	1層	土師器	甕	一部	(18.0)	－	(2.5)		ヨコナデ　ヘラミガキ		
Ⅲ－9－5	Ⅲ－6－6	K－1	SD1	3層	石器	スクレイパー		2.9	3.1	2.1				黒曜石
	Ⅲ－6－2	C－2	SD1	3層	土師器	高坏	一部	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラケズリ		

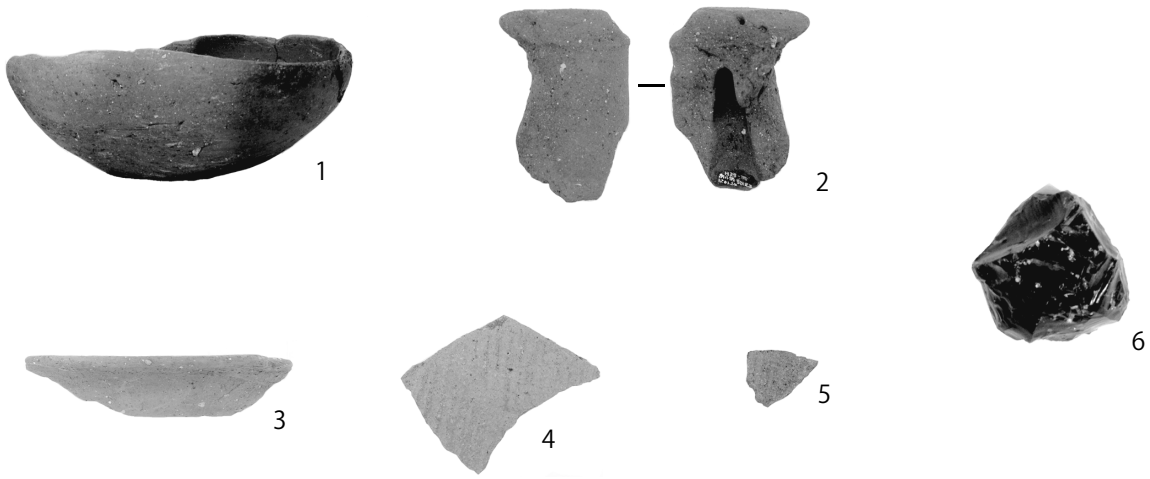


第 70 次調査区配置図

第Ⅲ－ 8 図　南小泉遺跡第70次調査



第Ⅲ－9図　出土遺物



写真図版Ⅲ－6

遺構完掘状況（東から）

南壁東半部断面（北東から）

SD1断面（北から）

写真図版Ⅲ－7

SK2遺物出土状況（南西から）

SK2断面（南西から）

SK4断面（南東から）

写真図版Ⅲ－8

4　第71次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚１丁目137番４
調 査 期 間　　平成24年２月６日～９日
調査対象面積　　107.4㎡
調 査 面 積　　12.1㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　小泉博明　　文化財教諭　石山智之

（2）調査地点と調査経過

対象地は、南小泉遺跡の南西部に位置する。調査は平成24年２月６日に着手し、建築範囲内に東西3.0m×南北4.0mの調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ層およびⅡ層を除去後、基本層Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、溝跡１条、土坑３基、ピット３基を検出した。調査は２月９日に調査区の埋め戻しを行い、終了した。

3　基本層序

基本層は、大別３層、細分５層を確認した。Ⅰ層は、宅地化以前の水田・畑地耕作土で、３層に細分される。Ⅰａ層は水田耕作土、Ⅰｂ層およびⅠｃ層は畑地耕作土である。Ⅱ層は、暗褐色を呈するシルトで、Ⅲ層起源のシルトをブロック状に含んでる。Ⅲ層はにぶい黄褐色を呈するシルトで、均質である。遺構検出面はⅡ層上面であるが、検出作業はⅢ層上面で行った。なお、今回の調査地点には、宅地化に伴う平均して0.30mほどの盛土がある。

層位	マンセル	土色	土質	混入物等
Ⅰａ	7.5Y5/2	灰オリーブ色	粘土	水田耕作土。均質。
Ⅰｂ	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
Ⅰｃ	10YR3/4	暗褐色	シルト	炭化物を粒状にごく少量含む。
Ⅱ	10YR3/3	暗褐色	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)の粘土をブロック状に含む。
Ⅲ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	均質。

（4）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅡ層上面である。溝跡１条、土坑３基、ピット３基を検出した。遺物は、遺構堆積土から、土師器、須恵器、陶器が出土している。

第１号溝跡　ＳＤ１

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。ＳＫ２土坑と重複し、これよりも新しい。検出長は約3.40mで、さらに調査区外南北へ延びる。一部の検出であることから、規模は不明であるが、上端幅1.00m以上、下端幅0.50m以上で、深さ0.90m以上である。断面形は明らかではないが、溝跡東壁はやや急に立ち上がり、上部はやや開いている。堆積土は５層を確認した。２層はⅢ層起源のシルトを小ブロック状とブロック状に多く含む暗褐色の粘土質シルトで、人為的埋土の可能性がある。３層以下は暗褐色および黒褐色の粘土質シルトで、自然堆積土とみられる。

遺物は、土師器甕９点、ロクロ土師器坏４点・甕２点、須恵器坏１点・甕２点、在地産鉢１点、常滑産甕１点、石器１点が出土している。このうち、須恵器甕（第Ⅲ－11図３）、在地産鉢（第Ⅲ－11図１）、常滑産甕（第Ⅲ－11図２）、石器（第Ⅲ－11図４）を図示した。第Ⅲ－11図２は口頸部である。口縁部は外反し、口頸部にはヘラ状工具によって波状文が施される。第Ⅲ－11図４は石核である。

時期については、在地産鉢、常滑産甕が出土していることから、中世以降と考えられる。

ＳＫ２土坑

調査区南部で検出した土坑である。ＳＤ１溝跡、Ｐ３と重複する。ＳＤ１溝跡よりも古く、Ｐ３より新しい。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西約0.50m、東西0.40m以上で、深さ約0.35mである。断面

形は逆台形を呈する。堆積土は単層である。Ⅲ層起源のシルトをブロック状に多く含む暗褐色の粘土質シルトで、人為的埋土の可能性がある。

遺物は出土していない。

第３号土坑　ＳＫ３

調査区南部で検出した土坑である。Ｐ３と重複し、これよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西約0.80m、東西0.25m以上で、深さ約0.30mである。断面形は逆台形を呈し、底面から壁がやや急に立ち上がる。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトをブロック状に含むにぶい黄褐色のシルトである。

遺物は出土していない。

第４号土坑　ＳＫ４

調査区南部で検出した土坑である。Ｐ２と重複し、これよりも古い。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約0.65m、短軸約0.35mで、深さ約0.30mである。断面形は箱状を呈する。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトと焼土をブロック状に含む灰黄褐色の粘土である。

遺物は土師器坏２点・甕４点が出土している。いずれも体部の破片資料で、図示はしていない。

ピット

３基のピットを検出した。このうち、柱痕跡が確認されたのはＰ２である。Ｐ２は調査区南部で検出した。柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約0.37m、短軸約0.30mで、深さ約0.25mである。掘方埋土はⅢ層起源のシルトをブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は径0.20mの円形を呈する。堆積土はⅢ層起源のシルトを粒状に含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物はＰ１から土師器甕１点、Ｐ４から土師器甕２点が出土している。いずれも体部の破片資料で、図示はしていない。

（５）遺構外出土遺物

基本層Ⅰ層から須恵器長頸瓶が１点出土している。頸部の破片資料で、図示はしていない。胎土の特徴から大戸産の可能性がある。

遺構検出面からロクロ土師器坏１点、須恵器１点が出土している。いずれも口縁部もしくは体部の破片資料で、図示はしていない。

（６）まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面で溝跡１条、土坑３基、ピット３基を検出した。ＳＤ１溝跡やＳＫ２・３・４土坑は部分的な調査に留まり、詳細を明らかにすることはできない。また、ピットには柱痕跡を伴うＰ２が確認されたことから、建物跡の存在が想定されるが、今回の調査では、建物跡の検出には至らなかった。いずれの遺構も、出土遺物から時期を明らかにすることはできないが、ＳＤ１溝跡からは在地産鉢、常滑産甕が出土しており、中世以降と考えられる。

今回の調査地点は、若林城跡の東側に位置し、若林城下町の東端部にあたる。現在の周辺の町割りは、若林城跡造営後もしくはそれ以前の中世期に成立した地割を踏襲していると考えられており、これに方向性を同じくするＳＤ１溝跡と関連する可能性がある

土層注記

SD1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色粘土質	粘土質シルト	炭化物と暗褐色(10YR3/3)シルトを粒状にごく少量含む。
2	10YR3/4	暗褐色粘土質	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを小ブロック状とブロック状にやや多く含み、炭化物を粒状にごく少量含む。
3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物をごく少量含む。
4	2.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)を粒状と小ブロック状に若干含み,炭化物をごく少量含む。

P1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを粒状と小ブロック状に若干含む。

P2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/3)シルトを粒状にやや多く含む。
2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトを小ブロック状にやや多く含む。

P3

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをブロック状に含む。

SK2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルトをやや多く含む。

SK3

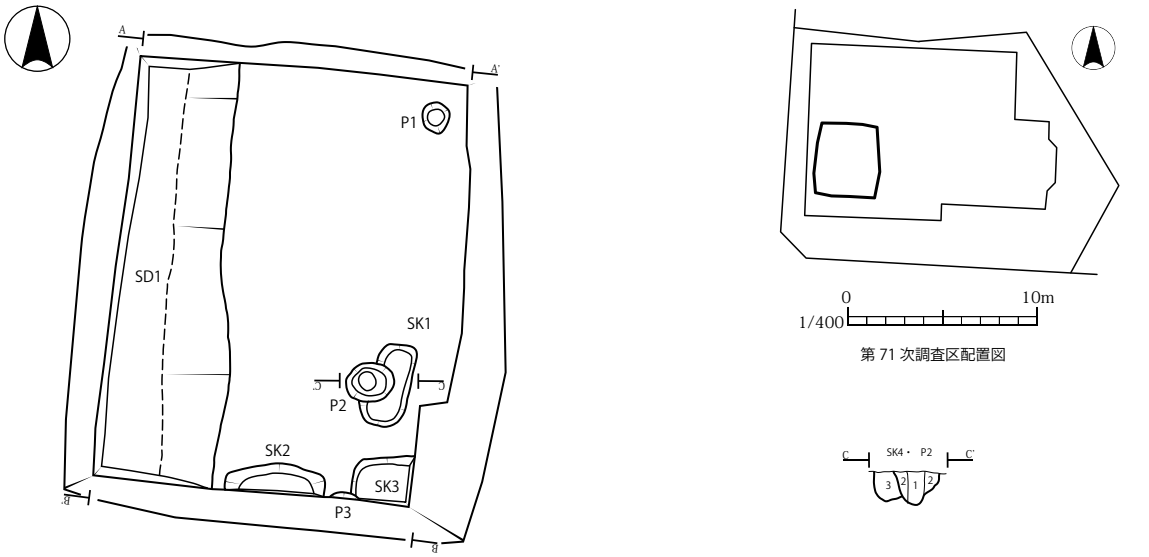
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを小ブロック状に若干含む。

SK4

層位	マンセル	土色	土質	備考
	10YR4/2	灰黄褐色粘土	粘土質シルト	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトを小ブロック状に若干含む。

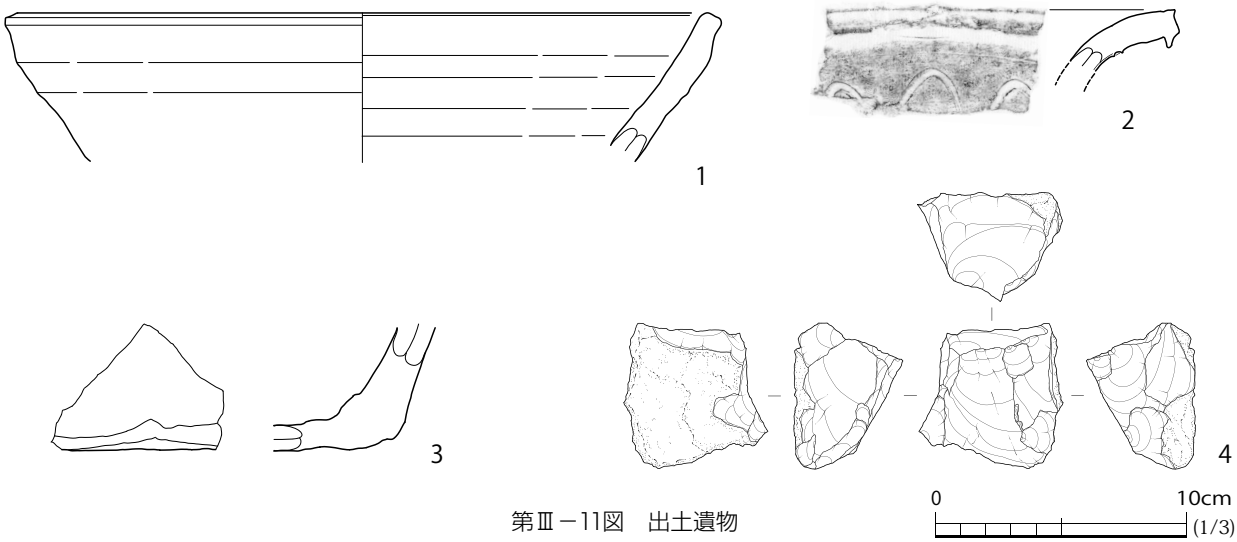
遺物観察表

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
Ⅲ－11－1	Ⅲ－9－1	I－1	SD1		陶器	鉢	一部	(28.4)	－	(5.4)				在地産
Ⅲ－11－2	Ⅲ－9－3	I－2	SD1		陶器	甕	一部	－	－	(4.9)				常滑産
Ⅲ－11－3	Ⅲ－9－2	E－1	SD1		須恵器	甕	一部	－	－	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ		波状文
Ⅲ－11－4	Ⅲ－9－4	K－1	SD1		石器	石核		5.6	5.7	4.3				流紋岩

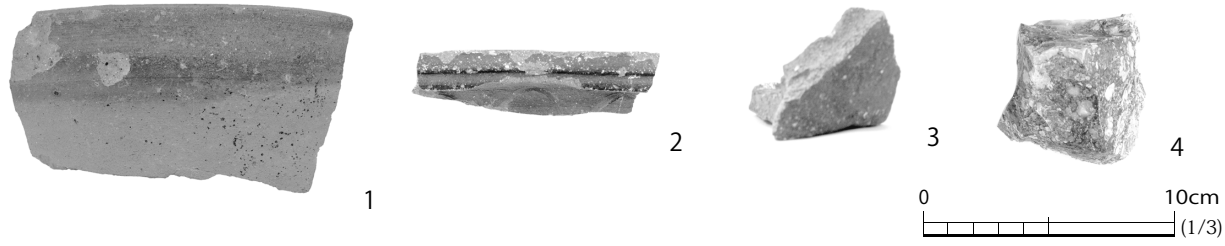


第71次調査区配置図

第Ⅲ－10図　南小泉遺跡第71次調査



第Ⅲ－11図　出土遺物



写真図版Ⅲ－9

遺構完掘状況（北から）

遺構完掘状況（南から）

調査区南壁断面（北から）

写真図版Ⅲ－10

調査区南壁 SD1 断面（北から）

P2・SK4 断面（北から）

P2・SK4 完掘状況（北から）

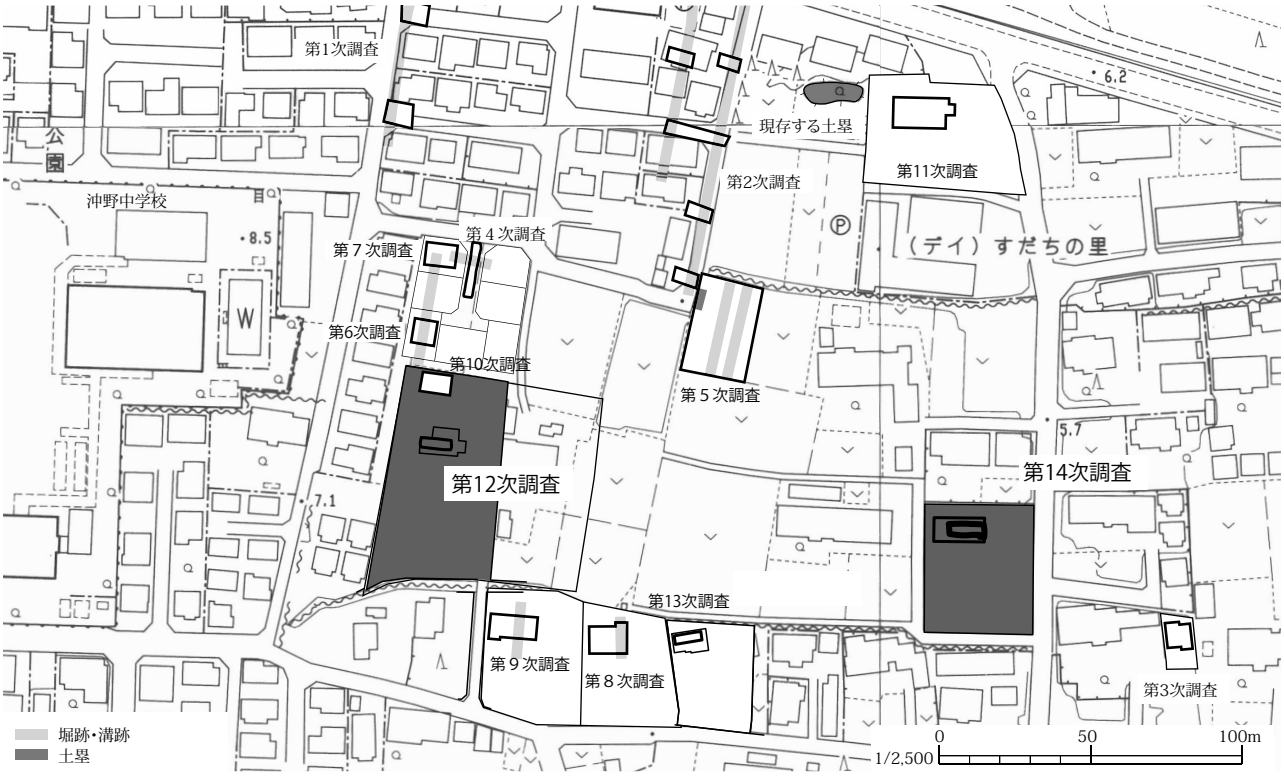
写真図版Ⅲ－11

第３節　沖野城跡

１　遺跡の概要

沖野城跡は、宮城県仙台市若林区沖野七丁目に所在する。ＪＲ仙台駅の南東約6.8ｋｍに位置し、広瀬川左岸の標高6.0mほどの自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約340m、南北約250mである。東西に延びる自然堤防の先端近くにあたり、遺跡の西側を除く三方は沖積低地が広がっている。現状では、城館の様相を把握することは困難であるが、一部に土塁状の高まりや細長い宅地や畑地の形状から堀と推定される箇所がある。沖野城跡周辺は、宅地化や圃場整理などによって、原地形は原形を失っている。明治時代中期の地籍図をみると、遺跡の周辺は広範囲が水田であるのに対して、沖野城跡の範囲は宅地や畑地となっており、それを取り囲むように細長い水田が認められる。また、昭和14年（1939年）頃に作製された『六郷村沖野舘屋敷割図』でも宅地を囲む「元堀」と記載された細長い水田が連続して描かれており、一部に土手も記されている。文献上の沖野城跡については、享保13年（1628年）の『仙台領古城書立之覚』や『藤原姓粟野家譜』（以下、『家譜』）、『荒町毘沙門堂縁起』（伊達家文書）などがある。まず、規模については、『仙台領古城書立之覚』に記載がある。それによると、城の規模は一〇〇間四方とある。また、西北に三重の堀、北辺の半分ほどと西に「土手形」があるとした写本もある。城主については、『仙台領古城書立之覚』では、粟野大膳の居城あるいは出城としている。『家譜』では、粟野国定が永正２年（1505年）に北目城を嫡男高国に譲り、自らは「沖ノ館」に居住したとある。また、高国子息の刑部国勝が、国定から「沖ノ館」を譲られたと記載がある。『荒町毘沙門堂縁起』では、高国の孫にあたる宗国と国治が、広瀬川の治水をめぐり争い、その結果、国治の居城である「沖城」を得た宗国がこれを焼いたとある。一方、『家譜』では、国治について、「助太郎、後左衛門。木工頭。沖ノ館ニ住ス。北目ト同時ニ没落ス」と記されている。これらの文献に記載された「沖ノ館」「沖館」が、沖野城跡を指すものとみられる。

沖野城跡では、これまでに個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査が断続的に行われている。第５次調査（仙台市教育委員会2010）では、幅11.90～13.50m、深さ2.50mの障壁を伴う溝跡が検出されるなど、これらの調査では、沖野城跡の区画施設とみられる遺構が検出されている。一方、沖野城跡に関わる建物跡や井戸跡など付属する施設などは検出されておらず、今後の調査に期待されている。



第Ⅲ－12図　沖野城跡調査位置図

第12次調査

（１）調査要項

遺　跡　名　　沖野城跡（宮城県遺跡登録番号01234）
調 査 地 点　　仙台市若林区沖野７丁目303番の一部
調 査 期 間　　平成24年２月28日
調査対象面積　　105.2㎡
調 査 面 積　　31.6㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　及川謙作　　文化財教諭　吉野信　　臨時職員　五十嵐愛

（２）調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の中央部に位置する。確認調査は平成24年２月28日に行った。個人住宅建築範囲内に、南北3.1m×東西10.2mの調査区を設定し、盛土および基本層Ⅰ、Ⅱ層を重機と人力を用いて除去した。遺構検出作業は基本層Ⅲ層上面で行い、土坑１基とピット２基を検出した。その後、調査区北東隅に東西約1.8m×南北0.8mの下層調査区を設定し、基本層Ⅵ層までの堆積状況を確認した。同日中に調査区の埋め戻しが完了し、今回の調査を終了した。

（３）基本層序

基本層は、今回の調査地点では、現畑耕作土を含めて３層を確認した。Ⅰ層は現畑地耕作土と、Ⅱ層上面までの盛土を一括した。Ⅱ層は黒色を呈する粘土で、褐色の粘土を層状に挟む。Ⅲ層はにぶい黄褐色を呈する粘土で、暗褐色の粘土をブロック状に含む。Ⅱ層上面が遺構面であるが、遺構検出作業はⅢ層上面で行った。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	畑地耕作土､盛土の一括。
Ⅱ	10YR2/1	黒色	粘土	褐色(10YR4/6)粘土を層状に挟む。
Ⅲ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	暗褐色(10YR3/3)粘土をブロック状に含む。

（４）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅡ層上面である。土坑１基とピット２基を検出した。遺物は、基本層および遺構堆積土から現代磁器、土師質土器が出土している。

第１号土坑　ＳＫ１

調査区西部で検出した土坑である。一部が調査区外となる。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形と推定され、規模は長軸2.70m以上、短軸1.80mで、深さ0.35mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に細分される。黒色および黒褐色の粘土で、いずれも自然堆積土である。

遺物は、１層から土師質土器皿が５点出土した。このうち３点を図示した。法量から大型（第Ⅲ－14図２・３）と小型（第Ⅲ－14図１）に分けられる。大型の第Ⅲ－14図２は口縁部がわずかに開き、内外面調整はロクロナデである。底面の切り離しは回転糸切りである。小型の第Ⅲ－14図１は器壁が厚く、体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。底部の切り離しは回転糸切りである。口縁部内外面の３箇所に油煙の付着が認められる。

時期については、土師質土器皿が出土していることから、中世以降と考えられる。

ピット１

調査区東部で検出したピットである。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈し、規模は径0.25m、深さ0.28mである。堆積土は単層で、にぶい黄褐色の粘土や炭化物を粒状に含む黒褐色の粘土である。柱痕跡は確認されていない。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ピット２

調査区東部で検出したピットである。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈し、規模は径0.25m、深さ0.23mである。堆積土は単層で、炭化物を粒状に含む黒褐色の粘土である。柱痕跡は確認されていない。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（５）遺構外出土遺物

基本層Ⅰ層から土師質土器が４点出土している。いずれも皿とみられ、口縁部もしくは体部の小破片である。図示できるものはない。

（６）まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面で土坑１基とピット２基を検出した。ＳＫ１土坑は、性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物には、ＳＫ１土坑から土師質土器皿５点がある。このうち、１点は油煙の付着が認められ、灯明皿としての使用が窺われる。年代については、土師質土器皿の編年が確立していない現状では、中世以降の範疇でしか捉えることができない。また、ピット２基は、いずれも柱痕跡は認められず、調査区の制約から建物跡を確認することはできなかった。時期についても、出土遺物がないことから不明である。

今回の調査地点は、「中館」の地名から、城館跡の主郭に関わる遺構の検出が想定されたが、確実に沖野城跡に関連する遺構は確認されなかった。周辺の調査でも、城館に関連する建物跡などの遺構が検出されていないことから、城館の内部の様相については、今後の調査成果に期待される。

土層注記

ＳＫ1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	にぶい黄橙色(10ＹＲ7/2)粘土をブロック状に少量含み、焼土と炭化物を粒状に微量含む。
2	10YR3/2	黒褐色	粘土	黒褐色(10YR3/1)粘土をブロック状(φ1cm)に少量含み、焼土と炭化物を粒状に微量含む。

Ｐ1

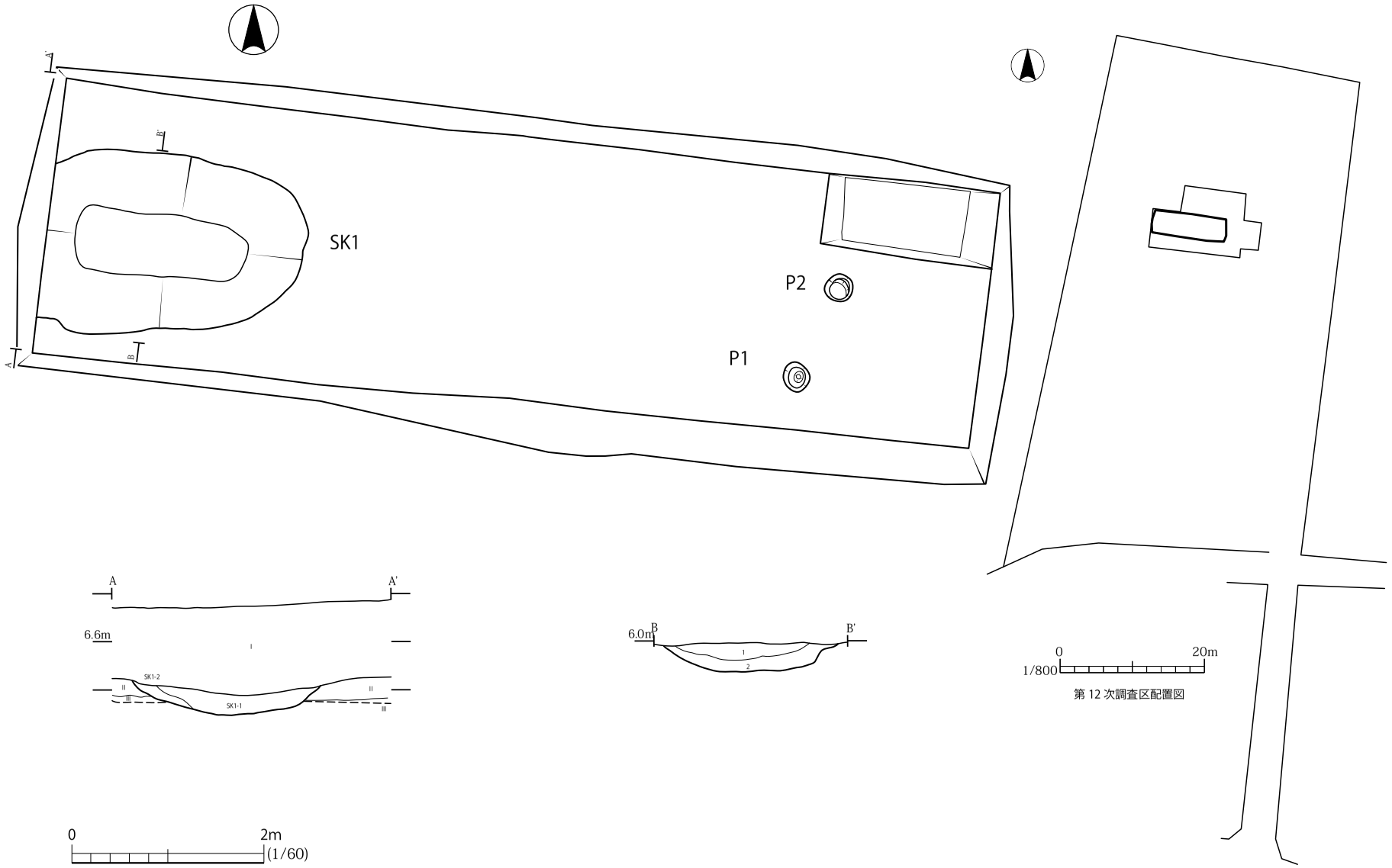
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/2	黒褐色	粘土	にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土と炭化物を粒状に少量含む。

Ｐ2

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	炭化物を粒状に少量含む。

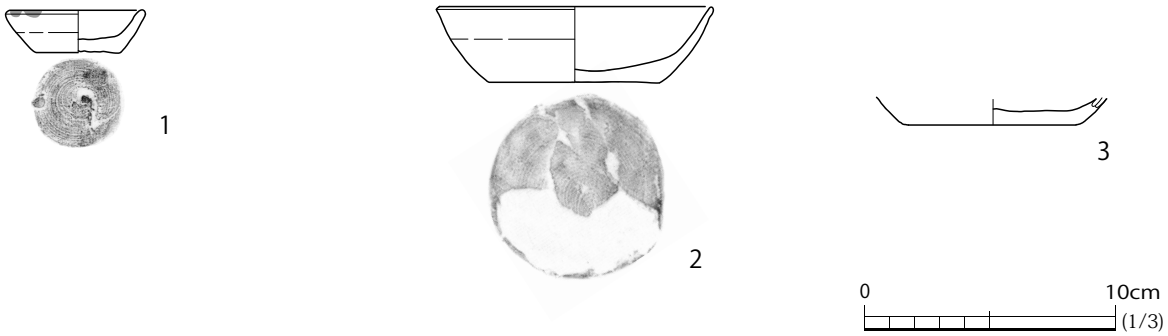
掲載遺物一覧

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
Ⅲ－14－1	Ⅲ－12－1	Ⅰ－1	SK1		土師質土器	皿	完形	5.6	3.4	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	灯明皿　口縁部3箇所に油煙付着
Ⅲ－14－2	Ⅲ－12－2	Ⅰ－2	SK1		土師質土器	皿	1/4	(11.0)	6.9	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
Ⅲ－14－3	Ⅲ－12－3	Ⅰ－3	SK1		土師質土器	皿	一部	－	(6.8)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ		器面摩滅



第12次調査区配置図

第Ⅲ－13図　沖野城跡第12次調査



第Ⅲ－14図　出土遺物

写真図版Ⅲ－12

遺構完掘状況（東から）

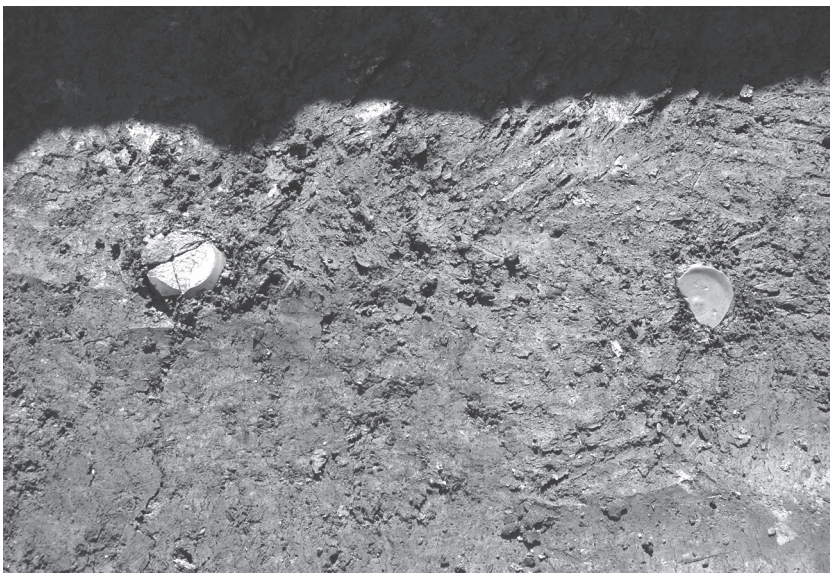
北壁断面（南西から）

深掘部北壁断面（南から）

写真図版Ⅲ－13

ＳＫ１南北断面（東から）

ＳＫ１完掘状況（東から）



ＳＫ１遺物出土状況（北から）

写真図版Ⅲ－14

3　第14次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　沖野城跡（宮城県遺跡登録番号01234）
調 査 地 点　　仙台市若林区沖野７丁目382の一部
調 査 期 間　　平成24年２月20日
調査対象面積　　155.9㎡
調 査 面 積　　40.12㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　及川謙作　　文化財教諭　吉野信　　臨時職員　五十嵐愛

（2）調査地点と調査経過

対象地は、沖野城跡の中心から南東方向に位置している。確認調査は平成24年２月20日に行った。建築範囲内に、南北3.4m×東西11.8mの調査区を設定し、盛土および基本層Ⅰ～Ⅲ層を重機と人力を用いて除去した。遺構検出作業は基本層Ⅳ層上面で行い、ピット４基を検出した。調査区北東隅に南北約１m×東西約３mの深掘りトレンチを設定し、ＧＬ－150cmまで掘り下げ、基本層Ⅶ層までの堆積状況を確認した。調査終了後、重機を用いて轢圧をかけながら埋め戻しを行い、即日撤収した。

（3）基本層序

基本層は７層を確認した。調査区内における盛土は層厚約30cmである。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	旧耕作土。にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトをブロック状に含む。
Ⅱ	10YR2/2	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトをブロック状にやや多く含む。
Ⅲ	10YR2/1	黒褐色	粘土	褐色(10YR4/4)粘土と互層状に含む。
Ⅳ	10YR3/1	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土を互層状に含む。
Ⅴ	10YR3/1	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土をブロック状に含む。
Ⅵ	10YR2/2	黒褐色	粘土	均質。
Ⅶ	10YR5/1	褐灰色	粘土	褐灰色(10YR4/1)粘土をブロック状を含む。

（4）発見遺構と出土遺物

検出面は、Ⅳ層上面である。ピット４基を検出した。

ピット１～４

遺物は出土していない。

（5）遺構外出土遺物

遺物は盛土から銭貨（寛永通宝）が１点出土している。

（6）まとめ

今回の調査では、基本層Ⅳ層で遺構検出作業を行い、ピット４基を検出した。遺物の出土がなく、ピットの時期は不明である。

土層注記

P1

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/2	黒褐色	粘土	灰黄褐色(10YR4/2)粘土をブロック状にごく少量含む。

P2

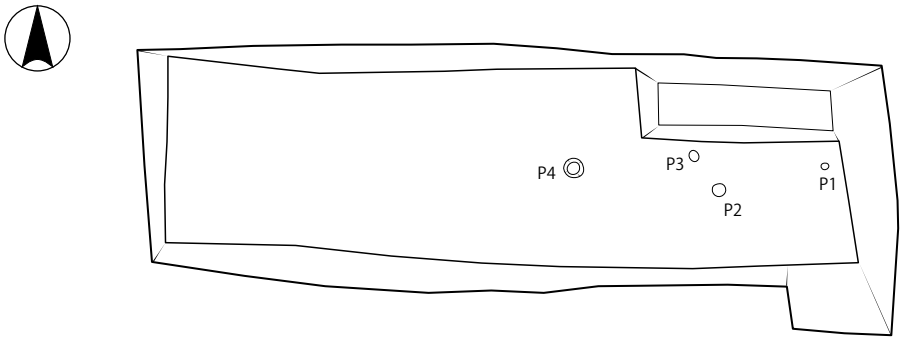
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/1	黒褐色	粘土	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトをブロック状に若干含む。

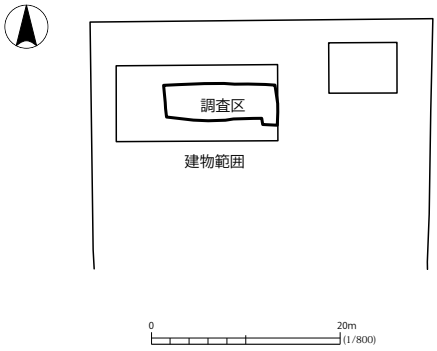
P3

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/2	黒褐色	粘土	灰黄褐色(10YR4/2)粘土をブロック状に若干含む。

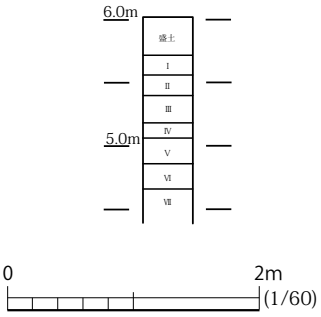
P4

層位	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土	均質。





第14次調査区配置図



第Ⅲ－15図　沖野城跡第14次調査

遺構検出状況（南東から）

遺構完掘状況（東から）

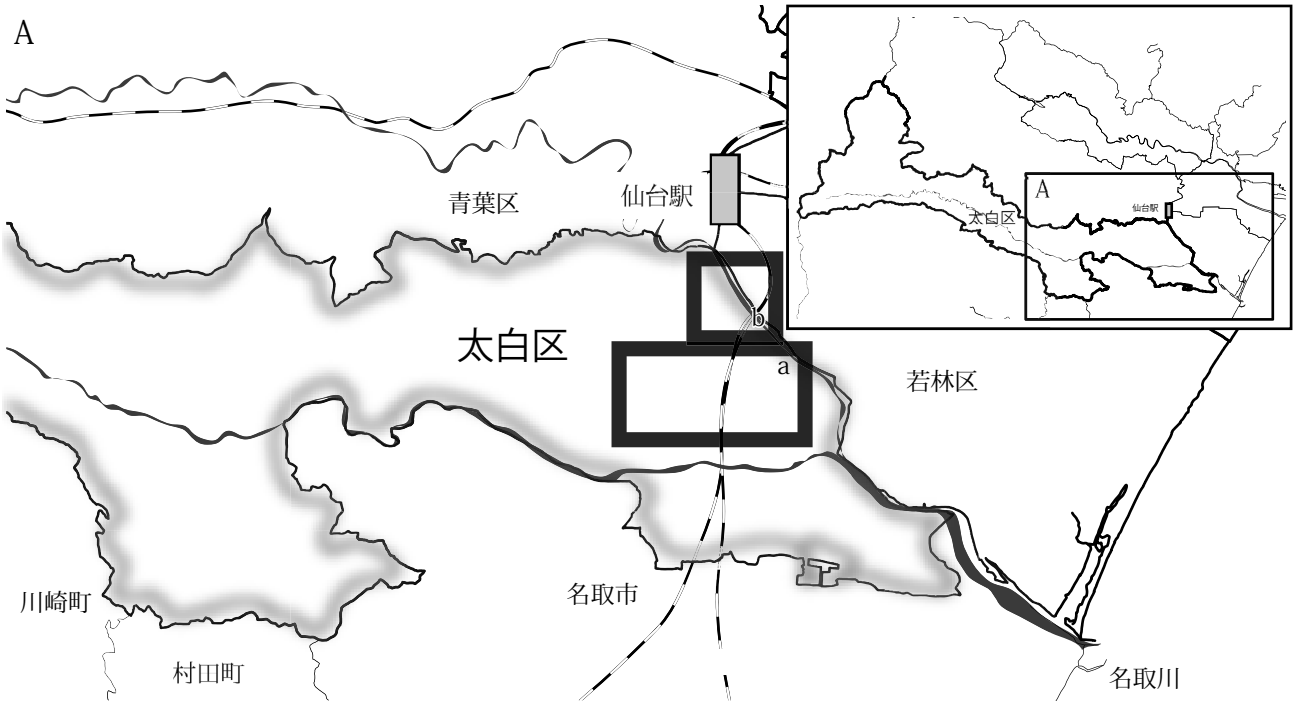
深掘部分北壁断面（南から）

写真図版Ⅲ－15

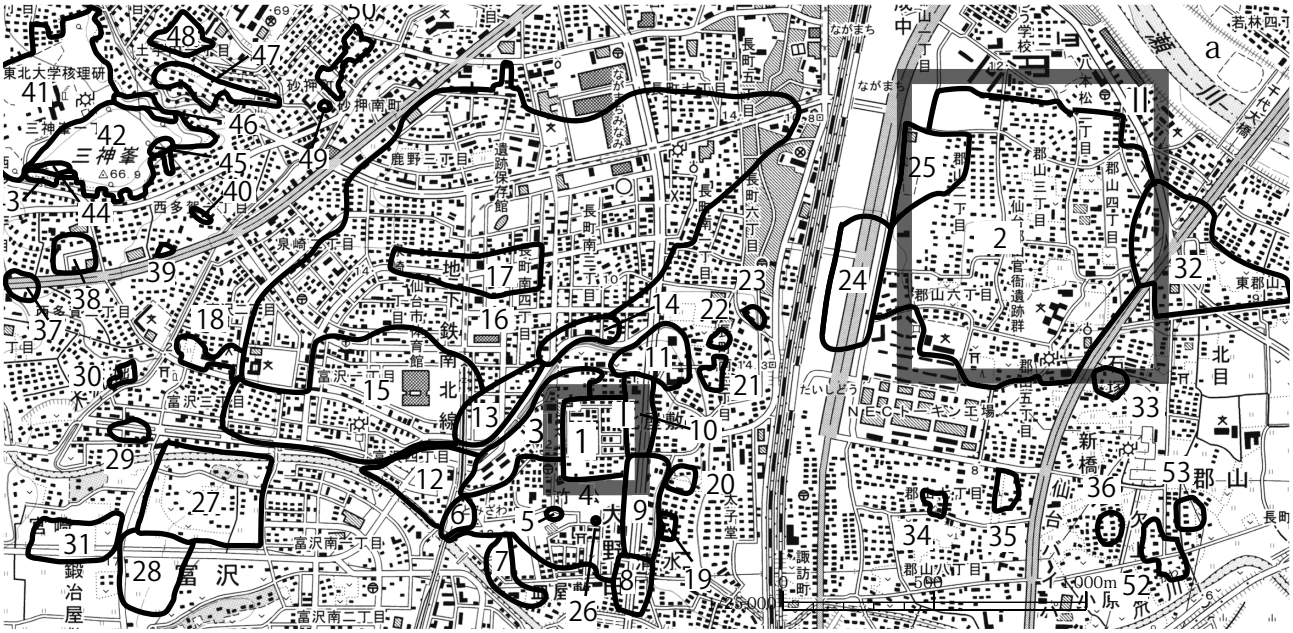
第Ⅳ章　太白区内の調査

第１節　概要

本件に係る太白区内で行われた調査は、表Ⅳ－１に示すとおりである。太白区内では第Ⅳ－１図のＡの区域内で６遺跡の調査を行っている。ａ区域内の大野田官衙遺跡、郡山遺跡、ｂ区域内の愛宕山横穴墓である。ここでは、大野田官衙遺跡第10次調査（Ｈ24－７）、第11次調査（Ｈ24－20）、第12次調査（Ｈ24－59）、愛宕山横穴墓（Ｈ24－40）の成果を報告する。郡山遺跡についてはⅤ章で紹介しているとおり、調査地点だけを示し、本書では報告しない。



第Ⅳ－１図　太白区東部と遺跡位置図の位置



第Ⅳ－２図　大野田官衙遺跡・郡山遺跡（Ⅴ章）と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	27	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳中期
2	郡山遺跡	官衙跡・包含地・寺院跡	自然堤防・後背湿地	縄文～奈良（初期）	28	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	平安
3	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	縄文～中世	29	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
4	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	30	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安
5	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中期	31	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代
6	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後、古墳～古代	32	北目城跡	城館跡・集落跡・水田跡	自然堤防	縄文後・弥生～近世
7	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代	33	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
8	皿屋敷遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代～中世	34	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安
9	王ノ壇遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～中世	35	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
10	大野田遺跡	祭祀・集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世	36	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳・奈良・平安
11	元袋遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世	37	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	古代
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良	38	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生～古墳、平安
13	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文～中世	39	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳～古代
14	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代	40	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安
15	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世	41	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文～弥生、平安
16	富沢遺跡	包含地・水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世	42	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、平安
17	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～古墳、平安、近世	43	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳～古代
18	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	古代	44	三神峯古墳群	円墳	丘陵	縄文、平安
19	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古代	45	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳中
20	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古代	46	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末
21	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代	47	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末
22	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代	48	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～古代
23	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代	49	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳
24	長町東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～奈良	50	砂押屋敷古墳	散布地	丘陵麓	古代
25	西台畑遺跡	包含地・甕棺墓	自然堤防	縄文～古墳	51	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安
26	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世	52	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良・平安

遺跡の位置と周辺の遺跡

表Ⅳ－１　太白区内の調査一覧

№.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査期間	備考	届出等№.
23－69	的場遺跡	77.4㎡	17.1㎡	12月19日		H23 106－226
23－71	郡山遺跡	67.5㎡	4.0㎡	12月５日	第214次	H23 106－235
23－72	郡山遺跡	66.1㎡	30.0㎡	12月６日～12月20日	第215次	H23 106－270
23－75	郡山遺跡	67.2㎡	22.1㎡	１月10日～１月16日	第217次	H23 206－275
23－80	中田北遺跡	114.5㎡	18.0㎡	１月16日		H23 106－310
23－83	郡山遺跡	72.9㎡	56.0㎡	１月10日～１月19日	第216次	H23 106－67
23－91	郡山遺跡	57.7㎡	32.0㎡	１月30日～２月６日	第218次	H23 106－333
23－98	郡山遺跡	68.0㎡	28.5㎡	３月５日～３月13日	第219次	H23 106－366
23－99	郡山遺跡	71.0㎡	37.1㎡	３月５日～３月19日	第220次	H23 106－380
23－100	郡山遺跡	103.7㎡	27.6㎡	３月５日～３月13日	第221次	H23 106－381
24－２	六反田遺跡	96.8㎡	24.8㎡	４月17日～４月19日		H23 106－358
24－５	六反田遺跡	81.2㎡	39.0㎡	５月７日		H24 122－32
24－７	大野田官衙遺跡	96.1㎡	20.4㎡	４月11日～４月12日	第10次	H24 122－8
24－９	北目城跡	149.9㎡	21.0㎡	４月19日		H24 122－20
24－12	郡山遺跡	65.8㎡	28.8㎡	５月16日～５月24日	第222次	H24 122－16
24－19	六反田遺跡	86.7㎡	24.2㎡	５月21日		H24 122－36
24－20	大野田官衙遺跡	76.1㎡	22.1㎡	５月22日～５月23日	第11次	H24 122－14
24－27	郡山遺跡	82.8㎡	24.0㎡	６月18日～６月26日	第223次	H24 122－33
24－30	中田南遺跡	90.5㎡	27.7㎡	６月25日		H24 122－75
24－31	六反田遺跡	123.9㎡	47.7㎡	７月５日～７月６日		H24 122－107
24－35	郡山遺跡	64.7㎡	21.0㎡	７月17日～７月26日	第226次	H24 122－72
24－38	郡山遺跡	78.0㎡	30.0㎡	７月26日～８月１日	第227次	H24 122－79
24－39	六反田遺跡	92.1㎡	29.0㎡	８月27日		H24 122－17
24－40	愛宕山横穴墓群	60.2㎡	39.8㎡	８月24日～８月29日	第６次	H24 122－112
24－44	郡山遺跡	59.7㎡	27.0㎡	８月20日～８月27日	第228次	H24 122－97
24－45	長町南遺跡	52.2㎡	14.5㎡	９月３日		H24 122－156
24－51	郡山遺跡	67.0㎡	30.0㎡	９月３日～９月10日	第229次	H24 122－130
24－56	郡山遺跡	92.7㎡	60.7㎡	10月10日～10月15日	第233次	H24 122－231
24－59	大野田官衙遺跡	85.6㎡	27.0㎡	10月16日	第12次	H24 122－224

第２節　大野田官衙遺跡

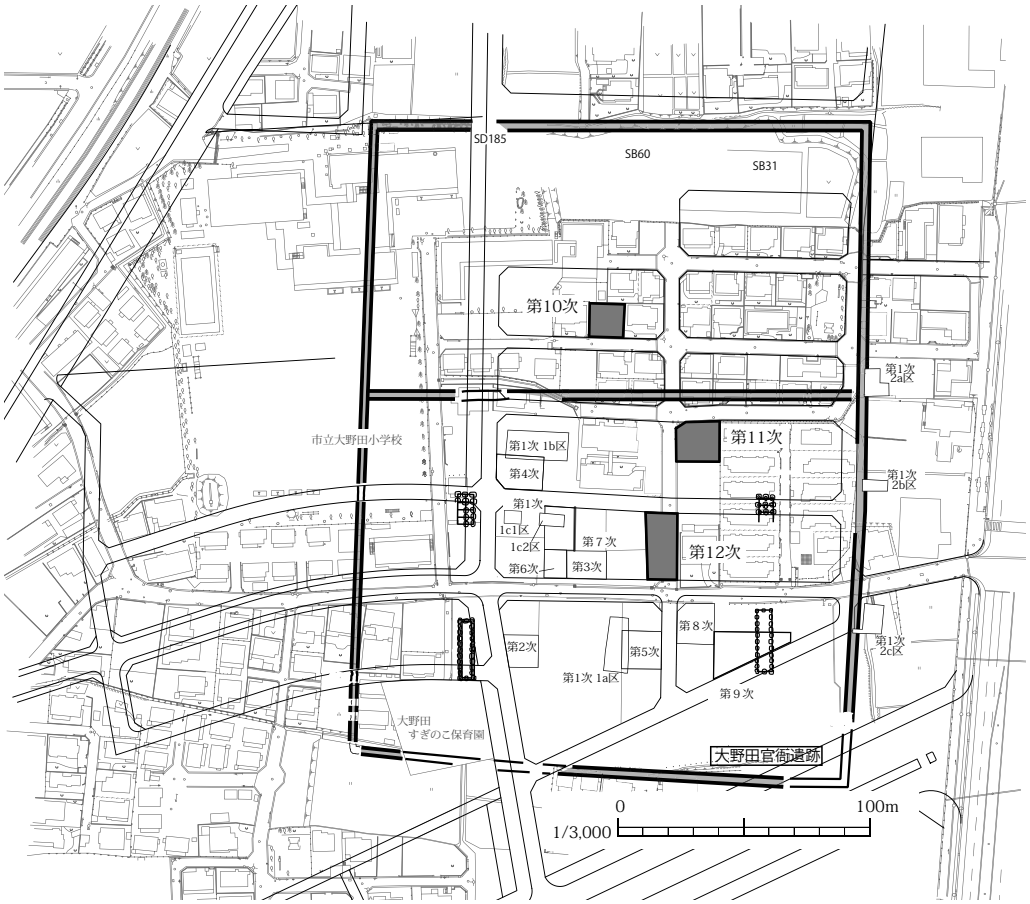
１　遺跡の概要

大野田官衙遺跡は、宮城県仙台市太白区大野田に所在する。ＪＲ仙台駅の南約5.2kmに位置し、名取川と笊川に挟まれた自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約0.19km、南北約0.26kmで、標高は約10～12mである。

周辺には元袋遺跡、袋前遺跡、六反田遺跡、大野田古墳群、王ノ壇遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡、伊古田Ｂ遺跡などが隣接して分布し、平成６年度以降、土地区画整理事業に伴い、継続して発掘調査が行われている。これまでの調査では、縄文時代、古墳時代、古代の集落跡が確認され、さらに古墳時代の石棺墓や木棺墓、円墳、平安時代の水田跡も調査されている。

大野田官衙遺跡は、地下鉄富沢駅周辺の土地区画整理事業に伴う発掘調査の中で発見された官衙遺跡である。平成21年度には、官衙関連遺構が確認されている範囲が「大野田官衙遺跡」として登録されている。これまでの調査で、６棟の大型掘立柱建物跡とそれを方形に囲む溝跡が確認されている。発見された６棟の掘立柱建物跡は、概ね真北を基準とする南北棟で、規則的に配置されている。東西列の建物は、構造や規模を同じくする掘立柱建物跡が向かい合って配置される。その最も北側の建物の間には東西中軸線上に、さらに建物が配置されている。さらに溝跡に区画された内部には、東西方向の溝跡が確認され、内部を南北に区画する施設の可能性がある。

これら大野田官衙関連遺構の遺物出土量は比較的少ないが、遺跡の位置関係や建物の基準が真北で共通することから、７世紀～８世紀初頃の陸奥国府と推定される郡山遺跡Ⅱ期官衙との関連性が指摘されており、その廃絶については、出土遺物の検討から８世紀初頭あるいは８世紀中葉と考えられている（仙台市教育委員会2011）。



第Ⅳ－３図　大野田官衙遺跡第10次～12次調査と近隣調査区の位置

2　第10次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　大野田官衙遺跡（宮城県遺跡登録番号01566）
調 査 地 点　　仙台市太白区大野田字袋前30－22
調 査 期 間　　平成24年４月11日～12日
調査対象面積　　96.1㎡
調 査 面 積　　20.4㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　小泉博明　　文化財教諭　伊藤翔太

（2）調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の中央部やや北よりに位置する。確認調査は平成24年４月11日に着手した。個人住宅建築範囲内に、南北3.0m×東西6.8mの調査区を設定し、盛土および基本層Ⅰ、Ⅳ層を重機と人力で除去した。遺構検出作業は基本層Ⅴ層上面で行い、溝跡１条を検出した。４月12日に調査区の埋め戻しが完了し、調査を終了した。

（3）基本層序

基本層は、３層を確認した。富沢駅周辺では、区画整理事業に伴い、平成６年度から継続して発掘調査が行われている。ここでは、富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡の調査成果にもとづいて基本層を記述する。Ⅰ層はオリーブ灰色を呈するシルトで、均質である。盛土以前の水田耕作土である。Ⅳ層は黒褐色を呈するシルトで、灰オリーブ色の粘土を斑状に含む。周辺の調査成果から、古墳時代から平安時代にかけての畑地耕作土およびその母材となった土壌と考えられる。Ⅴ層はオリーブ灰色を呈する粘土である。本層上面が古墳時代から10世紀前半以前の古代の遺構検出面である。基本層Ⅱ層およびⅢ層は確認されなかった。また、今回の調査地点における宅地造成に伴う盛土は、平均して1.60mほどである。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	5GY5/1	オリーブ灰色	シルト	均質。
Ⅳ	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	オリーブ灰色(10Y5/2)粘土を斑状に含む。
Ⅴ	10Y5/2	オリーブ灰色	粘土	

（4）発見遺構と出土遺物

遺構面は、基本層Ⅴ層上面である。溝跡１条を検出した。遺物は、Ⅳ層からロクロ土師器が出土した。

第１号溝跡　ＳＤ１

調査区東半部で検出した南北方向の溝跡である。検出長は約0.80mで、さらに調査区外南へ延びる。規模は上端幅約0.25m、下端幅約0.20mで、深さ約0. 10mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、Ⅴ層起源の粘土をブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ１溝跡の時期は、これまでの富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果と基本層との関係から、概ね古代に属するものと考えられる。

（5）遺構外出土遺物

Ⅳ層からロクロ土師器坏が４点出土している。いずれも破片資料であることから、図示はできない。全体の器形を捉えることはできないが、平安時代に属するものである。

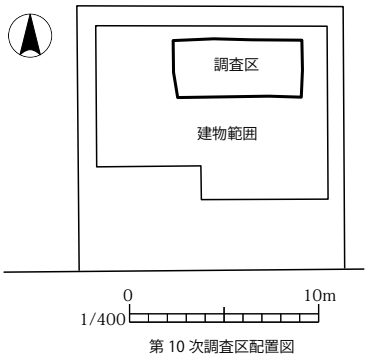
（6）まとめ

今回の調査では、基本層Ⅴ層上面で、溝跡１条を検出した。周辺の調査成果から、古代の畑耕作に関わる遺構：小溝状遺構群の一部：小溝と考えられ、畑域の広がりを示している。一方、大野田官衙跡に関連する遺構、遺物は発見されなかった。

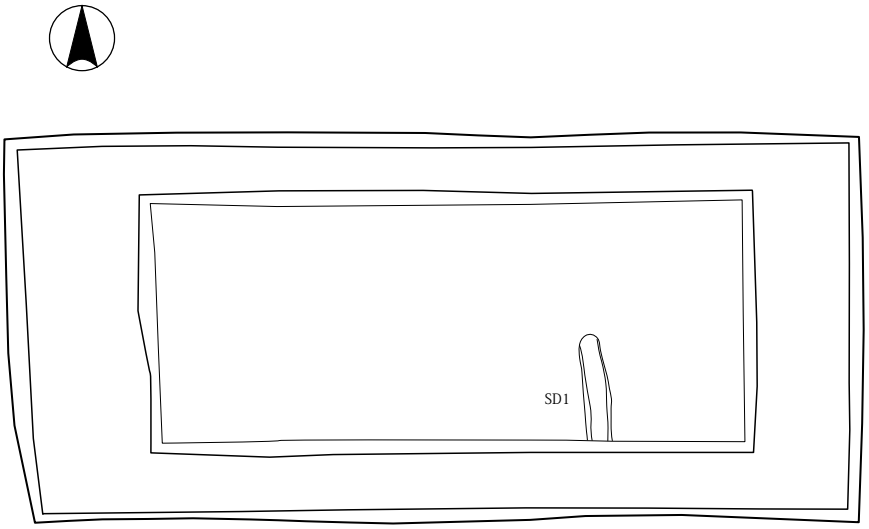
土層注記

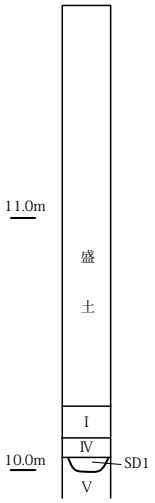
SD1

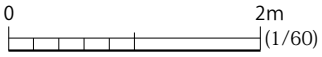
層位	マンセル	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	黒褐色(2.5Y3/2)シルトをブロック状に含む。

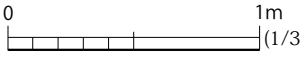


第 10 次調査区配置図









第Ⅳ－４図　大野田官衙遺跡第10次調査

調査区全景（東）

調査区南壁断面（北西）

調査区南壁断面（北東）

写真図版Ⅳ－１

3　第11次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　　大野田官衙遺跡（宮城県遺跡登録番号01566）
調 査 地 点　　仙台市太白区大野田字竹松15番７の一部
調 査 期 間　　平成24年５月22日～23日
調査対象面積　　76.1㎡
調 査 面 積　　29.4㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築工事
担 当 職 員　　主事　水野一夫　　文化財教諭　千葉悟

2　調査地点と調査経過

対象地は官衙の中央を東西に横走する溝の南側で、官衙の南北中心線のやや東側に位置している。確認調査は平成24年５月22日に着手した。対象範囲内に南北3.0m×東西7.0mの調査区を設定した。

重機で表土および盛土を掘削し、現地表下（ＧＬ－）1.2mのⅣ層上面では遺構は検出されず、ＧＬ－1.5mのⅤ層上面で遺構が検出された。調査終了後、埋め戻しを行い撤収した。

3　基本層序

基本層は、大別３層、細別６層を確認した。細分されたのはⅠ層ａ～ｄである。厚く盛られた砕石層の下に粘土で造成した整地層があり、その下に整地以前まで存続していたと考えられる水田耕作土、さらに下層にその床土と考えられる層がある。Ⅰ層の下は直ぐに富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡基本層Ⅳ層、その下層には基本層Ⅴ層がある。今回すべての遺構はⅤ層面で確認している。

層	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰa	7.5Y3/2	オリーブ黒色		砕石
Ⅰb	10YR7/8	黄橙色		粘土整地層
Ⅰc	7.5Y5/1	灰色	シルト	近代以降のゴミ含む水田層
Ⅰd	10YR4/6	褐色	粘土	整地前の水田床土
Ⅳ	10YR3/3	暗褐色	腐食質土	富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡基本層Ⅳ層
Ⅴ	7.5YR4/6	褐色	シルト	富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡基本層Ⅴ層

（4）発見遺構と出土遺物

遺構面は、Ⅴ層上面である。検出した遺構は、小溝状遺構群５群（Ａ～Ｅ群）、ピット３基である。小溝状遺構群については新しい順に報告する。

小溝状遺構群Ａ

図中Ａと表記したもので、南北1.00m、東西1.80mの範囲に、南北方向の小溝３条からなる。調査区北西で検出した。各溝は概ね幅0.23m、深さ0.2m程度。小溝状遺構群Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、ピット３との重複があり、すべてに対して新しい。堆積土はⅣ層と類似する。

小溝状遺構群Ｂ

図中Ｂと表記したもので、南北3.20m、東西5.60mの範囲に、南北方向の小溝７条からなる。調査区のほぼ全面で検出した。各溝は概ね幅0.45～0.35m、深さ0.15m程度。小溝状遺構群Ａ、Ｃ、Ｄ、Ｅとの重複があり、Ａより古く、他に対して新しい。堆積土はⅣ層と類似する。

小溝状遺構群Ｃ

図中Ｃと表記したもので、南北2.50m、東西1.20mの範囲に、南北方向の小溝２条からなる。調査区北西で検出した。各溝は概ね幅0.35m、深さ0.15m程度。小溝状遺構群Ａ、Ｄ、Ｅとの重複があり、Ａより古く、他に対して新しい。堆積土はⅣ層に類似する。

小溝状遺構群Ｄ

図中Ｄと表記したもので、南北方向の小溝１条からなる。調査区北西で検出した。溝は概ね長さ1.13m、幅0.31m、深さ0.07m程度。小溝状遺構群Ａ、Ｃ、Ｅとの重複があり、Ａ、Ｃより古く、Ｅに対して新しい。堆積土はⅣ層に類似する。

小溝状遺構群Ｅ

図中Ｅと表記したもので、南北3.00m、東西6.00mの範囲に、東西方向の小溝３条からなる。調査区全体で検出した。各溝は概ね幅0.30m、深さ0.15m程度。小溝状遺構群Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄとの重複があり、全てに対して古い。堆積土はⅣ層に類似する。

ピット

３基確認した、Ｐ１、Ｐ２は、検出面で方形を呈するが、向きが不揃いで組み合うものかは不明である。Ｐ３は調査区北西部小溝群Ａを完掘して検出した。断面形は、やや先細る。

（５）遺構外出土遺物

遺物は、Ⅳ層から、土師器片がごく少量出土した。

（６）まとめ

今回の調査では、基本層Ⅴ層上面で小溝状遺構群５群（東西方向Ｅ群、南北方向：Ａ～Ｄ群）、ピット３基を検出した。

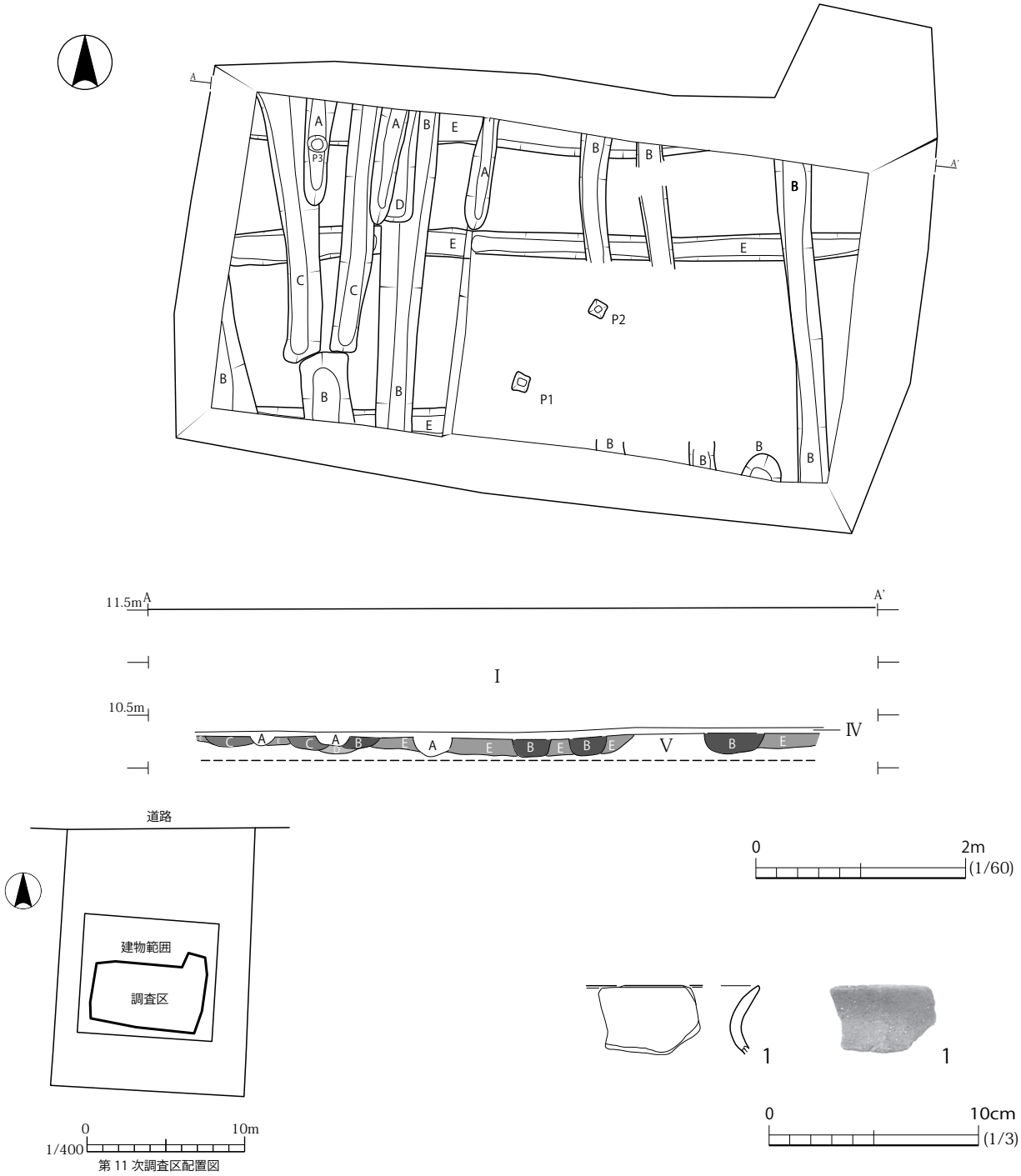
これらの小溝状遺構群は、畑耕作に関わる遺構と考えられている。溝にはⅤ層に対して浅いものと深いものとがあり、耕作単位が読み取れる可能性もあるが、今回の調査ではわからなかった。

ピットは平面形が四角いもの２基、円形のもの１基であるが、組み合わせなどは不明である。堆積土は、すべてⅣ層に類似する。また、今回の調査では、大野田官衙に関連する遺構は発見されなかった。

遺物は基本層Ⅳ層から土師器がごく少量出土しているが、すべて破片資料である。

遺物観察表

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
Ⅳ－5－1	Ⅳ－5－1	C－1		Ⅳ層	土師器	甕	一部	－	－	(3.2)				器面摩滅



第Ⅳ－５図　大野田官衙遺跡第11次調査

調査区全景（北から）

遺構完掘状況（西から）

南側断面東側（北から）

写真図版Ⅳ－２

南側断面西側（北から）

西側断面（東から）

北西部完掘断面（南から）

写真図版Ⅳ－３

4　第12次調査

（1）調査要項

遺　跡　名　大野田官衙遺跡（宮城県遺跡登録番号01566）
調 査 地 点　仙台市太白区大野田字竹松14－1の一部、15－9の一部、15－10の一部、15－16の一部（15街区5画地）
調 査 期 間　平成24年10月16日
調査対象面積　85.6㎡
調 査 面 積　27.0㎡
調 査 原 因　個人住宅建築工事
担 当 職 員　主査　平間亮輔　　文化財教諭　橋本勇人

2　調査地点と調査経過

対象地は、遺跡の中央部南寄りに位置する。調査は平成24年10月16日に実施した。建築範囲内に東西3ｍ×南北9ｍの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層を除去した。遺構確認作業は基本層Ⅴ層上面で実施したが、遺構・遺物とも皆無であった。調査では、Ⅴ層上面の写真撮影を行い、平面略図および土層柱状図を作製し、同日中に調査区の埋め戻しを行い、終了した。

3　基本層序

基本層は2層を確認した。当該調査区の周辺では富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査が広範囲に行われているので、それらの基本層序を使用した。Ⅰ層は暗オリーブ褐色を呈する粘土で、層下面に酸化鉄の集積が認められる。調査区全域に分布する。盛土以前の水田耕作土である。Ⅴ層は褐色を呈する粘土で、調査区全域に分布する。周辺の調査では、本層上面が古墳時代から10世紀前半以前の遺構確認面である。今回の調査地点では、基本層Ⅱ～Ⅳ層は確認されなかった。また、宅地造成に伴う盛土の層厚は約0.70ｍである。

層位	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土	水田耕作土。
Ⅴ	10YR4/4	褐色	粘土	

（4）発見遺構と出土遺物

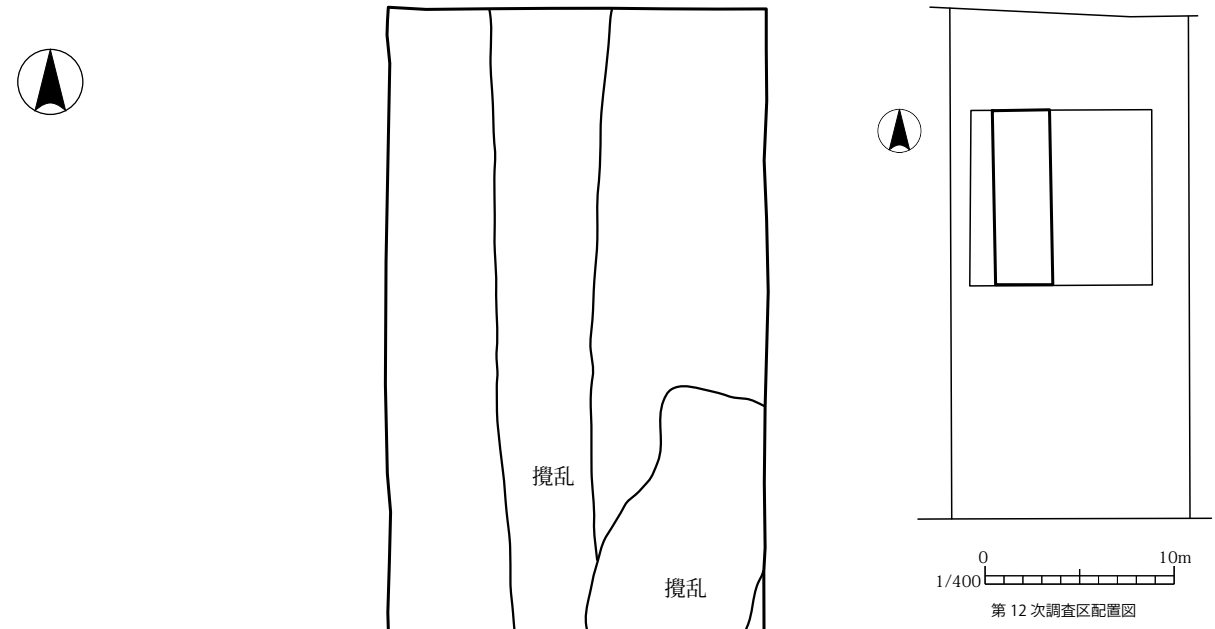
遺構は検出していない。

（5）遺構外出土遺物

遺物は出土しなかった。

6　まとめ

遺構・遺物ともに認められなかった。



第Ⅳ－６図　大野田官衙遺跡第12次調査

調査区全景（南から）

調査区西壁断面（東から）

写真図版Ⅳ－４

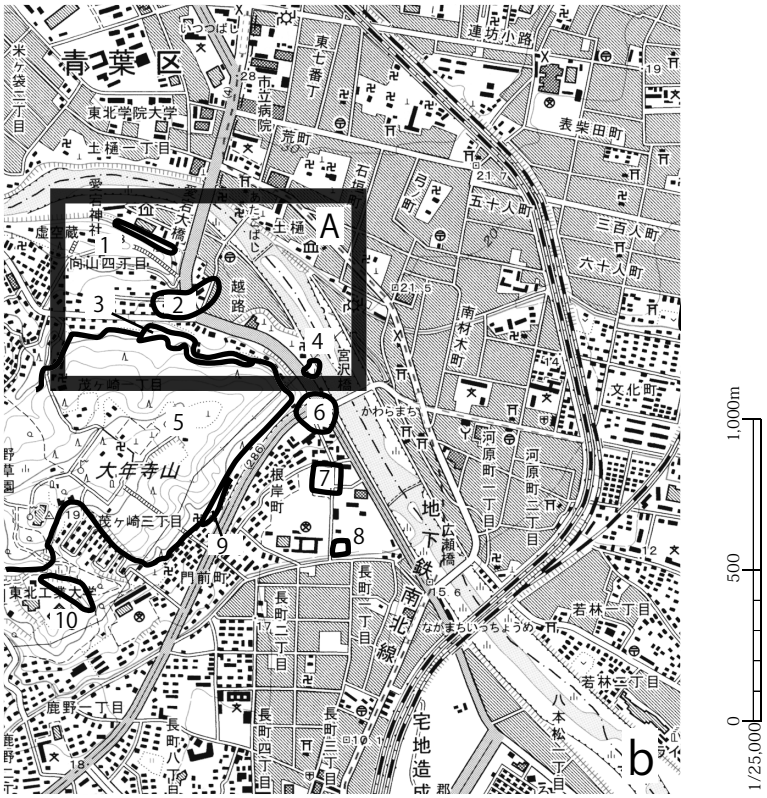
第３節　愛宕山横穴墓群

１　遺跡の概要

愛宕山横穴墓群は、宮城県仙台市太白区向山４丁目、越路に位置する。ＪＲ仙台駅の南約2.5kmにあたり、広瀬川右岸の愛宕山丘陵下部の斜面に立地する。標高は25～26mほどである。遺跡は、愛宕山北斜面の愛宕山横穴墓群Ａ地点と南斜面の愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点に大別される。また、愛宕山の南に位置する大年寺山の丘陵斜面には、大年寺横穴墓群、茂ヶ崎横穴墓群、二ツ沢横穴墓群などがあり、愛宕山と大年寺山の丘陵裾部を取り囲むように横穴墓群が分布している。

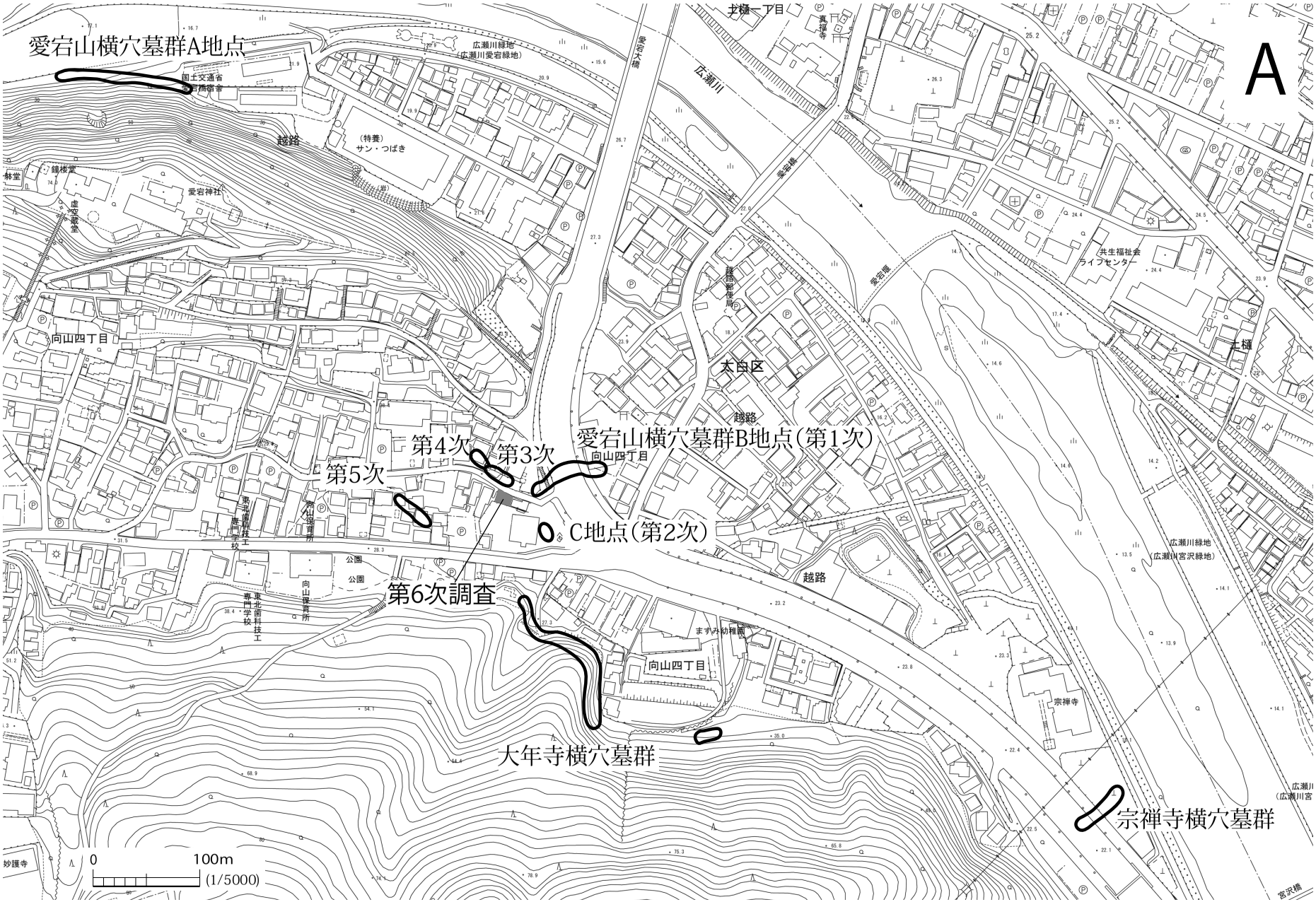
愛宕山横穴墓群では、昭和48年（1973年）の第１次調査以降、６次にわたる発掘調査が行われている。現在までに、愛宕山横穴墓群Ａ地点では２基の横穴墓の測量などの調査が行われ、愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点では33基の横穴墓が調査されている。この愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点に位置する第２次調査では、玄室奥壁に赤色顔料で文様を描いた装飾古墳が発見されている。

出土遺物には、被葬者とみられる人骨や土器類などの副葬品がある。出土した土器類の特徴から、遺跡の南東約2.0kmに位置する郡山遺跡との関連が指摘されている。



第Ⅳ－７図　愛宕山横穴墓群と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵北東斜面	古墳末
2	愛宕山横穴墓群B･C地点	横穴墓	丘陵南東斜面	古墳末･奈良
3	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵北斜面	古墳後期
4	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳後期
5	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
6	根岸遺跡	集落跡	段丘	縄文中
7	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳中
8	小兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
9	杉土手(鹿除土手)	土手	丘陵､段丘	近世
10	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳末



図中範囲は遺跡範囲ではなく横穴墓検出範囲

第Ⅳ－８図　愛宕山横穴墓第６次調査区と周辺横穴墓

2　第６次調査

（１）調査要項

遺　跡　名　　愛宕山横穴墓群（宮城県遺跡登録番号01196）
調 査 地 点　　仙台市太白区向山４丁目92－４
調 査 期 間　　平成24年８月24日～８月29日
調査対象面積　　60.2㎡
調 査 面 積　　39.8㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
担 当 職 員　　主事　水野一夫　　文化財教諭　千葉悟

（２）調査地点と調査経過

愛宕山横穴墓群Ｂ地点で行われた第３次・第４次調査において、横穴墓が19基、ほぼ同じ標高で横並びで検出されている。また、第５次調査において、より標高の低い場所に埋没する横穴墓が列をなす事がわかり、深く狭小な谷地形の南北両岸に横穴墓が幾列にもわたって分布している可能性が指摘されている。

今回の対象地は、愛宕山横穴墓群Ｂ地点第３次調査の南に位置する。現地は北から南へ急な傾斜で下る。第３次調査の１段下における、横穴墓列の有無の確認が調査の主な目的である。

調査対象地は狭小の傾斜地で、調査は半分ずつの反転調査とした。現況から1.0ｍまで掘削したところ、まだ盛土から旧表土の範囲であったため、全周0.5ｍ調査区を狭くして二段堀とした。二段目を0.1ｍ程度下げたところで水が湧き始め、Ｖ層で基盤面（第三紀層）となった。

（３）基本層序

基本層は大別５層、細別６層を確認した。Ⅰ層は直近まで存在していた住居の造成土である。Ⅱ層についても盛土ないしは再堆積層である。Ⅲ層は性格不明遺構の上面にレンズ状堆積することから、腐食質土混じりの自然堆積と考えられる。Ⅳ層は性格不明遺構の落ち際に流れ込む自然堆積土と同一の層である。Ⅴ層は凝灰岩層である。

層	マンセル	土色	土質	備考
Ⅰ				盛土
Ⅱ	10YR3/3	暗褐色	シルト	小礫中量混入
Ⅲ	10YR2/2	黒褐色	シルト	自然堆積　腐食質土主体
Ⅳ	10YR3/4	暗褐色	シルト	小河川転礫含む
Ⅴ	2.5Y5/4	黄褐色	砂状	軽石等含む。砂が丸くなく河川由来ではない可能性あり
Ⅴ'	10YR5/4	にぶい黄褐色	漸移層	Ⅳ～Ⅴの一部で確認

（４）発見遺構と出土遺物

遺構面はⅤ層上面である。土坑２基、性格不明遺構１基を検出した。

第１号土坑　ＳＫ１

調査区西壁に一部かかる状態で検出した。調査した範囲では、円形の土坑と考えられる。規模は0.7ｍ程度、深さ0.3ｍ程度である。

第２号土坑　ＳＫ２

ＳＸ１と重複し、ＳＸ１より古い。平面形は角丸方形で、規模は東西1.0ｍ、南北0.6ｍ、深さ0.35ｍである。縄文土器片１点と剥片１点が出土した。

第１号性格不明遺構　ＳＸ１

ＳＫ２と重複し、ＳＫ２より新しい。浅い溝状を呈し、急傾斜の方向に沿い北から南へと下る。規模は幅２ｍ、長さ３ｍ程度で深さは0.3ｍ程度である。底面から40㎝ 大までの河川転礫が大量に出土したが、石畳のように人為的に並べたといった様子は無かった。一方で横穴墓が検出されている傾斜地の高いほうへのびており、下端部は土坑状を呈する。

（５）遺構外出土遺物

遺構外から遺物は出土しなかった。

（６）まとめ

今回の調査では、横穴墓は検出されなかった。基本層Ⅴ層については、砂層として報告したが、軽石が一定量混ざり、削ると層状に剥離する様子がある。湧水から想像するに、水に浸かり続けていることで、横穴墓が設けられている岩盤が分解しやすくなった状態である可能性が高い。ＳＫ１は横穴墓の天井崩落の可能性を考えて調査したが、下面で広がることはなかった。

基本層Ⅴ層上面で検出された遺構のうち、ＳＫ２から縄文土器の破片が出土したことから、周辺に、当該時期の遺跡が存在している可能性がある。

土層注記

SK1

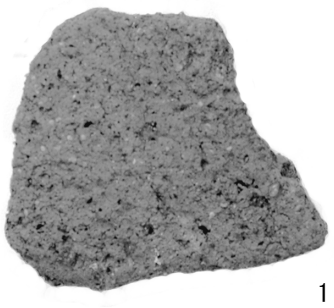
層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR3/4	暗褐色	シルト	Ⅳ層近似

SK3

層	マンセル	土色	土質	備考
1	10YR2/2	黒褐色	シルト	自然堆積　腐食質土主体 Ⅲ層近似

遺物観察表

掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			特徴・備考
								長	幅	厚	外	内	底	
	Ⅳ－5－1	A－1	SK2	1層	縄文土器	鉢	一部	－	－	－				

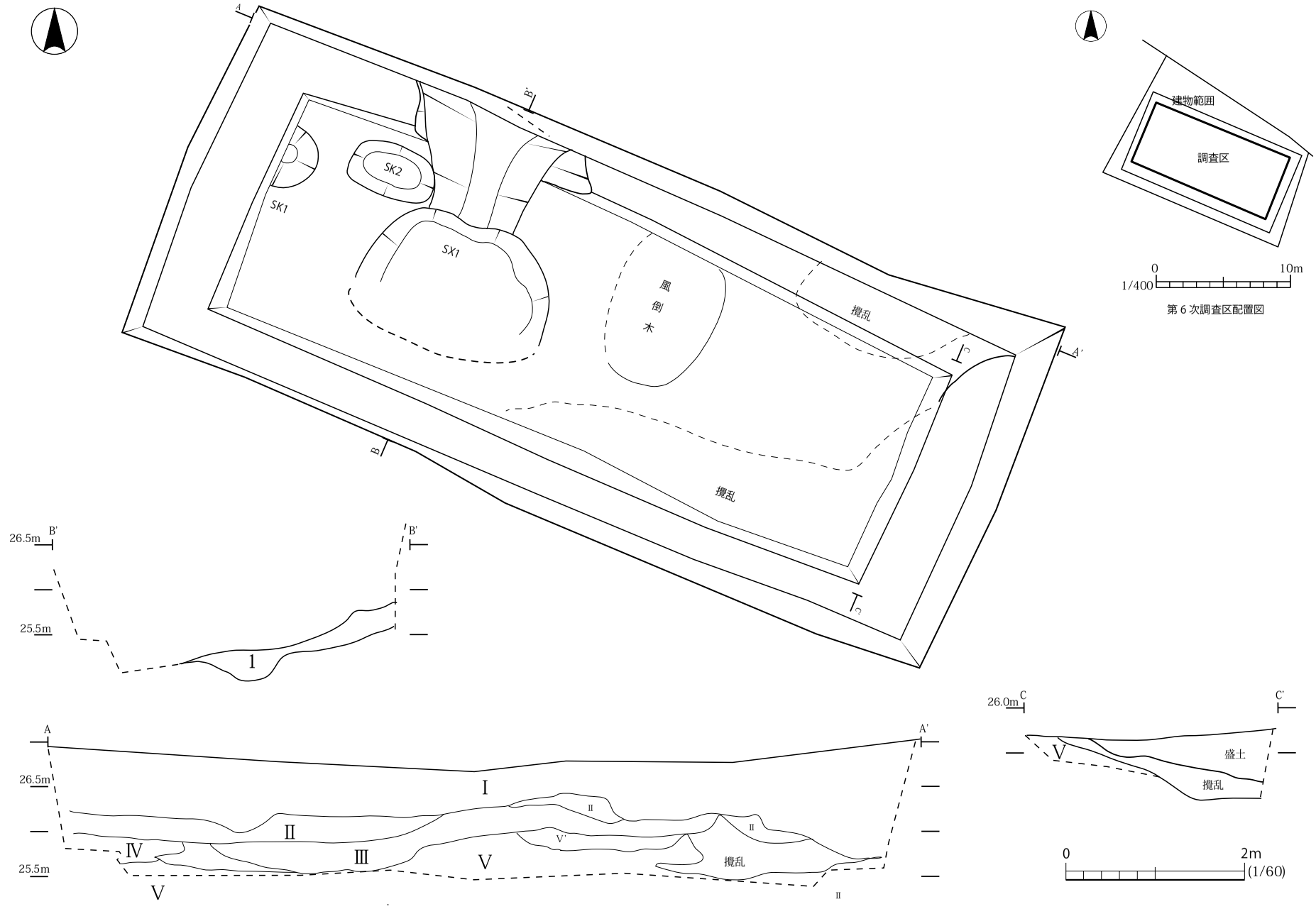


1

0　2cm

(1/1)

写真図版Ⅳ－５



第Ⅳ－9図　愛宕山横穴墓第6次調査

調査区西側完掘（南西から）

調査区東側完掘（南東から）

SX1 礫出土状況（南から）

写真図版Ⅳ－6

SX1 断面（東から）

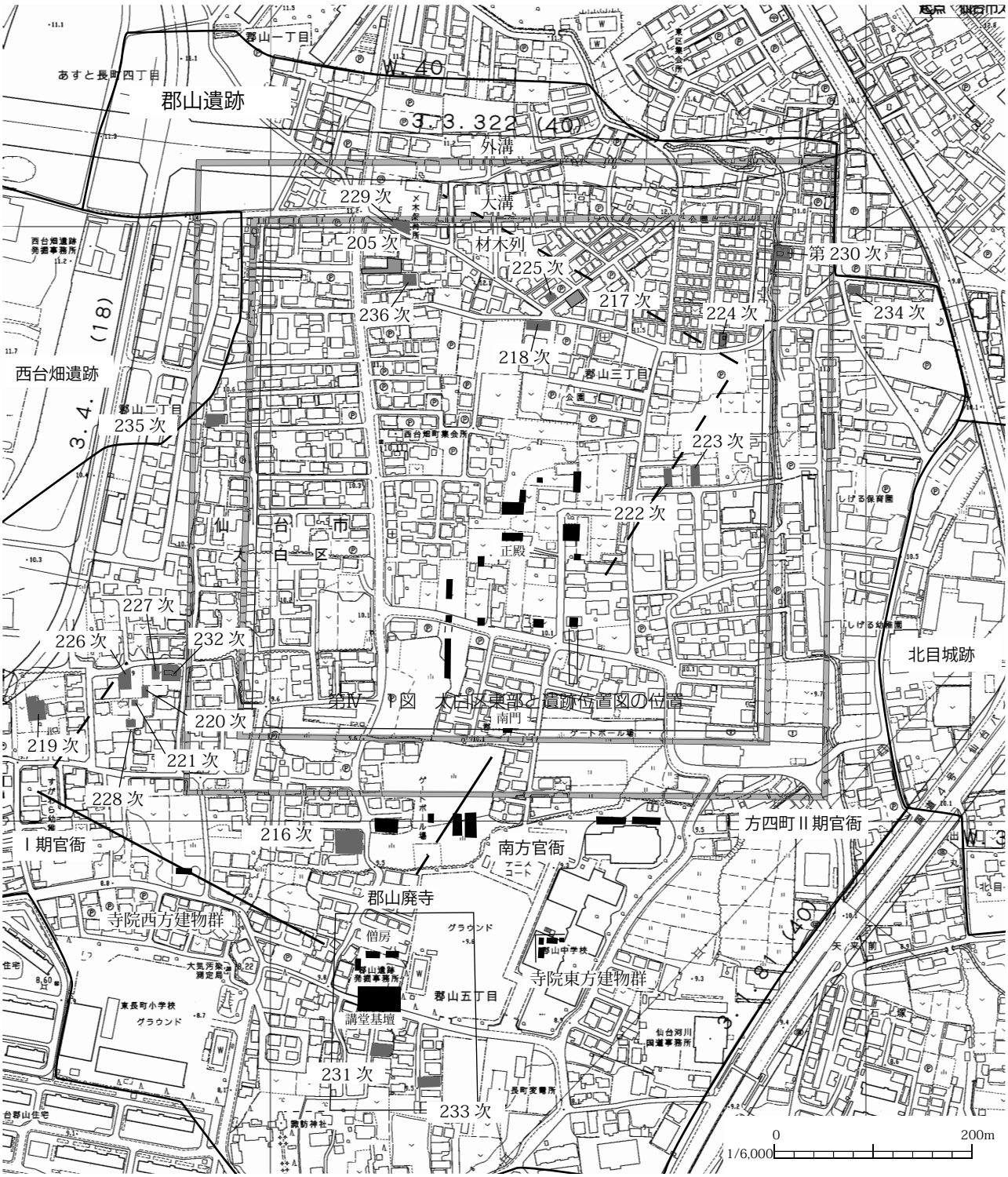
SK1 平面（南から）

SK1 断面（西から）

写真図版Ⅳ－7

第Ⅴ章　郡山遺跡の調査

郡山遺跡の本件に係る調査報告書は、遺跡の特殊性・継続性に鑑み別に作成するため、本書では取り扱わない。対象期間中に実施した調査地点のみ下図に示す。



第Ⅴ－１図　郡山遺跡と調査位置図

第Ⅵ章　総　括

平成24年度の調査件数は、平成25年２月末で40件（16遺跡）である。本書には、平成23年度後半を含めて、平成24年10月16日までに行った調査のなかで、別に報告される郡山遺跡を除き、15件を報告した。その成果は、以下のようにまとめられる。

１　宮城野区内の調査

（１）洞ノ口遺跡第19次調査

基本層Ⅱ層あるいはⅢ層上面で井戸跡１基、基本層Ⅳ層上面で溝跡１条、ＳＸ１性格不明遺構１基が検出され、基本層Ⅱ層が中世の耕作土と想定された。遺構群の変遷は、基本層Ⅳ層上面の遺構（古代）⇒基本層Ⅲ層上面の遺構（古代以降）⇒基本層Ⅱ層上面の遺構（中世以降）に分けられる。

第19次調査区は、遺跡のなかでも標高のやや高い微高地に立地しており、周辺の遺跡南端部では、この調査区から北方・北西方にやや離れた第１次調査11区など（仙台市教育委員会2005）で、基本層Ｖｂ層（平安時代前半の畑耕作土）⇒基本層Ｖａ層（平安時代後半の畑耕作土）⇒基本層Ｖａ層上面の遺構（平安時代の居住域）⇒基本層Ⅳｂ層上面の遺構（中世前半の居住域）⇒基本層Ⅳａ層上面の遺構（中世後半の居住域）⇒基本層Ⅲ層上面の遺構（近世前半の居住域）という変遷が明らかにされている。これに対して、第19次調査区周辺で行われた第14～18次調査（仙台市教育委員会2012ｂ）では、中世を主として、居住域の存在を示す複数時期の遺構群は検出されていたが、古代の遺構面は確認されていなかった。その点で、今回の調査は、今後、洞ノ口遺跡の微高地における遺構群全体の変遷を考えるうえで貴重な成果となった。

（２）鴻ノ巣遺跡第14次・17次・18次調査

第14次調査基本層Ⅱ層上面で溝跡１条、土坑２基、ピット３基、第17次調査基本層Ⅱ層上面で性格不明遺構１基、第18次調査基本層Ⅱ層上面でピット３基が検出された。鴻ノ巣遺跡では、これまでの調査で古墳時代前期から近世までの時期幅をもつが、今回の調査では、いずれも出土遺物が少なく、時期を特定することはできなかった。

（３）小鶴城跡第８次調査

盛土下の基本層Ⅰ層上面でＳＤ１溝跡、基本層Ⅱ層上面でＳＤ２溝跡、ＳＤ３溝跡が検出された。調査区は、小鶴城跡南部の丘陵裾部から約40m離れており、ＳＤ１溝跡（上端幅0.85m以上）は、遺跡の踏査やこれまでの調査で堀跡の存在が推定されていた位置にある。第８次調査区の西方約30mに位置する第７次調査（仙台市教育委員会2012ｄ）では、その延長と考えられるＳＤ１溝跡（上端幅4.95m以上）が検出されている。小鶴城跡のこれまでの調査では、三重に巡る堀跡の存在が推定されており、これらは、最も外側の堀跡である。また、ＳＤ２、ＳＤ３は、小溝状遺構群を構成する小溝の可能性がある。両者の芯芯距離は約75㎝である。

（４）稲荷館跡

Ⅱ層上面で溝跡１条が検出された。出土遺物が少なく、時期は不明である。

２　若林区内の調査

（１）南小泉遺跡第69～71次調査

遺跡中央部において、第69次調査では、基本層Ⅱ層上面で溝跡１条、ピット１基、基本層Ⅲ層上面で平安時代の竪穴住居跡１軒、溝跡８条、土坑５基など、第70次調査では、基本層Ⅲ層上面で溝跡１条、土坑３基（うち１基は古墳時代中期後半）、性格不明遺構１基など、遺跡西部の第71次調査では、基本層Ⅱ層上面で中世以降の溝跡１条、土坑３基などが検出されている。

中央部に位置する遠見塚古墳の周辺から西側一帯は、古くからの調査で、古墳時代中期から近世にかけての居住域の形成が明らかにされており、今回の各調査も同様の傾向にある。また、第69次調査Ⅲ層上面で溝跡及び土坑と報告された遺構のなかで、細長いＳＤ８～12、16、ＳＫ13～15などは、方向性をもっており、小溝状遺構群を構成する小溝の可能性がある。これらは、分布がＳＩ１竪穴住居跡の東辺とは重複しない関係にあり、ＳＫ15とＳＩ１の新旧関係から、時期は、ＳＩ１より新しいと推定される。

（２）沖野城跡第12次・第13次調査

第12次調査基本層Ⅱ層上面で土坑１基、ピット１基、第13次調査基本層Ⅳ層上面でピット４基が検出された。このうち、第12次調査のＳＫ１土坑からは、土師質土器の皿５点が出土した。沖野城跡との関連性はわからないが、今後、詳しい時期を検討していく必要がある。

３　太白区内の調査

（１）大野田官衙遺跡第10次・11次・12次調査

官衙跡に伴う遺構は検出されなかったが、第10次調査基本層Ⅴ層上面で溝跡１条、第11次調査基本層Ⅴ層上面で小溝状遺構群が５群検出された。第10次調査の溝跡には小溝の可能性が指摘されている。第12次調査では遺構は検出されていない。

大野田官衙遺跡の遺構群には、官衙を構成する掘立柱建物跡⇒鍛冶関連遺構⇒小溝状遺構群の変遷が認められ（仙台市教育委員会2011ａ）、官衙は８世紀第２四半期には廃絶していると考えられ、小溝状遺構群の時期は奈良時代以降となるが、第11次調査では、他の遺構との重複関係が確認されないことから、上限は明確でない。また、隣接する六反田遺跡や王ノ壇遺跡、大野田遺跡、大野田古墳群（仙台市教育委員会2010ａ）等でも、第11次調査のように、複数時期にわたる小溝状遺構群が検出されており、その性格が畑跡（註）に伴う耕作痕と理解されていることから、奈良・平安時代を中心とした生産域：畑域の形成が明らかにされている。これらは、集落の一部を構成しており、大野田官衙遺跡の西側に位置する六反田遺跡第９次調査（仙台市教育委員会2012ａ）では、８世紀から10世紀頃にかけて、居住域（竪穴住居跡・土坑：奈良時代）⇒生産域（小溝状遺構Ａ群）⇒居住域（掘立柱建物跡）⇒生産域（小溝状遺構Ｂ群）⇒居住域（掘立柱建物跡・溝跡・土坑）⇒生産域（小溝状遺構Ｃ群）⇒居住域（掘立柱建物跡・溝跡・土坑）⇒（十和田ａ火山灰：915年）⇒生産域（小溝状遺構Ｄ群）⇒居住域（溝跡・土坑等）の変遷が認められている。こうした地点的な調査事例の蓄積によって、集落の広がりと、その土地利用の実態が、より明らかになっていくと考える。

（２）愛宕山横穴墓群第６次調査

横穴墓は検出されなかったが、土坑２基と性格不明遺構１基を検出した。ＳＫ２土坑からは縄文土器の破片が出土しており、この時期の遺構の可能性がある。

以上、縄文時代から近世にかけての報告となったが、南小泉遺跡や洞ノ口遺跡の調査では居住域の存在が再確認されるとともに、大野田官衙遺跡など、複数の調査で小溝状遺構群及びその可能性のある遺構が検出された。これらの調査は、それぞれの面積は小さいが、それぞれに新たな発見があり、発掘調査の重要性を示している。

註：「小溝状遺構群」は、六反田遺跡の報告（仙台市教育委員会1981）で名称づけられ、「一般の小溝と異なり、少ないところで４～５本、多いところで15～16本、同じ方向で走るのが特徴」とされた遺構である。性格は、「畑の凹状の部分あるいは天地返し部分の可能性を含めて作物栽培に関係する」と考えられ、その後、下ノ内浦遺跡第４次調査で検出された６ｃ層畠跡（仙台市教育委員会1993）の調査事例などをとおして、畑の耕作土下面に形成される耕作痕と理解されており（佐藤2000）、畑作による生産域の存在を示す遺構と認識される。遺構としての「はたけ」跡は、水田跡に対して「陸田」跡とする考えもあるが、今日的な「はたけ」の用字は、「畑」と「畠」で、「焼畑」と区別されている。このうち、「畠」は、近年、韓国の伏岩里古墳群付近から出土した木簡（７世紀初頭の可能性）に認められ（李2010）、国字ではないことが知られた。そこには、「水田二形」、「畠一形」、「麦田一形半」とあり、「畠」と「麦田」が区別されている。現状では、「畠」は、文字の成立過程の再検討が必要であることが指摘されており（木村2010）、今日的な「はたけ」跡は、当面、「畑」を用い、「畑跡」としておくべきであろう。

引用・参考文献

木村茂光2010『日本農業史』吉川弘文館
佐藤甲二2000「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題－仙台市域の調査事例をとおして」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第１集
仙台市教育委員会1981『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集

仙台市教育委員会1983『岩切畑中遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第50集
仙台市教育委員会1985『仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第84集
仙台市教育委員会1993『下ノ内浦遺跡第４次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第173集
仙台市教育委員会1994『愛宕山横穴墓群第３次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第187集
仙台市教育委員会2004『鴻ノ巣遺跡第７次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集
仙台市教育委員会2005『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書第281集
仙台市教育委員会2009「沖野城跡第３次調査」『仙台平野の遺跡群ⅩⅨ』仙台市文化財調査報告書第346集
仙台市教育委員会2010ａ『大野田古墳群第18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第364集
仙台市教育委員会2010ｂ「沖野城跡第５次調査」『上野遺跡他』仙台市文化財調査報告書第372集
仙台市教育委員会2010ｃ「愛宕山横穴墓群第５次調査」『上野遺跡他』仙台市文化財調査報告書第372集
仙台市教育委員会2011ａ『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第390集
仙台市教育委員会2011ｂ「小鶴城跡第４次調査」『法領塚古墳他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第393集
仙台市教育委員会2012ａ『六反田遺跡第９次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第398集
仙台市教育委員会2012ｂ「洞ノ口遺跡第14～18次調査」『仙台平野の遺跡群22』仙台市文化財調査報告書第404集
仙台市教育委員会2012ｃ「沖野城跡第６～11次調査」『仙台平野の遺跡群22』仙台市文化財調査報告書第404集
仙台市教育委員会2012ｄ「小鶴城跡第６～７次調査」『仙台平野の遺跡群22』仙台市文化財調査報告書第404集
仙台市教育委員会2012ｅ「郡山遺跡第208次調査」『郡山遺跡他』仙台市文化財調査報告書第405集
李　成市2010「東アジアの木簡文化」『木簡から古代がみえる』岩波新書№1256

報 告 書 抄 録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん
書名	仙台平野の遺跡群
副書名	平成24年度　個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書
巻次	23
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第415集
編著者名	小泉博明　水野一夫　佐藤高陽　橋本勇人　千葉悟　伊藤翔太　及川謙作　鈴木隆　斎野裕彦
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－0811　仙台市青葉区一番町４丁目１－25　東二番丁スクエア　３階　Tel：022－214－8894
発行年月日	平成25年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	要約							
こづるじょうあと 小鶴城跡 （８次）	せんだいしみやぎのくしんでんさんちょうめ 仙台市宮城野区新田三丁目	4100	01194	38°16′44″	140°55′45″	2012. 02. 06 2012. 02. 08	19. 5㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	城館	中世		溝跡３		なし		
	城跡に伴う堀跡を１条検出した。							
どうのくちいせき 洞ノ口遺跡 （19次）	せんだいしみやぎのくいわきりあざどうのくち 仙台市宮城野区岩切字洞ノ口	4100	01372	38°18′9″	140°57′6″	2012. 05. 14 2012. 05. 16	30. 6㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落・城館・水田・屋敷	古墳～近世		井戸跡１・溝状遺構1・性格不明遺構1		陶器・土師器・須恵器		
	遺跡南端部で古代と中世の遺構面を確認した。							
こうのすいせき 鴻ノ巣遺跡 （14次）	せんだいしみやぎのくいわきりあざこうのす 仙台市宮城野区岩切字鴻巣	4100	01034	38°17′53″	140°57′4″	2012. 09. 13	11. 3㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落・屋敷・水田	弥生～中世		溝跡１・土坑2・ピット3		なし		
こうのすいせき 鴻ノ巣遺跡 （17次）	せんだいしみやぎのくいわきりあざこうのす 仙台市宮城野区岩切字鴻巣	4100	01034	38°17′53″	140°57′4″	2012. 01. 23 2012. 01. 24	17. 0㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落・屋敷・水田	弥生～中世		性格不明遺構１基		なし		
こうのすいせき 鴻ノ巣遺跡 （18次）	せんだいしみやぎのくいわきりあざこうのす 仙台市宮城野区岩切字鴻巣	4100	01034	38°17′53″	140°57′4″	2012. 01. 30	19. 8㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落・屋敷・水田	弥生～中世		ピット３基		なし		
	中世以降の溝跡を１条検出した。							
いなりたてあと 稲荷館跡 （１次）	せんだいしみやぎのく 仙台市宮城野区	4100	01224	38°17′55″	140°56′4″	2012. 02. 13	36. 3㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	城館跡	中世		溝跡１		陶器		
	中世以降の溝跡を１条検出した。							
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡 （69次）	せんだいしわかばやしくとおみづかいっちょうめ 仙台市若林区遠見塚一丁目	4100	01021	38°14′9″	140°54′39″	2012. 01. 10 2012. 01. 13	34. 3㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落	弥生～近世		竪穴住居跡１・焼土遺構1・溝跡9・土坑5・ピット6		土師器		
	平安時代の竪穴住居跡１軒とそれよりも新しい小溝状遺構群を検出した。							
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡 （70次）	せんだいしわかばやしくとおみづかいっちょうめ 仙台市若林区遠見塚一丁目	4100	01021	38°14′12″	140°54′38″	2012. 01. 24 2012. 01. 25	24. 6㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落	弥生～近世		溝跡１・土坑3・性格不明遺構1・ピット6		土師器・石器		
	古墳時代中期の可能性がある土坑を１基検出した。							
みなみこいずみいせき 南小泉遺跡 （71次）	せんだいしわかばやしくとおみづかいっちょうめ 仙台市若林区遠見塚一丁目	4100	01021	38°14′13″	140°54′25″	2012. 02. 06 2012. 02. 09	12. 1㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落	弥生～近世		溝跡1・土坑3・ピット3		土師器・須恵器・中世陶器		
	中世以降の溝跡を１条検出した。							
おきのじょうあと 沖野城跡 （12次）	せんだいしわかばやしくおきのななちょうめ 仙台市若林区沖野七丁目	4100	01234	38°13′44″	140°55′3″	2012. 02. 28	31. 6㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	城館	中世		土坑１・ピット2		土師器		
	中世以降の土坑を１基検出し、土師質土器皿５点が堆積土から出土した。							
おきのじょうあと 沖野城跡 （14次）	せんだいしわかばやしくおきのななちょうめ 仙台市若林区沖野七丁目	4100	01234	38°13′44″	140°55′3″	2012. 02. 28	40. 1㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	城館	中世		ピット４基		銭貨		
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡 （10次）	せんだいしたいはくくおおのだあざふくまえ 仙台市太白区大野田字袋前	4100	01566	38°13′1″	140°52′33″	2012. 04. 11 2012. 04. 12	20. 4㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	官衙	古代		溝跡１		土師器		
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡 （11次）	せんだいしたいはくくおおのだあざたけまつ 仙台市太白区大野田字竹松	4100	01566	38°12′59″	140°52′35″	2012. 05. 22 2012. 05. 23	29. 4㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	集落・官衙	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世		小溝群４・性格不明遺構1・ピット3		土師器		
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡 （12次）	せんだいしたいはくくおおのだあざたけまつ 仙台市太白区大野田字竹松	4100	01566	38°12′58″	140°52′34″	2012. 10. 16	27㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	官衙	古代		なし		なし		
あたごやまよこあなぼぐん 愛宕山横穴墓群 （６次）	せんだいしたいはくくもかいやまよんちょうめ 仙台市太白区向山四丁目	4100	01196	38°14′38″	140°52′42″	2012. 08. 24 2012. 08. 29	39. 77㎡	記録保存 （個人住宅建築）
	横穴墓			土坑2・性格不明遺構1		土器・石器		
	ＳＫ２土坑から縄文土器が出土した。							

仙台市文化財調査報告書第415集

仙台平野の遺跡群23

平成24年度個人住宅他
－ 国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書 －

2013年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区一番町4丁目1－25
東二番丁スクエア
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目１－14
TEL 022（231）2245㈹